582-201
1200501522715
582
01

職工と微笑

松永延造著

陽堂版

331

笑微と工職

短篇集

松永延造著

春陽堂版

昭和三・一・二 帝國圖書館

582-201

序文

長い隱忍と孤獨の日を通り拔け、この一書を公表するに當つて、私は自らの過去を振り返りつゝ、盡きる事のない感慨に、暫くは時のたつのをも忘れむとしてゐる。

卷頭の中篇「職工と微笑」は私が初めて文壇に提出し、そして幸ひにも公平な批評家に依つて認定された作品であり、私がその以前に發表した長篇「夢を喰ふ人」と共に、私の出世作と呼ばる可き性質のものであらう。それ故この中篇が何んな經路を辿つて、活字に組まれる時を得たかに就いて、短い物語りを試みるのは、私の讀者に取つても多少興味ある事だらうと信ずる。

大層複雜な文壇の內情を、全然知らぬ譯でもなかつたから、この作の原稿が私の知友鈴木氏の手に依つて、中央公論社へ送附された後も、私は決して近々に好い便りを得るだらうとは空想してゐなかつた。と云ふよりは、寧ろ驕て來る可き傷ましい不結果を待ちわびるやうな心地で時を待つてゐた。それ故私が主幹、瀧田哲太郎氏へ差し出した懇願狀も極く力のないもので、今にして思へば、其處に羅列された文字は却つて主幹の不快を買ふ虞れがないでもなかつた。私は當然先方からの返書を期待する事が出來なかつたけれど、知友鈴木氏の忍耐深さは、共に私をもその圈內へ引き込む力を持つて

るたやうである。

斯うして私は三ヶ月に一度位づゝ、主幹へ懇願狀を差し出し、(何故なら私は骨症の爲め自身の足で出張する事が出來なかつたのである。)それとなく時の至るのを待つた。原稿を送つてから丁度一ヶ年を經た冬の事である。私の四通目の手紙に對する返書を私は初めて瀧田氏から受け取つた。それは極く簡單な走り書きで——氏自身も目下喘息や腎臟病に惱まされてゐる事、近い內湯治に旅立つから、その際、車中の閑暇を利用して、私の作品へ眼を通して呉れるだらうと云ふ事——がしたゝめてある丈だつた。

正直に語るなら、思ひまうけぬ此の便りは、樣々な野望を持ちつゝ、重い病ひのために、爲す所もなく、自然沈み勝ちとなつてゐた私の心を幾分明るくする事に役立つた。然しそれも束の間で、失意の日は私に最も馴染み深いものとして、その後も遠く續いて行つたのである。暗い所も眼に馴れゝば明るくなる。それと同じで、私に取つては自分の日々の生活がそれ程苦患とも思はれぬやうになつたけれど、その一方、私の宿痾は益す重り、終には私をして數通の遺書をさへ書かしむるやうな、極端な衰弱を持つて來た。正にその頃であつた。私の弟が新聞の廣告欄に私の名を認め、それを私に告げ知らせたので、私は初めて自分の作が中央公論の特別號へ掲載されたのを了解した譯であつた。云ふ迄もなく、瀧田氏からは前以て何の便りもなかつたのである。數へて見ると、初めて原稿を提出した

日からこの時迄、滿二年が經過してゐたので、私は自分の作が何んな書き振りであつたかをさへ忘失してゐた。

私は瀧田氏と深い交際を續けた譯ではないから、氏の人となりを知る由もないけれど、私の如く、當時文壇の圈外に流離して居た者の原稿をさへ、無駄には拒絕せず、時を計つて、發表の場所迄も與へて呉れたその公平な態度に對しては、思ひ出す度ごとに、感謝の念を禁じ得ない。漸くにして、この書の上梓を見る今日、瀧田氏が最早この世に居ぬと云ふ事は、何れ程大きな悲しみであらう。

さて其の後時々發表した私の諸作に對する批評は實に多樣なものであつた。(が、默殺となると、殆ど一樣のものだつた。之は極く面白い事で、若し色々な種類の默殺と云ふものがあらば、それ等を繪馬に描き取つて、物寂びた神社へ献納する事も出來よう。)然もそれ等批評の五割迄が好意に滿ちたものであるを知つた時、私は一しほ機會均等の歡喜を感ぜずには居られなかつた。

なほ苛酷を原因とする色々の誤解を前以て避けて置きたいため、私は自分の作品に對して次のやうな說明を此處に加へたく思ふ。

私の創作に馴染の淺い一部の讀者は「職工と微笑」の中に表れた多少病的な傾向(と云つても讀者の腦髓を痛める程のものではない。)を或る場合に於いて嫌忌しないとも限らぬだらうが、然もこの種の傾向は崩壞期へと突入せる不安で苦痛多き社會狀態の反映として、一時的にではあるが、尙ほ或る

必然性を持つてゐるもので、必ずしも私の作家的素因として先天的に存在する惡癖ではない。壓伏される人々の精神的歪曲は自然の事であつて、丁度嵐の多い地域の植物が地面を這つて屈まるのと似てゐるのではあるまいか。曲る事に倦り、辛うじてその生を保つと云ふ事實が自然と人生とのあらゆる境界に見出される限り、心の廣い人は寧ろ進むでこの種の生理狀態を研究す可きであると思ふ。知ると云ふ事は常に矯正すると云ふ事の一歩前のものであるから――。

尤も私が時に採用したこのやうな小說の傾向は決して可變性を缺いてゐるとは云へない。その證據として、私は既に文藝公論へ半ば以上を發表した長篇「我が無職時代」の名を擧げる事が出來る。(私はこの長篇で形式的及び思想的な色々の反轉を示して置いた。)

能ふ限り新しい形式に從つて、短い章句の中に、多くの面を包括する所の小說を創り上げようと企畫したため、却つて私の努力と辛苦とは廣く理解される喜びを見るに至らなかつたが、然も私が之等の諸篇中に注ぎ込むだ實生活上の願求と憧憬とは、この書物が自然の恩惠と人々の好意に依つて、存續する限り、至る所に少からざる知己を見出す事と信ずる。

――空氣は萬人のものである、丁度それと同じやうに、自由は萬人のものでなければならぬ――この理念が空想として行はるゝ事久しく、然も事實として現るゝ事少き現代の日本に於いては、私が之等の物語りを借りて、さし示した三つのもの、卽ち「社會的壓迫に依つて助成さるゝ弱者の犯罪」「社會的壓迫に依つて倍加される少年の枯渴」「社會的壓迫に依つて增惡せしめらるゝ貧困者の病患」等を、あらゆる機會に、焦眉の急を以て論議し、且つそれ等幾つかの悲嘆す可き歪曲と屈從とを、正常と自由とに立ち返らしむる、種々の方策を考案する事は、言を俟つ迄もなく、萬人の希求する所であり、知識人の本務とする所である。之を一括して云へば、――諸君は如何にして、より良き環境と素因を創出す可きか――、我が讀者の多くが此の問題に關し、愼重な態度に於ける專門的な研究と、改革のための、倦む事なき實踐を敢行さるゝやう、私は衷心より嘆願せねばならぬ。

「職工と微笑」が初めて雜誌へ揭載されて以來、可成り長い時間を經過した今日迄、この著作集の發刊を見る日が來なかつたのは、全く私の宿痾に因る事であつたが、疾病との不斷な戰ひにも勞れ切らず、氣長く蓄積した之等の短篇を今纏めて世に送り出す事の出來るのは、私の深く喜びとする所である。私の思念と意圖とは悉くこの小冊子の中に短縮され、且つ延展されてゐる。若しその一部に愛好を感じて呉れる讀者ならば、そのあらゆる部分に同じものを認めるであらう。又私の讀者はこの文字の小世界に於いて尙幾多の新しい萠芽が古い土壤の上へ表れてゐる事に氣附くだらうが、何うかその場合には古い土壤を噬はず、唯だ新しい萠芽を育てるやうに仕向けて貰ひたい。

此處にヴァージルの極めて樂しい一句がある――『進む事のみが不死の道ぞ』――

最も稀にしか語られぬものは眞理であるが、それと同時に最も善く生きるものは眞理である。され

ばこそ、我れ等は極めて少い機會にさへ、極めて重要な事を語らうと願ふのである。

横濱　松永延造

内容

職工と微笑……中央公論（大正十三年九月号）……一
アリアの孤獨……不調和（大正十五年二月号）……一三三
肋骨の折れた少年……太陽（昭和二年十月号）……一四九
出獄者品座龍彦の告白……中央公論（大正十五年四月号）……一八一
幼年と老年……（印刷教習所（昭和二年九月廿八日時事新報）路傍に於ける死（大正十五年十一月廿六日東京朝日））……二七二
ミレー……文藝公論（昭和二年八月号）……二八五
ホテル女……文藝公論（昭和二年四月号）……二九五
ラ氏の笛……文藝公論（昭和二年八月号）……三一七
船大工の肖像……生活者（昭和二年二月号）……三三七

職工と微笑

―詳くは微笑を恐怖する
セルロイド職工―

序言

私は當時、單なる失職者に過ぎなかつた。とは云へ、私自身とは全體何んな特質を持つた個體であつたのか？　物の順序として、先づ其れから語り出されねばならない。

別段大きな特質を持たぬといふ點が私の特質であつた故に、私は私自身に就いて、其れ程長い說明を此處で試みようとは思はない。正直と簡單とを尊重して、私は次の事丈を讀者に告げ得れば、もうそれで滿足である。

私は一時、小學校の敎員であつた。そして直きに免職となつて了ふ事が出來た。何故免職となり得たか？　日本語の發音及び文典の改良策に就いてと、それから小兒遊園地の設計に就いて校長と少し許り論爭した結果、私自身が何かしら「思想」と言つたやうなものを所持してゐる事が發見されて了つたからである。實に其の思想がいけなかつた。多くもない私の特性のホンの一部がいけなかつたのである。斷つて置くが、私は何んな場合でも過激を遠慮する內氣な人間の部類に屬し、却つて年老いた校長の方が進取的な氣質に滿ちて「墮落しても好いから、新しいもの！」と云ふ希求を旗印しに立てゝゐたのであつた。從つて、此の場合では、世間に好くある新舊思想の衝突と云つたやうなものが恰度逆の狀態で釀成されたのである。

少し冗長になるが、それを我慢して話すならば、校長は恐ろしいエスペランチストで、幼稚園の生徒へ向つて迄、此の世界語の注入に熱中したのである。光を受け入れる若芽のやうな學童たちは珍らしいものに對して覺えが早かつた。彼等は花や樹の葉の事、又「嬉しい嬉しい。」なぞと云ふ事を皆エスペラントで話し初めた。そして皆が

「ボー、ボー。」と叫んだ。

此の「ボー。」が校長に取つては惡かつた。彼も私が免職になつてから直き、矢張り同じ運命になつて了つたのである。

そんな事は何方でも構ひはしない。話したいのは、もつと別の點である。私は一體それから何うしたのか？　勿論貯金があつたので喰ふに困りはしなかつた。否、寧ろ充分な閑暇を利用して、少しばかり學問を初めさへしたのである。さうして、一年許りの內には、三流文士として、四流の雜誌へ、小さな創作を揭げて貰へる程に出世をした。

私の創作が勝れたものか、それとも、極く平凡なものか、を私自身も未だ判定する事が出來なかつた。そして勿論多くの一流批評家は私の作に目を通しては呉れなかつたのである。彼等は惡いものには注意しなかつた。そして恐らく良いものも同じ運命の下にあつた。

私は試みに、私の作風の一例を此處に引き出して見よう。

其の人が通過した跡

其の人は自分の母親を連れて歩いてゐた。彼の足は眞直ぐで、母の背は曲りかけてゐた。彼は少しもクタビレないけれど、然も母親のクタビレたのを察する事が出來た。

「心が行き達き、他の心を察する事」之がその人の特性だつたのである。

「お母さん。私は一度丈貴方を自動車に乘せて上げたいと思ひます。」と子は云つた。

「お前は私がクタビレたと思つて、そんな風に云つて呉れるが、私は未だ歩けますよ。それにお前の足は大變活潑で、もつと地面を踏みたがつてゐますよ。本當に若い中は高い山なぞを見ると、直ぐそれへ登つた所を想像する程だもの。然し年をとると、そこを越さずに、向うへ行ける道はないかと探すやうになるのだね。」と母が微笑むで答へた。

けれども其の人は自動車を呼むで、それから運轉手に訊いた。

「B迄行くのですが、車の何方側へ多く日が當りますか。」

「右側ですよ。」と運轉手が答へた。

「では、お母さん。私が右側へ座ります。お母さんは日影にお出でなさい。」

之は暑い日の出來事であつた。眠相であつた運轉手は不圖目を上げて、幾らか恨めし相に青年とそ

の母を見やつた。彼は吐息を一つすると、直ぐ車を動かし初めた。走つて居る間中、運轉手は故郷へ置いて來た自分の母親の事を、あれから之と懷ひ續けるのであつた。十日程前、手紙で母親を騙し、十圓の金を送らせて、全く無益な酒色の爲めに費して了つた事が、彼自身にも口惜しくて、彼は思ふさま大きく警笛を響かせた。それから、態と行路を替へて、廻り道をし、車上の老いた人へ日光を當てゝやらうかとさへ考へたが、不意に眼へ一杯の涙をためて了つたのであつた。

親と子は車を降り去つた。殘つた運轉手は郵便局へ入つて母へ宛てた爲替を組むだ。それに添へて、「お母さん、丈夫かね。日中だけは畑へ出ず、體を大切にして下さい。」と下手な文字をも書きつらねた。

田舍で、息子の手紙と、いくらかの金を受けとつた母親の喜びは何んな風であつたか？　まして、それが一度も子供から親切にされた覺えのない母親であつて見れば、尙更の事である。

母親はよろけ乍ら、隣家の方へ駈けて行つた。然し、此の喜びを、さうたやすく他人に打ち明けてはなるまい、と思つたか、再び我が家へ走つて來て、聲を上げて、息子の簡單な手紙を讀むだ。聲の終りの方は小鳥のそれのやうに顫へた。人が文字以外の文字を讀むのは實にそんな時である。簡單は立派な複雜になり、ほんの西瓜の見張り小屋のやうな文章が、何だか有難く宏壯なお寺樣のやうになつて了ふのである。

母親は誰かしらに此の喜びを分け與へねば、自分の體がたまらないやうな氣がして來た。それで又家を出て見ると、彼の女が貸した金を仲々返して呉れない男の何人目かの子が、直ぐその弟を背負ふた儘、轉んで了つて、重い負擔のために、起き上る事も出來ず、藻掻いてゐるのに、行き會つた。母親は急いで、子供を抱き起し「可哀相に……」と繰返した。

「之は利息だよ。」と子供は帶の間から十錢の紙幣を二枚出した。

老いた女は少し顏を赤くして考へた。お金が哀れな人の所へ行つて、利子と云ふものを盜むで歸つて來ると……

「そのお金は少いけれど、お前のお父さんと、お母さんが、暑い日中、畑へ出て、働いて出來たのだね。それは暑さの籠つたお金だね。あゝ暑い日中丈は畑へ出ぬやうに……」と老いた人は獨語とも祈りとも判明しない言葉を、天に向き、又地に向いて呟いた。

それから彼女は二十錢を可愛い子供に與へ、子供はその半分で果物を買ひ、半分で鉛筆のやうな品を求めた。

さつき迄意地惡くしてゐた子供は大變嬉し相に飛び立つた。さうして、自分の家の鳩へ、他所の犬をけしかけるのをやめた。

子供は何かしら三つ許りの歌を一緒に混ぜて歌ひ乍ら、庭に落ちてゐる鳩の拔け羽を拾つて遊むだ。

「斯んなにして、毎日羽をためたら、今に妹の枕が出來ようか？」と子供は母と覺しき女性に尋ねた。

「丹精にしてゐれば、出來相もないと思はれた色々の事さへ、思ひがけぬ程早く出來るものだ。」と母らしい人は答へた。

此の有樣を巣の入口で眺めて居たのは年をとつた一羽の鳩であつた。

鳩……この小さい腦髓は何を考へて居たであらう。鳩は何度か首を傾け、あたりに犬の居ないのを確めて後、恐らく次のやうに鳴いた。

「自分の惜しく思ふ品を、思ひ切つて人に與へても。その品を人が自分と同じやうに大切にしてゐるのを知る事は、何とも云へない喜びである。」

我々は思ひ出す。自動車へ乘つた、さきの母子は、唯街路の一角を通つたに過ぎなかつた。けれども、その影は運轉手の手紙と共に、田舍へ走り、老いた農民のもとに居り、轉んで起きられぬ子供のそば近く歩み、鳩の巣のほとりに、思ひ深くもたゞずむだのである。至極あたり前の深切、一寸した思ひやりも、それが命を持つて居る故に、水の輪のやうに、動いて他の方へ行くのは面白い事である。（をはり）

讀者は倦怠したであらうか？　振り返つて云ふが、私の小品といふのは以上の如きもので代表され

るのであつた。それは簡單で、從つて未熟であらうか？　私が教員時代に學童へ向つて熱心に話した訓話の痕跡が取り切れて居ないと、讀者は叱責するであらうか。

それは何うでも好い。話は實に之からなのである。

機緣とは何であるか？　何處が初まりで、何處が終りなのであらうか。私には何も分らないが、或る雨の日に、ある濡れた青年が、私を訪ねて來たのは確かな事實である。

彼は幾分か私を尊敬する風であつたが、さうかと云つて彼自身の傲慢を強ひて隱す程でもなかつた。彼は概して陰鬱であり、時に不思議な嘲りに似た笑ひを洩らした。彼は一個の勞働者であると告白したが、そんな低い階級に似ず、恐らく私も及ばぬ知見を持つてゐた。

彼は自身が經驗した或る事件に就いて、一つの傳記風な小說を書きかけてゐる事、それを順々に見て貰ひ、批評して貰ひたい事を私に告げた。

「私が何んな奴だか、今に皆別つて來ます。すつかり分つて了ひます。」と少し氣味惡い動作の青年は悲し相に舌をふるはした。

「聽て私は何を見、さうして驚いたか？

私の嘗て知らない不思議な世界が此處から開け初めた。青年の文章は暗い光とでも云ふ可きものを以て私の胸を照らした。此處には「神聖なものへの反抗」があり、私の心の中には見出せない複雜な

考へがあつた。

「惡」それが主位を占め、そして君臨する所の精神を、私は單なる心理學的興味からでなしに、もつと異樣な驚きと嘆きとで見入つた。私はそれに引つけられ、又蹴はなされた。それにも拘らず、私は彼の青年へ何處迄も接觸して行かうとする勇氣の爲めに立ち上つた。あゝ此の青年が何んなに私の平安な生活を破壞して呉れたか？　それは後に皆明白となるであらう。

彼の青年は確かに私達とは別な性質を到る所で發露した。たとへば、彼は面識なき牛肉の配達夫へ、いきなり聲を掛ける事が出來た。

「お前は、自分の配達してるものが喰ひたくはないかい？」と彼は對手の肩をたゝいた。

配達夫も亦、この行爲をいぶかからなかつた。尤もそれが彼等の禮儀なのである。

「喰ひたくもなるさ。けれど、私の厭に思ふのは、自分の飢ゑてゐる事ぢやないよ。自分が何かを人に與へ得ぬ事だ。」と配達夫は答へると、黑い表紙の書物で、青年の肩を打ち返した。その書物は聖書だつたのである。（その頃は未だ下層者の間に多くのクリスチヤンが居た。）

「ウム、そんな事もあるな。たしかにある。私の知つてゐる貧乏な雇人は、ある大盡の家の子に、一錢を握らせて、大きな聲を出し乍ら飛んで歸つて來た事がある。奴は善い行ひをしたのか……それとも復讐をしたのか……自分でも別らないのだ。唯、俺は與へたぞ、與へたぞと叫び乍ら、地面へ、へ

たばつて了やがつた。」と青年は厭な表情をして答へるのであつた。

と思ふと、青年は全く未知な他の勞働者に肩を打たれる事がある。

「ヤイ、何をボンヤリしてゐるんだ。貴樣、自分で立つてゐるのか？　それともそこに落つこちてやがるのか？」と未知の男は叫むだ。それが矢張り禮にかなつてゐるやうでもあつた。

「落ちてゐるんだとも。だが、そりや、上つちまふより安全なんだぜ。」と我が青年は答へた。

「洒落やがんない。俺が分らないのか。今俺の友達の奴はな。蒸し釜の蓋のネジがゆるんだんで、それを締め直しに、大きな釜の上に登つたんだ。それから、ネジを締めたんだ。すると、ネジの奴、金が古くなつてゐるんで、ボサンと頭がモゲやがつたんだ。おい。こつちをちやんと向かねいかい。それで、釜と蓋との間から、蒸氣が噴き出して來てな。その力で他のネジも皆一偏に頭がモゲて、バーンと云ふと思ふと、もう工場中は湯氣で眞白に曇つちやつたんだ。すると、上の方でボーンと云ふんだ。ハツと思つて見ると、屋根が吹き飛んで、大きな穴から青空が見えるぢやないか。そして、あゝ、眼をつぶつて呉れ！　俺の友達の奴……まるで吹き矢の矢のやうに、その穴から、空へと吹きつ飛ばされやがつた。急いで外へ出て見ると、俺のすぐ前へ、ドサンと肉體が落ちて、彈みもしないで、タタキへのさばりやがつた。グサツと音がしたんだ。おい。こつちを向けい！　友達はそれでも死ねないで、唸りやがつた。「苦しい、苦しい、」と叫びやがつた。當り前よ苦しくない譯が何處にあるんだい。」醉ひ痴れた未知の人は、さうして自分の道を歩いて行つて了つた。

青年は暗い顏になつて呟いた。

「人がそんな風に鞠のやうになつて好いのか？　人が？」

けれども讀者よ。人は色々な人間らしからぬ別のものになる處れがある。現に此の青年も何かしら他の玄怪な存在になりかけてゐるのであつた。それを證明するため、私は彼の自傳をこゝに掲げたく思ふ。

次の章に於いて、今後「私」と云ふのは、實に「彼」の事なのである。もしくは「何時か善良に歸る傷ついた靈」の事なのである。

玩弄さるゝ美

一番初めに云つて置きたいのは、私が物質上の貧困者であるに拘らず、贅譯過ぎる心を持つてゐるといふ惡い慘めな點である。斯んな外部條件中に投げ出された斯んな靈と云ふものが、何んな變化を取つて行くか。

單に空虛な妄想を追ふ事の他に、私はもつと現實に接近した慰安を求め得なかつたであらうか。人々は次の言葉を何と思ふか。

妄想と現實との中間に座つて蠢めく私は、確かに又、假定と實際とを折衷しつゝ何かしら、諦め深い、そして優雅を通り越して、兒戯に近附く類の慰安で自分を飾り得たと思つてゐた。例へば、何んな紙――物理的に汚れて鼠色になつたのでも、化學變化の爲めに黄褐色になつたのでも構ひはしない――でも自分の手に入つて來ると、私は其れからエジプトのスフインクスを切り拔き出したものである。成程、自分の前には平面なスフインクスが幾匹か現れて來る、之は物質に形を借りてゐる。唯平面である點に、多量な妄想と空想が盛られてゐるのである。私は何うかせめてバスレリーフとしてのスフインクスをセルロイドからでも刻み出したい。それは此の慘めで汚い貧困に聊かでも敵對する心の贅澤である。

「厭な人間だ！」私の聽き手は斯う私を舌打ちで鞭打つだらう。けれど、私は一人の病み患ふ子供の樣なものである。肉を蠟にして燃しながら、空想の焰の糧にする程、靜かに座つてゐるのが持ち前の人間である。斯んな男に附き纏ふ貧困こそは惡性のものに相違ない。賭博者、ピストル丈を商賣道具にする男、單純な無賴漢、彼等に絡はる貧困の方が、まだまだ私の類よりは光明を持つてゐる樣である。

宣敷い。私は獨りで居よう。昔式の巡羅兵が持つ蠟燭の灯の廻りを黑いガラスが護る樣に、兎も角も、私の四壁は他人から隔てられてゐる。私は此處で昔の朝鮮人でもした樣な骨董的な空想を現實と妄想との中間的濃度を持つものとして味はう。

例へば、此の室の床が斜めに傾いてゐるとすれば、それは惡い建築法の爲めではなく、此處の地盤が、雪の爲めに清透となつたアペニン山脈中のある山腹に位すると考へて置かう。此の壁が破れてゐる事には唯古典的な風雅丈を見出さう。人々はモーゼの書いた文書が破れてゐなければ、立派ではないと云ふであらう。時と云ふ風雲は唯一の裝飾法を知つてゐる。それは物を少し許り破る事で、全體をメツキするのである。此の方法は私に依つて「支那式美術」と呼ばれてゐた。何となれば、支那はその建國が古過ぎて、物を凝集する焦點を通過して了つたと云ふ樣な點からではなく、あの國のものは凡て不足と缺乏で飾られてゐるからである。彼の國で多過ぎるのは唯料理の數丈ではないだらうか。

「之は厭な云ひ廻しだ。」と聽き手は私の鬱陶しい衒氣を瓦斯の樣に嫌ふに極まつてゐる。其れに何の無理があらう。私も自分自身が隨分厭なのだ。

それにも拘らず、いや、寧ろ、一層圖々しく、私はウツラ〳〵と考へ續ける。何を？　凡て外國の骨董品の事をである。メソポタミヤ人は三千年前に何んな頽唐の生やし方をしてゐたか？　斯んな考古學は厭世の一種であつて、自分の汚さに困じ果てた人の息拔きに過ぎないのではあるが……

「私はもつと隅の多い室に住みたい。暗さは之で恰度好いから……」そして空想の中に於てゞはある

が、華麗な伊太利風の模樣のある厚い布で白い光を屈折させ、鋼の武具とか、古い爲めに暗くなつてゐる酒の罎とか、アラビヤ人のかつぎとかで、色んな色の影を造つて見るのである。私は菱形の盆を大きくしたやうな寢臺に平臥して、金緣の附いた天鵝絨の布團を鼻の下迄引張るのである。斯うするとまるで孔子の髯の樣に長く、黑い布が私の足に達するであらう。

いや構はない。もつと妄想——卽ち思想の膿を分泌せよ！

支那風な瑪瑙の象眼に、西歐風な金銀の浮彫りを施した一つ小箱には、自分の眼底迄が黑い瞳の闇を透して寫り相な磨きが掛けてある。その中には暗中に生活した爲めに、肉體の弱り切つた子供の樣に見える所の、或る祕密なミニエチュアを二枚合せにして藏してゐる。それは海の中にある極樂の樣に冷や冷やとした畫であるが、見てゐると記憶が亂れ切つて了ふ樣に、四ツの焦點が注意を搔きむしる。自分が橋を渡つてゐるのだと思はせて置き乍ら、實は泳がせてゐると云つた樣な譯の分らぬ畫、私の言葉が人々に分らぬ程、比喩に滿ちた畫だ。之より分らぬものが又とあらうか。恐らく此の畫には本質的な價値はないのである。唯何も分らぬ點が人々をして價値あるものゝ如くに眩視せしめるのである。斯んな例は世の中に澤山ある。

偖て、聽き手よ。貴方方が若しも犯罪心理學者であり、美と罪惡との不可思議微妙な關係に就いて研究しつゝあるならば、私が上來書き來つた所の文體を檢査した時、必ずやその筆者が幾分か惡人であらねばならぬと云ふ推定を下す事が出事る筈である。

何故と云ふに、骨董屋の店頭を見る時のやうな、まがひものらしい美（それは本統の美ではあるまい。）の併列と云ひ、その間をつなぐ幾分か意地の惡い暗怪と云ひ、之等は皆人間の惡心から流れ出す所の夢に他ならないからである。此の文體に表れた所は何等自然的な皮膚を惠まれてゐないボール紙へ塗つた胡粉のやうな痛々しい化粧丈ではないか。

あゝさう云ふ類の化粧を以てのみ惡心を抱くものは生活する。その化粧は彼が書く文章の上にも行き亘る。「何んな種類の殺人が、一番藝術的であるか？」と云ふやうな云ひ廻しに於いて、彼は最も惡いものを優雅に見せようとする。或ひは又、暗怪と虛言との中に、彼の理想（卽ち人を殺す事）をうまく鈹め込んで、

「おい、君はB市の市長が床の上で死んだと思つてゐるから、お芽出度いね。ウム、祕密を知つてゐるのは私丈だよ。實はね。實は、R公園でグザッとやられたのさ。お供のやつが大急ぎでその死體を家へ運むで了つたんだ。それで……つまり……床の上……と云ふ事になるんだ。いや、檢べてみると病氣で死んだ積りになつてゐる有名な人々が、隨分非業な最後をやつてゐるのさ。」

斯んな虛言程無氣味なものがあらうか。斯んな虛言を吐く男の眼は何んなに上釣り且つ濁りつゝ光つてゐることであらうか。

眞に私自身も亦此の男の如くであらうか。おゝ、私は常に殺人の祕密な意圖で心を波打たせてゐる。私が殺してやらうと思つてゐる或る人間の眼が、泥の中や水の上へ浮むで腐つたやうに赤くなつてゐるのを見る事がしば〳〵ある。けれど私は臆病な空想勝ちな燻ぶり返つた一人のセルロイド職工に過ぎない。

支那人鮑吉

尊いものは稀である、と哲學者は云つてゐる。成程、其れに間違ひはない樣だ。あつたとしても取り立てゝ騷ぐ必要もありはしまい。如何にも、尊いものは稀である。だが、稀なものが必ずしも尊くはない。

その證據として、私は今でも明瞭に思ひ出し得る一友人の日常に就いて語らう。私は實を云ふと、自分自身を語る目算なのだが、その目的の爲めに、却つて斯んな廻り道を取らねばならないのを悲しく思ふ。彼の事を話して置かぬと、私の話が出て來ない。だから、彼と云ふのは煙火の口火に過ぎないのだが、實はもつと濡れて濕氣の多い所のある男である。

「彼とは何んな男だ？」

世界には塵芥と同じ數丈の謎がある。一日中、人と會話しないでゐてさへ「何？」が私の心の中で

醱酵してゐる。

「彼？　何？」それを簡單に之から話さう。

私は一時自分が犬殺しをしてゐた事を全然忘却してゐた。其れを悲しく想起せしめたのは支那人の鮑吉である、そして、彼は私が犬殺し屋であつたのを知ると、大變に悲嘆して私から段々遠退いた。其れは極めて自然の成り行きである。何故なら、彼は恐ろしい人間嫌ひで、その代りに、動物植物の異常な偏愛者であつたのである。然し、鑛物は彼の注意を少しも惹くことが出來なかつた。奇妙である。

彼は竹が一番好きである。「竹と竹、コチコチ當る音、宜敷い。」と彼は好く云ふのである。「竹の挨拶」と彼は其れを呼ぶ。

「世界で一番美しいものは何か。」と私が尋ねた時にも、彼は躊躇なしに答へた。

「雲雀！　雲雀、天の息を飲む。」

彼は自ら飼つてゐる雲雀を朝早く空へ放ち、其れが歸つて來て、彼の手の甲へ乘る時、嘴の先に附いてゐる「天の氣」――それは何かしら分子の樣なもの――を自分の鼻孔へ吸ひ込むのである。何たる厭な形式であらう、然も此の形式を彼は仙人風に尊重し、何か魂の藥になる事だとさへ信じてゐるのであつた。

彼は又、日本趣味を多分に持つてゐて、色の殆どない様な朝顔、晝顔、芍藥、實につまらない斷腸花、合歡、日々艸なぞを大層崇め奉つて、その花や葉つぱを嘗めて澁い顔をしたりする。彼は花を見ては好く感奮するが、然も實を云ふと彼の靈は蓮根から出る絲の様に、冷たい、柔かい、青い、植物臭いもの、又ある種の蟲の體臭も混入し、眠つた、爬蟲類の様にソッケなく、もし、何か光が出るとすれば、それは夜光蟲のと同じで、水の中にある 様なものでなくてはならない。それ程彼は沈み勝ちで、何だか、夜陰の川をゆつくりと流れる浮燈籠の様でもあつた。

要するに、彼は一番眞面目に生きてゐると信じ乍ら、然もやつてゐる事が皆遊戯なのを知らぬ人間である。例へば、彼は蟻を夢中で見詰める。その夢中な有様は少し狂氣を交へてゐる。何も知らない蟻の方では、力一杯に腐つた蛙の子を運むでゐる。

「おゝ、何て一生懸命、可愛がつてやらねば……」彼は涙ぐむで、蛙の腐肉を蟻の穴へと手傳つて運むでやる。けれど、若し、街頭で子を背負ひ乍ら車の後押しをしてゐる人間の女を見るならば、彼は眉をひそめて、態と眼を閉ぢて了ふ。「耐らない、汚い。」のである。彼は病氣で歩けない雨蛙は好きであるが、本當の病人——私——なぞをあまり好かない。「此の蛙、風邪引いてゐる。お湯飲まして、寢かしてやる。」之が彼の持ち前である。

或る男が、生きた竹を切つてゐるのを見掛けた時、彼は額の上の方迄、眉毛を持つて行つて了つた。實際、彼の眉毛は好く動く。そして、普段でも、眼から二寸位は離れてゐるが、驚いたり、怒つたりする時は三寸五分位に隔たる。もつと驚いたら、後頭部の方へと廻つて行つて了ひ相な氣さへする。西洋人は怒る時眼を瞠つて、隱れてゐた白眼迄をも現すのであるが、支那人は主に、顏面へ既に現れてゐるものを、頭巾を冠つた頭部の方へ隱すのである。改めて云ふが、彼は正直に怒つて了つたのである。「それ、いけない。」

それにも拘らず、竹屋の前を通る時、死んで竿になつて了つてゐる竹が、亡靈の様に立つてゐるのを見掛けたとて、彼は何とも思ひはしないのである。「貴方、西瓜の果、食べる？」と掌へ乘せた黑い粒を私にすゝめる丈である。

私は考へた。何故彼は人間の私よりも病氣の蛙を愛し、人間の奴隷よりも働く蟻に熱中するのか。又切り掛けの竹を憐れがるのに、切られて了つた竹を恐れぬのか。

最初の方の疑問は直きと解決される機會に到着した。彼が二寸方形位の寫眞のファインダーを、自分で造つて持つてゐる事から、私は氣附いたのであるが、彼は自然大の自然物よりも、此のファインダーの擦り硝子へ映る小さい影像の方に、何れ程愛着してゐるか分らない。

「あゝ、煙突からパーと煙出る。煙草よりももつと、小さい。それ可愛い。」

此處に於いて私は判定する。少さくなくては彼の愛を買ふ事が出來ない。蛙は人間を縮小したもの

として彼の眼に映ずるらしい。

之は勿論全體を蔽ふ解決ではない。然し、重要な部分の樣ではあるまいか。

次が、竹の生死問題である。彼れは切られる竹を惜しむのに、死んで行く人を祝福する厭世家である。此の矛盾の爲めに、私は彼の魂を握る事が出來ない。其處で直接彼に質問して見た。

「何故、生きてゐる竹を切る時は、眉毛動かすか。そして何故死んだ竹が並むでゐても眉毛、其の儘か？」

「何も不思議ない。死んだ竹、もう竹でない。石と同じ物質！」

此の答へを聞いて私は呆然として了つたのである。

彼が小さい物を愛する所から、私は彼を「玩具人」と呼ばうと思つてゐる。そして、凡て死骸を蔑視する點に於いては、彼を「蒙古の回々教徒」若しくは「神代に於ける日本の神々」と呼むで居るのである。

考へ直して見れば、彼も大變可哀想な人間である。私は彼の造つた汚いファインダーを借りて、彼の姿を覗いた事がある。彼の丈は高いが、弱い樹の樣である。それより露西亞のボルゾオイとか云ふ犬が一層彼に似てゐる樣に思はれる。その犬の敏捷な點がではない……眠相にしてゐる姿勢丈がである。

彼は外れた方向へ走る歪むだ球である。少し藪睨みで、その上愛の筒口が違ふ方を向いてゐる。彼は人間を忌避し恐怖する。彼はあらゆる人間が意地惡く、拳で彼の腹を覘つてゐると想像する。彼はブツ〳〵と呟き乍ら、花と蟲とへ行く。そして春になつても尙、蓮根の樣に冷たい穴だらけの魂を抱いてゐるらしい。彼の魂は彼の肉體よりも先へ年とつてゐる。千年も生きて了つて、もう仕方なくなつてゐる山椒魚が黑く濕氣た落ち葉の堆積の下にうづくまつて、五分若しくは十分間に一度づゝ呼吸してゐる有樣に似てゐるのである。

犬殺しの考へ

一寸した遠慮から、私は變態的な心理を持つ鮑吉を自分の友であると云つたが、實は、彼こそ私の友であると同時に、私の本統の父であつたのを告白せねばならぬ。恥かしいけれども私はある靴直しの娘と此の變妙な支那人との間に出來た混血兒なのである。だが私の心が曲つて了つた一番初めの原因は父の血のみに歸さる可きでない。私が道を歩く度に、近所の子供から侮辱され、石を投げられ、時にはつめられたりした事が皆その重要な元素であつた。彼等は何時でも私を憎み乍ら、注視してゐた。そして私の汚い日本服の下に支那風な胴着をでも見ようものなら、彼等は犬のやうに吠えたてゝ、私の恥を路の眞中へと曝け出した。

「お父さん。私ばかりを皆がいじめる。私許りを見詰めてゐる。露路から拔けようとすると待ち伏せをしてゐるし、大通りを歩くと皆が二階の窓から睨めて、唾で丸めた紙を投げるのです。」私は斯んなふうに子供らしい嘆きを洩した。けれども私を愛さぬ父は彼自身の少年時代が矢張り之と同じだつたと答へた。そんな嘆きは段々と凝集して大きい塊りになつて行き、あゝ遂に全然別のものと變態して了つたのであつた。

誰に向けられるのでもない漠然とした怨恨の情と、緣の下の蔓のやうにいぢけた僻みの根性とが、私の心を兩方から閉ざす二つの扉となつたのは極めて自然である。斯んな説明は誰も陳腐であるとして排斥する程、私の心の變化は普通の成り行である。

だが、私が十九才程に生長した時、一つの出來事が起つて、其れが他の出來事をさそつた。私の父は重い病氣の後に死んだ。母は既に約束してあつた男と早速何處かへ逃げて行つて了つた。遠く出稼ぎに出て居た私が駈け附けた時には、薄馬鹿の妹が小さく暗い家に足を投げ出して、何か考へ事をしてゐるのを見た丈であつた。考へ事と云つても別段分別の籠つたものではない。唯ッツラ〳〵として時間のたつのを待つてゐた迄なのである。私も妹と一緒にウツラ〳〵となつて行つた。何故か此の時私は自分が一年間でも、わざと犬殺しを家業にして來た事を深く後悔する事が出來た。私は泣いて妹に抱きついたが、妹は默つて足を投げ出してゐた。

「お前は奉公に行けるかい？　私も之から何かの職人になるから……」と私は兄らしい情をこめて囁いた。

「犬ころしは止すの？」と無邪氣な妹が尋ねた。彼の女は丁度その時十七才であつたが、智慧は遲れてゐて、讀書も算術も出來ない低能兒であつた。それにも拘らず、彼の女の體はもはや大人並の生理狀態を持つてゐたのである。スペイン鬪牛士のやうに美しい私は答へた。

「犬ころし！　ウムそれはもう止さう。お父さんもいやがつてゐたからね。けれどだね。私は時々思ふのだ。世間は態とムシヤクシヤ腹を立てさせて、一人の人間をもうすつかり自暴自棄にさせ、終ひには殘忍にさせる。そして、その殘忍を何かしら世間の爲めに有效に使はうとする。世間は殘忍をも遊ばして置かない。斯うして依怙地な犬殺しが出來る。氣狂ひ犬が減つて、囓まれる人々が少くなる。うまいやり方ではないか。」

妹はノロく笑つた。二人は父の死亡と母の遁走を一通り悲しむと、もう直ぐそれを忘れる事が出來た。いや結局此の方が好いやうにさへ思はれたのは何う云ふ譯だつたであらう。

離散して了ふ事、かたがついて了ふ事、私はそれを喜むだ。が、元より惡魔の心を以てではない。あの恐ろしい諦めを持つた印度の王子は彼の家系が散り失せるのを何んなに喜むだかを考へて貰ひ度い。彼は妃を尼にさせた。息子を獨身の沙門にさせた。さうして汚辱が清め洗はれたのである。此の

虚無的な精神は悪へのみの加擔者ではない。私が一家の飛散を快く思つたのも、寧ろ半分は善良な心からであり、汚穢を葬る必要からであつた。私はその頃、決して子を造るまいと心を決めてゐた程であつた。私は生前の父が母を始終流産させてゐるのを見た。五人の子が流れ去つたのを、私は氷河を見る時のやうにサッパリとした心で眺めやつたものである。

「流れて行け、流れて行け。その方が何んなに仕合せだらう。」

その頃から私は水と生命との密接な關係を科學的にではなく、例の藝術的幻影として屢ば直觀した。泡を吹く夕方の沼の泥に赤く腐つた生物の眼を見出したのは一度や二度でない。霧が晴れかけてゐる河の水面に、眞青な怨めしさうな眼を見附けるのも造作ない事であつた。私はスペイン鬪牛士のやうに道樂半分の殘忍性を以て云つた。「あゝあれは人間の眼だ。今に私の手で殺される人間共の眼だ。」

此の豫感は寂滅的思想で沈められた私の心へ、よく浮び上る所の恐怖であつた。私は既に犬を殺しつけて居た。さうして、彼等の怨念は決して死後迄存續するものでないのを好く確かめてゐた。けれどむしろ彼等の死前に於て、怨念の豫覺が私の心へ喰ひ入つて來る事は度々あつた。例へば私が仕事に出ようとして長靴を穿きかけてゐると、足が急にしびれて、靴へ密着して了ふ事なぞがその證據である。私は靄の多い朝なぞ、隨分と犬が死の豫覺のために苦しがつて鳴くのを聽いた。次手に云つて置くが、犬は豚よりも死を厭ふし、殺される時の苦痛が大きいやうである。ある土人が犬を殺しては喰ふのを見かねて、彼へ豚を代りに喰ふやうにと命令を下した西洋人は好い分別を持つてゐる。豚を殺すのも犬を殺すのも同じ殺生だと考へてはならない。世の中には決して同じものはないのである。犬を殺すのも、人を殺すのも同じ殺生だ。私は時々斯う叫むでは、それが誤つた意見なのを悲しむだ。さうして水の上の眼、泥の中の眼を搔き消す事に努力したのであつた。

けれども私は何うしてもあの疑ひを捨て去る事が不可能であつた。あの疑ひ？　さうである。父は本統に床の上で自然に死んで呉れたのであらうか？　おゝ私は此の上もなく慘めな人間ではないか。實際は床の上で胃癌の爲めに死んだB市長の事を、公園で刺客にやられたのだと吹聽したのは確かに此の私であつた。その時は自分が虚を吐いてゐるなと云ふ一種の悲しく又喜ばしい意識を失つては居なかつた。おゝあのイラ〳〵とした口惜しいやうな齒痒いやうな然も體をじつとしてはゐられないやうな虚言の快樂、私は確かにそれを享樂してゐたのである。所が今度は何うであつたらう。母とその情夫とに向けられた疑惑の根は決して虚構の快樂から生え上つては居なかつた。困つた、と私は自分の額を打つては何度かたじろいだことであらう。之は殺人事件を假想しては樂しむ私の惡癖が一層增惡して來た結果に他ならないと云ふ決斷を私は何んなにか要求したか？　然も要求したにとゞまつた。悲しい事に疑念は子を產み、蔓を伸ばすのを止めなかつた。

その頃、私は又奇怪な話しに遭遇した。

「お前は知つてゐるかね？　スピノザは肺病で死んだことになつてゐるが、實はアムステルダムの一醫師に殺されたんだよ、デクインシーと云ふ人が其れを檢べて、自分の著書へ公然と發表してゐるんだから、間違ひはないのさ。それからカント……あの古手の大カントも例の散歩の道で殺されかけたのだぜ。刺客はジット大哲人の痩せた猫背をうかゞつたのだ。けれどその時ふと刺客は思ひついたんだ。之はいけない。あの老人は、澤山の罪を背負つてゐる。若し自分が殺すと、眞逆樣に地獄へ墜ちて行つて了ふ。之はいけない。それで刺客はドン〳〵駈け出して了つたのだ。そして老哲人の身代りに、可愛い幼子をふんづらまへたのだ……」

「うむそれで何うした？」と私は暗い好奇心を以て前へ乘り出し、話し手の手首をしびれよとばかりに握りしめた。話し手は一寸たじろいた。

「それで……之から育つ果實のやうに生き〳〵としてゐて可愛い幼な子の肉をぶちやぶり、小さい靈を天へ送つたんだ。刺客はもう感奮して聲を立てゝ泣いたんだ。之であの靈は天國へ行けるつて云つてね。」

「その刺客の心理が不明瞭だ、」と私は云つた。

「不明瞭にきまつてゐる。是非不明瞭でなくてはならないんだ」話し手は立ち去つて行つた。

私の疑念は增惡して病氣になつて行きさうであつた。私は話し手のあとを祕かに追つて行つた。彼は夜の細い道を右へ左へ折れた。

「おゝ、お前未だ私を追跡するか？　執拗い男だな。」話し手は無氣味に云ひ放つて、うしろから歩みよる私を忌み嫌つた。

「話して呉れ！　何う云ふ譯なんだか。」と私は急に弱り切つて、萎れながら口を開いた。

「何を？」

「何うして老人の身代りに幼兒がなつたのか。又何故その方が好いのか、と云ふ事だ。」

「もう好い加減に許して呉れよ。お前。その代り、此の本をやるから……」彼はデキンシーの本と云ふものを私の手の上へ乘せた。

話し手と別れて歸つて來た時、私はその本を讀む勇氣も出ない程勞れ果てゝ居た。(次手に云ふが、私は珍しく病的に利巧で、英語は　シエークスピヤを巫術的に飜譯出來る程、直覺を以て會得してゐたのである。それから私は父の住む士地では犬殺しを働く事が出來ぬ程、敎養のある友を持つてゐたのである。)

私はどうしてもデクインシーの著書を讀む事が出來なかつた。そして何故だか判らないが、本の表紙にあの話し手の體臭がこびりついてゐるやうに思へて、態々近くの河へ、橋の上から本を投げ捨て

て了つたのである。

私は時々發作的に悶えた。妹は足を投げ出して上眼でそれを見てゐた。

「兄さん。私がゐていけないなら、奉公に出るよ。奉公によ。」妹は眼に涙をためて足をいぢつてゐた。

あゝ鬪牛士の樣に道樂の混つた犬殺し、不當な社會へ對する「復讐の代償」として、あの可愛らしいテリヤとセッターの混血兒を殺す青年、之は確かに惡い、そして非常に惡いものに相違なかつた。

手妻の卵

犬殺しを廢してから、私の收入は全く絶えて了つた。私は時とすると、もう一度帽子を目深く冠るあの商賣に入らうかと思つた。けれど結局他の考へが優越した。私は妹を奉公に出した。彼の女の行つた先は郊外にあるやれ果てた病院であつた。恐らく彼の女は、その病院の洗濯婦と、院長の宅の飯炊とを兼ねゝばならなかつたのである。此の激務に堪へる事の出來る女は白痴か、さもなくば異常に體力の大きいものでなくてはならなかつたので、院長は妹の白痴であることを少しも氣に掛けぬ所か、むしろ其れを幸ひにしてゐるらしかつた。私は妹の給料に就いて、何の要求もしなかつたが、それにも拘らず、院長は六ケ月分の給料を前拂ひにしてやつても好いと申し出して呉れた。私は七圓の六

倍即ち四十二圓を痩せこけた院長の手から受け取ると、妹の爲めに幾枚かの着替を買ひとゝのへ、新らしい行李をも擔ぎ込むでやつた。

「では、働いてお呉れ。」私は涙をこぼして低能な妹を見やつた。妹はもう子供のやうに泣いた。

本統に斯んな哀れな娘は生きてゐない方がよい。何うかして早く死んで了ふ方法はないであらうか、と私は可愛さ餘つて呟いた。妹は續けざまに泣いた。私が病院の裏口を出ると、追ひかけてかじりついた。私は妹を抱き上げて門の中へ入れねばならなかつた。けれど私が逃げ出すや否や、異常に太つてゐる妹の腕はもう私の首へからんでゐた。私はぞつとなつた。その腕をもぎ離すと、今度は地面へ坐つて、私の足へからみついた。私が構はずに歩き出すと、彼の女は平氣で引き擦られて來た。私は又妹を抱いて病院の門内へ入れた。

「許して呉れ。」と私は泣いた。

「アヽ兄さん。」と妹は口を開いたまゝ涙を落した。

私は妹り執愛の深さを無氣味に思つて、「死んで呉れると好い。」と呟き乍ら大急ぎで妹から別れ去つた。

四十二圓の金は二十一圓丈私の手に殘つてゐたが、私はそれを少しづゝ喰ひ減らして行つた。最後の一圓丈が輕い財布の底に見出された時、私は思ひ切つて一つの商賣を初めねばならなくなつた。そ

の商賣は犬殺しよりも少し勝つてゐるやうに考へられはしたものゝ、決して正當なものと云ふ丈の價値はなかつた。

「大きい惡事よりも、小さい惡事を……」と私は云ひつゝ、知り合ひの卵屋へ走り込んだ。私は其處で非常にまけて貰つて五十錢丈青島卵を買ひ入れた。古くなつてゐる爲めに表面が象牙のやうな光澤を持つて了つた三十五の鷄卵を、私は惡い巧みで體中を顫はせつゝ見入つた。何故私はそんなにイジけた質なのだらう。

「この光澤がいけないんだ……」

殘りの三十錢は一體何の爲めに費されたであらう。私は藥種屋へ行つて三種の藥品を買ひ入れた。それらを上手に調合し、薄い溶液にしたものへ、光澤のある鷄卵を浸すと、一時間程でツヤ消しが完了した。

「ハヽヽヽ之で宜敷い。」と私は大哲カントのやうに獨語した。おゝ何と云ふ好い器量の卵達であらう。ラフなブロマイト印畫紙のやうな肌は、もう近在から出る地卵とそつくりであつた。

軈て私は若い農夫のやうな出で立ちをした。そして父の土地から遠くさすらつて、他の都市へと行つた。

郊外には主人が留守で、美しく若い夫人丈が淋しく子供に添乳なぞをしてゐる家が多い。私はそんな家の扉口へ立つと、大きな笊の上を蔽つた手拭ひを取り去り、丸顏の少女のやうな鷄卵を主婦達に見せびらかした。

「おかみさん！　地卵を買つてくんなんねえか。新らしいだよ。皆生れた日が鉛筆で印してあるだが、」と私は實直に云つた。

「いやだ。いらないよ。」と若い女は答へるのが普通であつた。

「でも此の上皮の工合を見て呉んろ。新らしいだよ。俺の爺さんが道樂に鷄を飼つてるだからな。餌代丈になりや好いだよ。安くしとくだ。店で買へば七錢から八錢迄するだ。俺あ五錢で置いてくだ。」

夫人は何氣なく起き上つた。そして卵の肌へ手を觸れて見た。彼の女は自分の可愛い子がもう卵を食べてもよい程に育つたのをつく〴〵と感ずるらしく、思ひやりの深い眼で眠つてゐる幼子の方を見やつたりした。

斯うして卵は直きにかたがついて了ふのであつた。私は時々自分の身をツメつて叫むだ。

「あゝ罪だ。罪だ。あの卵の中、三分の一はもう腐敗してゐるだらうに……」

けれど私は何うしてもやめられなかつた。それで、一日に五十個以上は賣らないと云ふ戒律を立てて、此の商賣を續けて行くのであつた。そして悲しい事に、こんな新らしい惡事が何でもない習慣に變じて行つた。

初めが終り

あゝ此の商賣を何處迄も續けて行けたなら、私は何んなに都合よく暮せたらう。けれど例の通り遂に一つの支障が起つた。私は一人の美しい娘に見惚れて了つた。それ丈の事である。だが何と云ふ美しい娘であつたらう。それを何う說明してよいかゞ分らないので私は苦しい。あの洗はれたやうな娘はいつも苦しさうに肩で息をする癖があるが、決して姙娠をしてゐるのではなかつた。いや彼の女程に純眞な處女が又とあつて好いものだらうか。序でに云ひたす事だが、私自身が大變に毛の薄い男であつた爲か、私は毛の多い女を此の上もなく好むだ。そして丁度その娘と來ては髮の毛が澤山で長かつた。その癖、うす鬚なぞは一寸も生えてゐなかつた。《實を云ふと鬚が生えて居ても毛の多い女の方が私は好きである。》つまらなくとも聞いて下さい。

私は此の娘を毎日見てゐないと惱ましい氣持になつた。私は娘の居る都市から他の都市へと移る勇氣がなくなつて了つた。私は到頭一つの場所へ居据るやうにさせられた。

何うしたらあの娘と關係をつけることが出來るだらう。それを思ひ廻らしては一日が早くのろく過ぎた。郊外の大部分を私はそんな風にして卵を賣り歩いて了つた。あんな卵を二度繰返して買つて呉れる主婦は決してないであらう。

私は考へ勞れてはあの娘を見に行つた。私はその時出來る丈上品な身なりをして、汚い卵屋とは似ても似つかぬしとやかな大學生風な青年になりすました。そんな事は私の得手なのである。

娘は私が毎日彼の女の家の廻りをまはるので、もう好く私を記憶し、注意してゐた。彼の女は私を惡い人間だとは疑つてゐないらしかつた。何故ならば、彼の女は私の事を母親へ告げないでゐるのが明らかだつた。《娘と云ふものは自分の好かない氣味惡い男の事は直ぐ母親に告げて助けを乞ふのが常である。》娘は段々と私がしたひ寄つて行くのを待つてゐるやうになつた。私が出掛けて行く時間を遲らすと、彼の女は心配して外の生け垣へもたれて立つてゐたりした。けれど私が近づくと彼の女は未だ恐れてゐるやうに庭の中へ逃げ込むで、樹の葉の間から私を窺つた。娘の息がはずむでゐる事は、彼の女の眼が落ち着いてゐない事で直ぐ推察されるのであつた。

「おゝあの娘は私を思つてゐて呉れるのだ。何て世間は上手に出來てゐるのだらう。私達はもう思ひ合つてゐるのだ。眼丈が體の他の部分より一足先に交際を初めたのだ。」

斯う云ふ野合の樂しみときては人生の中で最も大きいものに相違ない。自分の友人の妹とか、主人の娘とか、召使ひとか云つたふうな女たちとの戀は未だ中々本統の戀と名附ける事は出來ない。そんなのはむしろいたづらな機會が生むだ無意志的な退屈しのぎに過ぎまい。

娘の方でも私に焦れてゐる。二人が我慢して、眼を見交してゐる。之は實に胸がつまる程嬉しい事

件ではないか。何うしたらあの娘と關係出來るか？　その謀みで私は夢中になり初めてゐた。大膽にやり過ぎれば娘を脅やかして了ふ。小膽にしてゐれば、何時迄もあの娘を手に入れる道がない。だのに娘はもう待ちぬいてゐる。手に入れて呉れと嘆願してゐる。そして運命もそれを要求してゐる。神も微笑み乍ら見て見ぬふりをしてゐる。私は何うしても思ひ切つてやり遂げねばならないのだ。さう思ふのは何と嬉しい事ではないか。やり遂げれば成功するにきまつてゐるのだ。

「畜生め！」と私はこみ上げるむづ痒さを押しこらへた。もう嬉しくつてたまらなかつた。それが惡いと誰が云はう。

「よし今日こそは思ひ切つてやり遂げよう。」私は誰もがするやうに、手紙をかいた。それを一寸嘗めて、大きな秘密のやうに業々しく胸へ抱き込むと、私は又娘の家へ近寄つた。門口に立つてゐた娘はオド〳〵と慌てゝ、おくれ毛をかき上げたり、帶の形をなほすやうに、うしろへ手をまはしたりした。あゝ若しも私を嫌つてゐるなら何うしてあんな風にする事が出來よう。娘は私を偷み見ては、少しばかり恐ろしさうに天をふり仰いだり、地面の草を摘む眞似をしたりした。然も草の方へは氣が行つて居ないので、その莖を指でおさへても、摘み上げる術さへ知らなかつた。もう娘は慌て返つてゐた。草を手ばなすと、今度は庭の樹の幹へ顏を押しつけて、じつと私を見た。私は此處で微笑むで見せようかと思つたが、用心深くそれを控へる必要を感ずると、態々悲しさうにうなだれて、生け垣の前を通り過ぎた。それから又、もう本統に戀の惱みで面やつれてゐるやうに弱々しく歩み返し、吐息をついて、生垣の前へ戻ると、そこに轉がつてゐた五寸位直徑のある石の下へ手紙をはさむで、一寸娘へ哀願するやうな一瞥を投げ、思ひ切つたやうに立ち上つて、早足に其處を遠ざかつた。私はそつと振り向いて見た。娘はじつと私を見送つて、小さい門の所に立つて居た。けれども未だ手紙を石の下から出す勇氣は起つてゐぬらしかつた。何でも彼の女は胸を高く波打たせて思案してゐるらしかつた。

「さうだ。私の姿が見える間、娘は決して手紙を取り上げはしまい。明日が樂しみだ。明日だ。明日行つて見ると、もう石の下には何もない。唯娘の眼がユツタリと頷づいてゐるのだ。おゝ之はもうたまらぬ事だ。」

私はクス〳〵と笑つたり、又深い理由のない憂ひに沈むだりして一夜を明かした。それから何時もの時刻に娘の家へ近附いた。娘はいくら見ても居なかつた。悲しい落膽の豫感が私の心臟を痛くしめくゝつた。何うしたのだらう。私は夢中になつて生け垣の中をのぞいた。それから石を上げて見た。

「アツ！」と私は早くも本式に落膽した。石の下には未だその儘で手紙が殘つてゐた。悲哀と私一流の怨恨とが一時に私の意識を占領した。

私は手紙をやぶり捨てるために、それを指の先でつまみ上げた。あゝその時、實にその時である。私は烈しい心の動亂を覺えて、手紙を固く胸の上へ抱きしめた。皺動は騷いだ。吐息が洩れた。あ

あ實に之は何たる不可思議であらう。私は手紙の表面へ「悲しいお孃さん」と書いたのを記憶してゐる。だのに、今私が抱いてゐる手紙の表面にはそれらの字が消えて眞白くなつてゐるのだ。インキ消しの藥が何時作用したと人は思ふか。

「何て、うまい事だ。」と私は樂たさうに微笑した。その手紙は確かに娘からの返事であつた。何と書いてあつたか？　私はもう忘れて了つた。けれど何でも、もう嬉しくて寒氣がするやうな、有難い言葉が三つも四つも續け樣に繋がつてゐたに相違ない、私は見えない娘へ何回もお禮を云つて、生け垣を去つた。半町も歩いて振り返つて見ると、今迄姿を表さなかつた娘が門の前へ淋しい水の精かなぞのやうに立つてゐるのが分つた。私は夢中になつて、そのやさしい姿の方へ舞ひ戻らうとした。娘は近寄る私を恐怖するやうに家の中へ逃げ込むだ。

「この位で丁度よいのだ。之が一番樂しい所なのだ。」と私は微笑むで呟くと、思ひ返して、その頃、宿にしてゐたある西洋人の家のキッチェンの屋根裏へと戻つて行つた。今日の樂しみが斯うして終りかけると、私はもう明日の樂しみを夢みる事に精を出し初めた。その時である。私が私服巡査につらまつて了つたのは……

けれど、くりかへして云ふ。私は斯うしてつらまつて了つたのである。何んな手掛りで捕へられたかは私自身にも分らなかつたが……

新聞は私を嘲罵した。それで妹が世話になつてゐる病院の院長に迄も私の暗い行爲が知れ渡つたのである。其れが又私の仕合せの端緒となつたのは何よりも不思議ではないか。刑を濟ました私は院長に引取られた。とは云へ何も病院内の職務に服さねばならぬ義務を課せられた譯ではなかつた。遊むでゐる苦しさから逃れるために、私はギブス繃帶掛りの役を與へて貰ふやうに懇請した。それから平和な月日が無爲と無事とをもたらしたのである。

あの娘は何うなつたと誰か尋ねて呉れないだらうか。あゝ時間程いけないものが又とあらうか。私は口惜しさと悲しさに身を刺された。私が刑を濟まして後、あの生け垣を再び訪れた時、娘はもう生きてゐては呉れなかつたのである。聽けば肺病が重くなつて急に死へ急いだと云ふ事であつた。さう云へば、私が通ひつめた頃も、透きとほるやうに白い肌がいくらか不健全に見えてゐたのであつた。

あの娘を殺したのは此の私ではなからうか。又しても暗怪な疑念が私の心に蔽ひかぶさつた。肺病には興奮や心配や落膽や悲哀が一番惡く影響するのを私は知つてゐた。私は彼の女を徒らに興奮させた。手紙を呉れた日から不意にたづねて行かなくなつた爲め、娘は何んなに氣をもんだであらう。泣く爲めに熱が出る。熱のために咳が出る。咳くたびに命が縮むで行つたのだ。私は何と云ふ惡いいたづらをして了つた事であらう。あんな樂しみさへ殺人の一種であつたのか？　そして、それは何と云ふ殺人であつたらう。（おゝ餘りな事だ）

私は愛らしい娘を殺した。愛らしいので殺して了つた。此の考へが私の戀愛をさらに燃え上らせた。私は苦しく笑つた「愛が死と結びつ[illegible]た所に、何だか至上の強さがあるやうではないか。それは強い。そして緊密である。」

紫の室

何故院長は罪深い私を養つて呉れるのであらう。思つて見るに、それは彼が犯罪心理學や法醫學の研究家であつたからであらう。彼は私を利用して博士論文でも書かうと云ふのではないだらうか。事實、彼はたえず私の擧動を監視し、又私を心理檢査にかけ、あるひは感想を尋ねた。第三の場合に於いては、利巧な私は自分の罪惡を犯す心理狀態や、制しきれない獸的な惡意、本能としての殘忍性の發作なぞを說明してやつた。

院長は感極まつてそれを聞いてゐた。彼の顏は段々低くなつて、しまひには机へ顎がついて了ふ程になつた。彼は私を實際よりも以上な大惡人と推斷して了つた。私を尊敬した。彼はまるで遠ざかるやうな態度で益す私に近づいた。彼の眼は何時も「お前は偉い男だ。」と云ふやうな讃嘆の色で光つてゐた。ある時はまるで私を崇拜さへしてゐたやうであつた。勿論皆馬鹿な事である。

「お前は何うしてそんな綺麗な顏をしてゐるんだ。惡い奴と云ふものは大概頭蓋が曲つてゐたり、顏が横の方へひねくれて、齒が大きくて長く、眼球が上釣つて、ドロンと濁つてゐながら、然も何となくギロ〳〵してゐるものなんだがなあ……」と彼は或る夕方嘆息して云つた。

「先生は色魔に就いて何うお考へですか？」と私は初めた。「氣性の惡い奴だのに、何處へ行つても女に好かれて了ふやうな男がありますが、それは何故でせう。」

「女にはそれ自身で惡を好む性向があるからだらう。」

「それに違ひありませんが……然しその思想に依りますと女があまり可哀想ですね。何にせよ、惡が美と結合してゐる事は一つの微妙な不可思議です。そして惡心と美貌とを持つたもの〻仕合せつたら……それは比べるものがありませんね。女達は丁度それを愛慕します。女を得るには釣り道具も何も要らないんですからなあ。」

「成程……」と院長は氣味惡る相に顎を机へ押しつけて了つた。

「私の考へに依るとですね。强大な惡はそれ自身で病的なものです。しかし、或る程度の惡になりますと、それは生存上必須の要件なのですね。それで自然は斯う云ふ健康な正規的な惡を成可く絕滅させないために、隨分と骨折つてゐると云ふ事が分ります。優秀な理性が一番遺傳しにくいものだと云ふ事實を先生は何う思ひますか。」

私達は斯んな風に話したものである。私は先生の好い伴侶であり、思想上の相談役であつた。院長

は私に感化されないやうにと思つて、隨分努力もし、體や頭を洗つたりしてゐた。けれども私の說明をその儘論文の中へ書き込むのは僞りのない所であつた。

私はそれでも好い周圍を惠まれてから、段々と怨恨や不滿を抑制するやうに努力し初めて居た。惡い心が起ると、靜かに書見などをして氣を散らす方法を覺えるに至つた。私は自然、自分の幸福を感ずるやうになり、古い惡事を想起する事で心を痛めるやうにもなつた。自分が精神上の片輪であると云ふ意識が眼覺めてからは、何うかしてその片輪を治さうとする欲求で心を一杯にしてゐた。だが一體何がその結果であつたらう。

此處に又いけない支障が起つて來た。私はあるァバずれな婦人患者に思ひを掛けられ初めた。女の愛慾が私の心に響くと、その反應が淺間しく私を燒いた。私は戀を感じ初めた。それに伴隨して殘忍な氣持がたえず行き來するのは一體何う云ふ譯であつたらう。私はその年上の女が憎いやうに思はれ、それをいぢめてやらうとする欲望で一杯になつて居た。私は興奮すると直ぐ殘忍になつた。その年上の女ばかりではない、院長の令孃も私を大分好いてゐるのが私の心へ響いてゐた。彼の女が色眼を吳れる事、肱を觸れる事等が私に可笑しく思はれた。けれど彼の女は未だ耐へる力を失つてはゐなかつたらしく、又私が罪人である事や、妹が白痴であることから、私を恐れ嫌つてゐる風でもあつた。

「低能は筋を引くものだ。」彼の女が斯んな風に考へてゐるのは私にも充分分つてゐる。彼の女は風のない靜かな夕暮なぞには妄想の深みへ入つて、自身の胎內に低能な兒が哺くまれてゐる有樣なぞを見て驚いたりするらしかつた。彼の女は或る時私と一緒に病院の標本室へ入つて見た事がある。アルコール漬になつた長い男性の脛なぞが白くフヤけて、罎の底へ足の毛が拔けてたまつてゐるのが私を大變不愉快にした。それから或る無頭兒の罎詰めの前迄行くと、令孃の顏が不意に歪むのを私は早くも發見した。

「畜生！　この女は低能兒をはらむ恐ろしさを又しても妄想して惱むでゐる。」と私は腹の中で叱言を洩らさねばならなかつた。

二人の女性が私を注視してゐるために、私は何時も氣が落ち着かなくなり、勢ひ擧動も荒くなり勝ちだつた。勿論注意深い院長は私が心を勞らせてゐる原因を見て取らずには置かなかつた。

「私は外圍が心へ及ぼす効果と云ふものに就いて、大きな興味を持つてゐるのだ。何うだね。お前はあの紫の室で少し暮して見ないか。きつとお前の心がよくなるから。」善良な院長は浮かぬ顏をして斯んな風にすゝめた。紫の室と云ふのはヒステリー患者を治すために院長が業々造つたものであつて、その中央に小さな噴水の出來てゐる靜かな落ち着のある室であつた。四方の壁も寢臺の足もその他の裝飾も全部紫色を以て塗られてあつた。

私は元來紫色が大變にきらひであつたから、此のすゝめを何うかして逃れようと思案した。

「先生は紫色が人間の惡心を矯正するとお考へなのですか？」

「さあ……少くとも橙色よりはね……」

「子供の中に黑い部屋で育ちますと、その黑がしん迄沁み込みます。けれど大人になつて紫の部屋に入つても、黑の上へ紫はそまらないでせう。」と私は沈むで答へた。

「しかし、まあ、入つて見なさい。何か効果があるかも知れないから……」

以上の會話はまるで虛言のやうに態とらしく見えるかも知れない。けれど全部事實であり、院長の呑氣に近い優雅を證據立てる好い材料の一つであらう。人々は如何に思ふか。世間の學者達は熱心に惡人を矯正しようとして考へ、骨を折つてゐる。然も紫色の室以上のものを設計し得ないのは大きな悲しみではなからうか。

私は何時も思つてゐる。「幼いものをつまづかすのは、老人の足を切り取るよりも、もつと惡い事だ。」と。紫色の室が役に立つのは、其處へ入るもの丶頭蓋骨が未だ小さく柔軟な場合である。

私は紫色の室内に眠つて深い悲しみに閉された。私はもう駄目である。此の靜寂が身に沁みて痛い。私はしまひに耐へ切れなくなつて、理由もなく增大する涙の粒を落した。

夜の戯れ

多くの病氣に向つて、紫色が好い影響を働く事を、英國のスノーデン博士が考へてゐた。そして主唱者の墜りやすい通弊として、彼もその影響の効果を過大視してゐたやうである。我が院長に至つてはまるで誇大が狂的に迄進むで、私を嫌ひな色でせめさいなんだ。彼は私の惡心を紫色で包み隱さうとしたのである。けれど彼は本統にそんな馬鹿氣た望みを三分でも持ち續け得たであらうか？　私には何うしても院長の心持を洞察する事が不可能であつた。

私は不眠癖に苦しめられ乍ら、毎夜を紫色の室で大人しくしてゐた。同じ色の絹で蔽はれた燈光が、同じ色に見える音のない小噴水の水やしぶきを柔らかく照した。何一つ落ちてゐない床の上の廣い淋しさが眞夜中になると一層廣がつた。私は何うかして眠らうと願つて、あの觀無量壽經の中にある一つの靜視法、即ち落ちる日輪から水晶の幻影を生み出す事を考へ耽るのであつた。だが、話したいのは更に別の事である。

その時であつた。實に、物靜かな空氣が鼓膜に感じない前に、皮膚へ感じる程度の振動を起したので、私は忽ち我に歸つて耳を立てた。

足音である。人の來るけはひである。室外の廊下に思ひ餘つて、誰かゞ立ちすくむ樣子らしい。だが、事件はもつと別の事である。

誰であらう。女であらうか？　女ならば誰であらうか？　之が私の無言の質問であつた。

「あれかも知れない……」と私が推定した當の人物は矢張り女性であつた。彼の女は何時も私の眼に何物かを讀まうとして焦躁してゐるのが分つてゐた。私が一寸戯れにやさしい顏をすると、向うは却つて眞面目に怯えたりした事もあるその女と云ふのは獨身の看護婦長であり、女の癖に極く愼ましい方であつた。從つて幾らか物識りのやうに見えた。彼の女は何うかして私の口に「戀愛」と云ふ言葉を上させようとして骨を折り、色々の導火線へ火をつけて見てゐたのである。彼の女は胸の中で「私達はもう戀を仄かに感じ合つてゐるのだ。唯お互ひに內氣だから打ち明けずにゐるのだわ。」と云ふ一人定めの思想を抱いてゐるのが確かであつた。女は早く私から「甘い苦しみ」と云ふ奴を打ち明けて貰はうとして、もう夢中になつてゐた。始終自分の服裝を替へたり、歩きつきを誇張したり、つまらぬ事に驚きの聲を發して見たり、フンフンと鼻を鳴らしたり、一人で海岸へ行くと云つて出掛けなかつたり、態々犬を私のそばへ連れて來たり、鸚鵡にものを云はせて見たり、風呂に入つて香水をつけて來たり、腕をまくつてムク毛を口先で吹いたり、子供の時に出來たと云ふ小さく愛らしい腫物の痕を見せたり、生ぶ毛の話をしたり、或はもつと精神的な方へ材料を代へて、ラファエルの運命の三女神中何れが魅惑的かと尋ね、ゲーテの艶福を評したり、態と椅子をガタ〳〵させ乍らベトーヴェンが悲劇的な男である理由を聞いたり、《その癖答へなぞは聞いてはゐない。》その他あらゆる誘惑の機會を造り出さうとしてゐたのであつた。さうだ。下らない事の極みである。

「さうだ。あの女に相違ない……」此の考へは私に取つて甚だしく不愉快ではなかつた。唯もう少しあの女が美しければ好いのだが、と云ふ嘆きがなかつたならば……

扉の外では頻りに空氣が動き、又留つた。若しあの女ならば出來る丈からかつてやらうと云ふ惡心から、私は寢たふりをして聲なぞは決してかけてやらなかつた。けれど年がさの女は大膽である。苦しい胸を打ち明けるために、此の離れて靜かな室が最適なのを知るのであらう。そつと扉を動かして、中の樣子を窺ふのが私の背中へ感ぜられた。私は寢返りを打つ事も出來ず、息苦しい氣分になつて、顏を皺めた。私はもう戰ひに敗けたやうであつた。

足音は靜かに室內へと移つた。そして私の寢臺へ向つてゆつくりと進むで來た。私は心を締められるやうに緊張した。そして名狀しがたい畏怖の念でガバと起き上つた。振り返つて、足音の主を見詰めた時、私は到頭、

「アツ！」と云ふ聲を絞り出した。足音の主は四圍を見廻し、私の叫びが決して遠い室々へ迄は達かぬのを推察した。そして、

「靜かに……」と手で制した。「驚くことはない、驚く事は……」けれどその聲は少し慌て氣味であり、自ら怯えてゐるやうであつた。一體何事であつたのか？

其處に立つてゐるのは確かに院長であつた。然も平常の院長ではない。その點が私を脅やかした大

きな原因であつた。彼は異人風の寢卷を長々と着、房を垂らし、それから哲學者が冠り相な夜帽を戴いてゐた。私は斯んな院長の姿を見るのは實に初めてゞあつた。それ許りなら未だ何でもない。彼は片手に大きな壺を抱いて、平常は青い顏を眞紅にし、私を睨つと見下してゐたのである。この妙な行動の半分が狂氣から出來てゐないと誰が云ひ得よう。

「何うなさつたのです。先生……」と私は呆氣に取られつゝ小聲で云つた。小聲にである。

「いや……」と院長は口を尖らして呟くと、抱へてゐた壺をゆつくりと床へ下し、再び私を柔和に打ち眺めたのである。

「その壺は……」と私は段々聲を細めた。

「何でもない……」と院長は自分の身體で壺を隱すやうにした。

「院長さん。貴方は私を何うかなさらうと云ふんですね……」私は怖え乍ら辛うじて之丈を早口に云ひ終つた。けれど未だ何も云はない樣な氣がしたので、もう一度少し聲を力づけて、「院長さん！　貴方は私を殺す氣ぢやないんですか？」と本統の所を口走つた。私は本當に死の豫覺に打たれたのである。

「お前の言葉は何時も誇張的で困るよ。私は本統に誤解されるのが苦しいのだ。」院長は之丈云ふと歩き勞れた旅人のやうに寢臺へと崩れかゝつて來た。私は一層心を緊縮させて、院長がブカ〳〵に緩い

寢卷の下から毒藥でも出しはしないかと眼を見張つた。あゝ、此の紫色の室は他の人の居る室から遙かに隔つてゐる。私は何よりそれを恐れた。そして院長が私を此の室へ寢るやうにさせたのは矢張り未知の目的の爲めであつた事も察せられた。だが問題はそんな點にはないのである。

「しまつた！」と私は齒を喰ひしばつた。私は一つの兇器をも此處へ運むではゐなかつたのである。いや、慌てた私は咄嗟の間に何も考へたのではなかつた。

「それは確かに……」と院長は案外打ち萎れて何事かを語り出した。「確かにだね。二人の人間がずつと他の目から隔離された所で一緒に居るとだね。相手に何か害を加へてやらうなんて心を起し易いものなんだ。他の多くの眼からの隔離、それは實に驚く可き恐る可き惡化を齎らし易いものだ。」

「それで……」と私は力を入れた。

「いや、お前はいけない。殺すとか、殺されるとか、そんな動詞を容易く使ふのは好い事ではない。」

「さうです。そして云ふのではなく、その行爲を實行するのは更に惡い事です。」と私は少し巫山戯て云つた。何故なら私は院長の擧動に何の惡意も見えないのが分つて來たからである。とは云へ私に何が分つたのであらう。

沈默が續いた。院長は堪へがた相に頭を拳で叩きつゝ室內を歩き廻つた。私も靜かに口を閉して、院長が何んな風な事をするか、ぢつと注目した。勿論、息のつまる注目である。

「……私は……」と彼は軈て思ひ餘るもの〻如くに口走つた。「私は此の頃、惡い悲痛に取りつかれてゐる。お前にそれを察して貰ひたいのだ。」

私は不思議に感じた。斯んな老人と云ふものは、決して若い者へ自分の弱身を表はさないのが普通であるのに、何うして彼は斯んなに老人的高慢心をなくして了つたのであらう。

「ね、お前、私は妙な癖に落ちてゐる。一つの悔恨を想起すると、直ぐそれに關聯して他の悔恨が、又それに引つかゝつて、更に古い悔恨が出て來る。斯うして三分の間に一生の悔恨が塊りになつて私の心を押したふし、何が何だか分らない總括的なつまり象徴的な悲痛であたりが眞つ暗になつて了ふのだ。」

私は以上の言葉に正直な注意を向けた。そして院長が少しも僞りを云つてゐるのではないと云ふ直覺で院長へ同情した。然し不思議ではないか。何故院長は不信用な私へ向つて斯んな懺悔を敢てするのか?

私は一つの推定法を知つてゐる。若し女が自分の悲しみや苦しみを一人の男へ訴へる場合がありとすれば、その悲苦が何んな種類のものであらうと、結局彼の女自身の戀愛を打ち明けてゐるのだ。

若しも院長が女性であつたなら、彼は明かに私へ戀を打ち明けてゐる事になる。彼は靜かに足を忍ばせて私一人の居る室へ來た。そして、誰も聞かぬ所で、私に彼自身の悲しみを話してゐるではないか。

私には分らなかつた。分る譯がない。

「先生は私にその悲しみを打ち明ける爲めに、私を此の室へ眠らせたのですね。それが本統の目的で、私の頭を平靜にさせるのなんか、二の次若しくは三の次なんですね。」私は快活に笑つた。

「いや、さう思はれては困る……」と痩せた老人は皺だらけな笑ひ方をした。そして泣き相に興奮して私を見詰めた。それらの行爲は皆決して尋常ではなかつた。何かしら祕密が影を造つて、我々の間を暗くしてゐた。

「それは……お前は可愛らしい。それに相違ない……」と軈て彼は獨語する如くに云ひ捨てた。「けれど、お前が可愛らしいから、私が悲しみを訴へると思ひ取つては困る。私は色々のものを恐れるが、その中でも一番誤解を恐れるのだ。」

此の言葉は私を一驚させた。他の目がない所で、一人の相手に悲しみを打ち明けるのは、戀を打ち明けるのと同じだと云ふ推定法を此の老人も心得てゐたのである。

「奇態ですな……」と私は一人で云つた。

「全く、奇態と云つても……まあ好いだらう……それに近い。」と院長は無茶苦茶に答へた。彼は又慌て出してゐたのである。

「例へば此の壺だが……」と老人は稍悲壯な表情になつた。私も眤つと壺を睨めた。私の興味は俄かに動いた。何故なら私は骨董品が大好きであり、その爲めに段々と奥深く入つて、斯う云ふ趣味が矢張り惡と同じであり、又此の趣味が私の惡心から出てゐることを悟るやうにさへなつたのである。(之は一般の骨董品愛好家には當て嵌まらぬ說であるが、私に丈は適切なものであり、又私自身が經驗から割り出した思想なのであるから、私丈には間違ひでない。モルヒネ中毒者や變態性慾家、精神病者、惡人それらの人は主に小さく部分的な人工美を愛する傾向があり、愛情の廣い人、ゆつくりと落ち着いた博識の哲學者、農夫、健康の人等は遠く廣く、やゝ粗雜な廣角的な自然美を愛する性情を持つと云ふ點は私が態々主張する迄もなく一般の事實である。たとへ時々例外はあつても、その爲めに如上の通則が全然破れる事は出來ないであらう。もう一度云ふ。惡人は近視眼であるが、その眼球はアナスチグマツトレンズのやうにシヤープである。善人は遠視眼である。それで、遠くの地平とか天空とか云ふ大まかなものをデテール拔きにしてぼんやりと鈍感に眺めやるのである。そして之等の規則は半分許り眞實である。)

「此の壺を何う思ふ……」と老人は首を下へ向け、胃を縮めて貧相に尋ねた。

「奇態な壺ですな。」と私は改めて檢べた。高さ二尺程の素燒である。其の他の何者でもない。

「此の唐草文をお前は何う思ふ。」

「それは飛鳥朝の時代のものですか？」私は此の方面に少し暗かつた。

「之はアラビヤ文樣だ……」

「先生はそんな事迄知つて居るのですか。」

「檢べれば分る。分らないものだつて、分つて來るさ。覺えて置きなさい。今に色々の事が分つて來るから。」

「ですが、之には支那文樣の趣きがないとは云へませんね。」

「それは寧ろ支那がアラビヤの感化を受けたのだらう。」

院長は壺に就いての說敎でもう夢中になつて來た。私は此の老人の心持が殆ど解せなくなつた。何うして彼はそんなに夢中にならねばいけないのであらうか。彼は何でも、自分の家の庭で之を掘り出したと云つてゐる。そして、彼が之を默つて自分の手に入れて了つた事を誰一人知つてゐないと云つてゐる。然も此の二尺程の器の中には人骨が入つてゐる。彼は臆病な手つきで、それを拾ひ出して私に見せたのである。

最後に彼は思ひ出して云つた。

「もう時間が過ぎた。」さうして壺を抱へると、悲痛な足どりをして紫色の室を去つて行つて了つたのである。

私は獨りになつてから一層興奮した。眠れぬ眼を大きく開くと、沈思しつゝ室を歩いた。

「さうだ。あの壺には何の譯もないのだ。院長は戀を打ち明けそこなつたら、あの壺でも見せて、それを室へ忍び寄つた理由にしようと用心して來たのだ。」此の考察は正しい如くに見えた。何故なら、彼は歸りしなに斯う云つたからである。

「……此の壺は祕密にして藏つてあるんだ。それでないと警察へ取り上げられて了ふんだ。人の骨が入つてゐるんだからね。それで誰にも見せないんだが、まあ、お前丈にはな……」

私はそんな壺を見せて貰へる程に、院長から好意を持たれてゐるのが、矢張り厭であつた。壺の中の人骨を見た事、院長が室へ侵入した事、之等の不快な事實が私を粗暴な感情へと導かずには置かなかつた。「畜生！　私は……あの婦人病患者と關係してやらう。」腹立ちまぎれに、さう決心したのは其の夜の明け方であつた。私は割合臆病な人間であつたので、私が一つ惡事を働く前には、必ずそれを起させる誘導的な凶事が先驅せねばならなかつたらしい。院長に心を亂された事が私を再び惡い情熱へと追ひやつて行つたのである。考へれば、皆壺の骨に根本の罪が秘むのであつた。

木偶流動

私はその後も出來る丈心を平靜にして、むしろ沈鬱な日を過した。其の間に起つた不慮な事件は幾つかを數へ出される事が出來よう。けれどその中で一番大きな二つを選ぶならば院長の急死と、院長の子息の怪我であつた。斯う並べると人間は全くヒ弱い構造を持つたものだと云ふ考へで悲しまされよう。だが其れに間違ひがあらうか。大體の事を話せば、子息の方は今迄何處かの水産講習所や臨海實驗場へ行つて居たのであるが、最近に海岸の漁師達と知り合ひになつて、彼等が漁に出る時、その舟へ同乘させて貰つたのが惡かつたのである。此の漁師達が或る魚の大きい群を見出した時、他の側に居た漁船も其れを見附けたので、兩方の漁師は到頭舟を接して毆り合ひを初めるに至つたのである。院長の子息は一緒になつて、毆つたり毆られたりしたが、終ひに頰骨を打たれて氣絶したのだと云はれてゐる。斯う書いて來ると人間が全く木偶のやうに思へてならぬではないか。實際人間は振り子の調子につれて、カタ〳〵と動きバタリと倒れる木偶のやうではないか。私は自分が以前あの例の娘を見初めて通ひつくした頃もそんな考へに苦しめられたものである。私が歩いて行くと、娘の方も表れる。私が近附くと向うが隱れ、私が遠のくと向うがバタ〳〵とついて來たのではないか。

「畜生。」此の頃でも私は自分を木偶以上に進歩させたとは思へない。現にあの婦人病患者がバタ〳〵バタとやつて來る。私はそれが心に響く。ガタ〳〵と動く漁師の喧嘩場が眼の前に浮き上がる。愛するために近づき合ひ、爭ふために吸引し合ふ其れ等の事象は意識もなにも持つては居ない自然現象のやうではないか。

若い人達が內省的な心理學をきらつて、唯表面の變化丈を觀察し、檢定する事で、外面的心理學を樹立させようといきまくのはきつと彼等も私と同じやうな「木偶感」に縛されてゐるからであらう。一切の形容詞を拔き去り、出來る丈動詞を多く使つて日記を書き、或ひは小說のやうなものを書かうとする人があれば、彼も亦「木偶感」に憑かれてゐる事が直ぐ分る筈である。

院長は、バタ〳〵と死んでしまつた。その情景は唯スクリーンの上の映畫に過ぎない。うしろへ廻つても靈なぞを踏みつぶすやうな危險もなにもありはしない。之は何だか厭な事實ではないか。ふり返つて見ると、彼の殘したのは莫大な借財丈であつた。鼻柱の折れた子息は寢臺の上で落ち着いては居られなかつた。彼は振り子のやうに寢返りを打つた。令孃は兄を氣づかつたり、私を懷つたりして唯廊下を足音で響かせてゐた。

「何がバタ〳〵だ。畜生共！」と私は時々獨語せねばならなかつた。

病院は愈よ維持の困難を感じてゐた。院長はあんなに大きな借財をして居乍ら、何うしてあんなに呑氣にしてゐたか？　此の點は私の大きな疑問となつて殘つた。ことによつたら彼は自殺して了つたのではなからうか？　此の疑念は死を殘忍視する私にとつて當然のものであらねばならぬ。

私は病院に飼はれてゐた間中、遊び通してゐた譯ではなかつた。へり下つた心で受附け掛りもし、藥局へ入つては坐藥をねつたり、消毒ガーゼを造つたりして働いてゐたのである。けれど院長が死んで、子息が暗い顏をしてゐるのを見ると、もはや私が此處に留まる事はよくないやうに思はれた。氣の利いた私は半分無斷で病院を去つた。そして子息は大變にこの事を喜んでゐたと私丈で推察した。

三ケ月後、私は到頭あの婦人病患者——もう治つて太り返つてゐるが——と關係して了つた。けれど、それと同時に彼の女の妹とも關係する事が出來るやうになつたのは何と云ふ厭な廻り合せだらう。

其の初め終りを話すのは私に取つて愉快であるが、此の事件を惹き起す爲めに、用ゐられた所の計略は何も私の獨創ではない。私は少し許り知り合になつた或る男から敎示された通りを應用した迄なのである。

私は妹の方を一目見ると、それが姉の方より、遙かに私の慾を吸引するのを知つた。それで姉なぞの事は忘れて、妹の方へ夢中になつて了つた。私は例によつてバタ〳〵と行つたり來たりした。生け垣の傍の石も前の女の場合と同じやうな狀態であつた。

「生け垣が似てゐるのは好いとして、おゝ何故石迄がそこに轉がつてゐるのだ！」私は恐怖もし憤怒もした。自然が餘り趣向をかへて吳れない事が私の怨恨をかり立てた。

「畜生め！　お能の舞臺みたいに、何時でも松の樹がありやがる！」

私は石と生け垣の爲めに今度の戀愛を尠からず破壞された。以前にはこの上もなく懷かしかつた其れ等のものが、今ではもううるさいやうな氣がしてならなかつたのである。けれど斯んな小さい事を

氣にするのは未だ戀に慣れぬ男である。何故ならば、郊外なぞに立つてゐる家々は初めから皆双子同志のやうに似てゐるのだ……。

或る暗い夜、惡い運命の橋が筋交ひに十字を切る所の私の室から、私と云ふ一つの蠟燭が消えたとする。だが、私は死んだのであらうか。思つて見て貰ひ度い。私は橋を何の方角に向つて走つたか？運河の眞中を、時計臺の鐘が十二時を打つ時、その音の餘波で動いて行く一つの舟で、灯が消えたなら、何が起つたのであるかを考へよ。死ではない。唯、死に似た樣な强さの情事が想起されぬであらうか？

暗い水面へと續く、黑い大きな石段の樣で、私の罪惡は何時初まつたかが分明してゐない。下の半分は寧ろ影に過ぎない。そして水の樣に冷かなのである。殘りの半分は、前の半分の影で出來、過去に依つて漸く色附けられる無色の現在、それが私の持つ現在であつた。昔の劇場が今牢獄に變更されたとすれば、それが私の心なのである。

いや、私はもつと燈火の屆く所迄這ひ出して、聽き手に顏を視せよう。私は斯んな醜い人間である。だが、彼の女等は恐ろしく美しかつた。實際、彼の女等の爲めに、大理石さへが愛嬌を見せて凹む程であつた。誇張ではない。私は石の笑靨を經驗した。私は元石の樣な冷たい人間だつたのである。私の心はもうアカンザスの樣にフワ／＼と浮いて來た。私の周圍にはナポリの暖風が漲つて來た。スリッ

バから飛び出した足の樣に、私の氣持はスガ／＼した。だが、それもほんの一時である。

考へ度くない幾つかの事を、私は話さねばならない。

彼の女等の顏は何んなであつたか？　それは美しかつた。だが別れて來ると何うも思ひ出せない樣な顏であつた。彼の女等は何んの特長も消し去つた美しさで輝く。彼の女等は鏡の樣に光つて然も「無」なるものであつた、私が彼の女等に近附いたとせよ。私は唯私自身の姿を見るのに過ぎないのかも知れなかつた。然も此處に二つの戀愛が成り立つたのを思へば、鏡は何かしら性を持つてゐたのである。

あゝ彼の女等の顏には變化がない。餘り定まつてゐる整ひの爲めに、忘れられ易いのだ。定住は無に似てゐる。雪が積もり過ぎたとせよ。もはや寫眞機を持つて出掛ける必要はなくなる。後ろも前も一色の平坦！　何處へでも、坐つて居る所から、レンズを勝手に向けるが好い。一と云ふ字が撮影されよう。それだ！　彼の女等はその一なのである。後ろ姿も横姿も見て廻る必要はない。山や森はボンペイの市街の樣に下層に隱されて了つたのである。

だから本統の彼の女等を知らうと云ふには、何でも骨を折つて、廻旋階段を降りて行かねばならない。其處に初めて廢墟の樣な彼の女等の冷たい心が見出されるのである。彼の女等は精緻の替りに純野を持つ埃及彫刻と丁度反對のものであつた。仕掛けの細かい贋造紙幣印刷機と同じで、結果を見な

い間は精巧な一つの價値で輝くのが彼の女等であつた。

愚昧の過剩から、私は彼の女等の頰へ、非現實的、骨董的な磨きを掛けて、自分丈の置物にしようと試みたが、花瓶には罅が入つて了つたのである。もう之等二人は私につまらないものであつた。私にはそれが口惜しくてならなかつたが、人の力で何うとも治す術は見つからなかつたではないか。

「女は矢張り詰らないものだ！」

私は段々遠ざかつた。それもこれも私が「木偶」だからなのか？　私は振子の響きに合してカタカタと場所を變へて行くパンチと云ふ人形に過ぎぬのか。

私はぼんやり街を歩いた。そして少しばかり知り合ひの人に會つた。

「君は未だ健康なの？」と私は不健全な問ひを發した。すると私の相手も亦乘り氣になつて答へた。

「私はある理學者の弟子になつたがね。お蔭で隨分達者過ぎるよ。ウムそれに、近頃面白い事があつたのだ。私の體はその儘で磁石の働きをするんだ。面白いぢやないか。私の腕に依つて磁針の方角を變化させることが出來るのだ。何でも兩腕が恰度兩極になつてるんだ。いや足の方にも同じ性能があるんだ。試驗をした理學者も驚いてゐたよ。私位ゐ強い磁力を持つた男は少い相だ。ね君。人間は一樣でない、と云ふのが私の理論なんだ。」

知り合ひの男は何でもそんな風に話した。私は細かい點をもう記憶してゐない。私が知つてゐるのは唯自分の淋しさ丈であつた。私は海岸を歩き乍ら涙をこぼした。それから暗澹たる夜空を眺めた。遠くに火事が起つてゐるらしく、空の一點丈が赤く色づいてゐた。

「人間は一樣でない？　馬鹿な！　別々のものが一つに見える。姉と妹とは段々似て來る。此の頃では嫉妬の喧嘩もしない。却つて彼の女等は二人で慰め合ひ、二人で心を合せて私を怨むでゐるのだ。別々のものが一つになつたのだ。」

私は向う見ずに歩いた。と云ふよりは足に體が引きずられ、體に足が引きずられて行つたのである。暗の中にはもう一人別の知り合ひが立つて考へてゐた。そして何時もの通り、私をさぐるやうな目つきで近づいて來ると

「例のバタ〳〵は何うなつてゐる？」と問ひつめた。知り合ひの眼には悲痛な色があつた。

「依然としてバタ〳〵だ。」と私はうなだれて答へた。

「あゝ悲しい事ではないか。それは現象自身がバタ〳〵なのではない。君の心！　それが大變傷ついてゐるから起るのだ。同情、……君分るかね、同情だよ、同情を以て朝顔の蔓を見てやり給へ。蔓の先にはカタツムリのと同じ眼があるのさへ分るだらう。バタ〳〵は同情の缺けた所に直ぐ起つて來る一つの破壞的な渦流なのさ。それは恐ろしい。人間がベルトやシャフトや電球のフィラメントやセルロイドの切り屑に見えてよいものだらうか。」

「私を此の上苦しめるのか？」私は夢中になつてその知り合ひに刃向うた。勿論唯斯う書き流すと、その知り合ひはダイモンのやうなものに思ひ取られ勝ちであるが、實を云ふと、私の周圍には私を何時も戒めて呉れるある免職教員が實在したのである。それは事實に於いてはもつと自然的に私の前へ表れて來るのであるが、私は彼を恐怖する餘り、闇の中で彼の聲を不意に聞くやうな錯覺的な記憶丈より他に何ももたないのであつた。

「君は冷靜なのでない、苛酷なのだ。君は自然主義の小說家のやうに唯一面的に苛酷なのだ。老子のやうに柔しく廣く無關心なのではない。獄吏のやうに首斬り臺の音丈を音樂だと主張してゐるのだ。悲しいではないか。バタ〳〵は狂氣の一歩前なのだよ。おゝ、そしてあの火事を見たまへ。病院の方ではないか。」

「さうだ。」私は萎れて答へた。何をさうだと答へたのか？　勿論兩方の話し、即ち私が何うしても苛酷な事と、火事の方角が病院の近くである事の二つに對してである。

罪は常に他の罪から起る

急に新らしい事件である。

火事！　そして燃え上つてゐる。病院が燒けて倒れる。それが何よりも明らかな事實であつた。

それは未だ良い。惡いのはもう一つの事であつた。火事が嚴密に檢べられた時、私の妹丈が怯えて答へを曇らした。あゝ、そして、何たる運命の狂ひであるか。妹の行李が荷造り迄されて、病院から遠い物置に隱してあつた事實が發見されると、眼の早い警官達は、妹に放火の疑ひをかけた。

「妹！　お前がやつたのか？　そして、晝間の中に自分の行李を燒けない所へ持つて行つて置いたのか？　おゝ、それが低能の證據なのだ！　何よりの印なのだ。」

私は悲愁と絶望と低能な妹の代りに受けねばならぬ責任感とで、體を折られるやうなつらい思ひを味はつた。

「兄さん。仕事がつらくてね。病院を燒いたら家へ歸れるかと思つて……」

「それが低能な女の考へなのだ、世間に好くある例の一つなのだ。」全く讀者よ。低能な女は他の低能な女の精神をまるで模倣でもしてゐるやうではないか？　一ケ月新聞を讀み續けた人は必ず如上の實例を二つ三つは見掛けるに相違ない。然も何うであらう。妹は全く獨創的に此の犯罪を犯したのである。之が白痴に取つて最大の發明なのか？　そして、馬鈴薯からは馬鈴薯が出來ると云ふ悲しい事實を語つてゐるのであるか？

妹の裁判は大變に嚴しかつた。そして精神鑑定係りと呼ばるゝ白痴に近い醫師は彼の女が白痴と見なさる可きでない事を主張した。（之は東京から遠い地方の事である。東京の裁判所では多くの醫學

博士が何かしらをしてゐて、犯人が白痴であるか何うかを、色々と相談する。そして、彼等は博士なのである。」

妹は九年の懲役と極められた。

私は何んなに沈鬱な日を送つたらう。そして何んなに妹のための罪滅ぼしとして、善良な仕事と行爲とを望むだであらう。此の悲しい動機に依つて、私は徐々に正しい道を踏む事が出來さうになつて來た。

そして私は正直な人間に改まつたか？

否又しても大きな障碍は持ち來された。

火事の際に燒け死んだ看護婦長の黑焦になつた屍體を何時迄も記憶から除く事の出來ない私に取つて、婦長の實弟である若い藥劑師と時々顏を合せるのは隨分とつらい刑罰であつた。私は彼を見ると釘附けにされたやうに血が凍り、冷たい沼の底へ落ちて行くやうな慚愧の念でなやまされた。ある時の如きは、狂氣になつたやうに、その弟へ縋り附いて、私は地面に坐つた儘、許しを乞うた事もあつたのである。

「あの白痴娘の責任は全部私に轉嫁されてゐるのです。あれを怨まずに、私を罰して下さい。私を……」

「いや、人を怨む必要はないのです。犯罪は常に一種の過失ですもの。」諦め深い若い藥劑師は人なつ

こく私を慰撫した。

「けれど、貴方は內心思つていらつしやる、他の事を！　他の事を！」

「いゝえ、之丈です。貴方の妹は寧ろ罪がなさ過ぎた。それが今度の過失の原因なのです。」

「貴方は何かしら私と別の考へ方をしてゐますね？」

「さうです。探索してゐる內に、段々と眞相が別つて來たのです。」

「眞相？」私は直立して斯う叫んだ。

「さうです。もつと檢べたら、一層眞實となる所の眞相です。……妹さんは單に仕事がつらい丈で火を附けたのでせうか。え？　之は可笑しいです。いや、此處に何か秘密が隱れて居さうではないでせうか。妹さんは力の澤山ある。そして勞働をいとはない質の女であつたのを私はよく知つてゐます。それが急にナゲヤリな氣を出し、仕事をなまけ初めたので、私も實は不思議に思つてゐたのですが、すると間もなくあんな大事をやつてしまつたんです。」と藥劑師は聲をひそめた。

「何故妹は放火の以前、なまけだしたのでせう。病氣か過勞かに依るのでせうか？」

「其處です。勿論勞れてゐるやうではあつたが、病氣とは見えませんでした。此の機會に貴方へ話して置きますが、妹さんは戀——たしかに戀のやうなものをしてゐたと推定せねばなりませんよ。」

「それは過ちでせう。第一相手になる男がないでせう。」

「いや、男は意地の汚いものです。そして恐らく女だつてね……」
「では妹は懊悩のために、仕事をなまけてゐたのですね。」
「恐らくさうです。」
「相手は……妹の相手は一體誰なんですか。」
「私は斷言しますが……それは院長と、それから次には院長の子息ですよ。」
「え？　院長の子息！　そして院長も？」
「私は此の眼で見たんですからね」
「何を……いまはしい事をですか？」
「妹さんは紫色の室で寢た事があるんですよ。」
「え。あの小さい噴水のある室？」
「ハヽヽ、院長の大好きな室なんだ。あの室へ入つて助かつた女はないんだからな。」
「そして、院長の死んだ後には、その子息があの室を使つたのですか？」
「それは見達けてないのですが。他の場所で、二人の立つて居る所を私は一寸見掛けたのです。そして私は二人の間に何かしら戀愛の火花が行交うてゐるのを感じたんです。勿論その時は感じた丈なんですが……」

「では……あとで、もつと委しく判明したと仰言るんですね。」
「不幸な事に、その通りなんです。」
「何を見たんです。云つて下さい。何うか遠慮なしに……」
「貴方！　紫色の室の直ぐ隣りは未だ人の入つた事もない不用の室ですが、知つて居ますか。あの室は全く何の目的もなしに空いてゐるんです。貴方の妹さんはあの室を一週間に一度丈掃除するのですが、それに掛る時間は何時も二十分なんです。藥局の前を通つて行つて、又歸つて來ると二十分丈何時も過ぎるんです。それが或時、三十分たつても歸つて來ないんです。（私はその時或る藥を煮てゐて、一定の煮沸時間を知るため、時計に注意してゐたんですがね。）可笑しいな、と私は考へました。一寸した戯れの心から、私はあの不用の室へ様子を見に行つたんです。すると何うでせう。扉がしまつてゐて、私が押しても引いても動かないんですね。はゝあ之は中から鍵がかけてある、そして、鍵がその儘、鍵穴へ嵌つてゐる、と私は感づきました。そして室を掃除するのに、鍵を掛けると云ふのは何より理に合はない話しではありませんか？」
「妹は……中に居つたのですか？　泣いてゞもゐたんですか？」兄である私は當然他人よりも熱心になつて訊ねた。
「私は惡い所へ來て了つたと思ひました。唯それ丈です。勿論ハタキの音も何も聞えませんでした。

それから、ずつと後になつて私は妹さんに鍵を持つてゐるのかと尋ねて見たんです。答へは私の豫想通り、若い主人が持つてゐるのだと云ふことでした。私は單なる興味丈で、さう云ふ事を探るのは罪だと思ひましてね、その先を突き詰めて聞くのを態と避けたのですが、今になつて見ると、もつと深く知つて置けばよかつたと悔いてゐるのです。と云ふのは……」と藥劑師は悲しげに、私の方へ顏を寄せた。

「先へ伺つて置きたいのですが、あの放火と、その戀愛とには、何か關係があるのでせうか？」私は斯う念を入れた。

「あるからこそ、お話ししてゐるんです。」

「では、何故、判決以前に知らして呉れないんです。」

「その頃はね、何しろ、姉の非業な最期のために、私も反省や洞察の力を全然失つて了つてゐたし、未だ、本統の急所は氣附かずにゐたものですからね。」

「さうです。貴方の姉さんの死の事を考へると、私はもう肋骨を引きはがされるやうなんです。」と私は下を向いて呟いた。

「油で黑くなつて、眼球から湯氣の立つてゐた有樣を私は何うしても忘れ去れないんです。」藥劑師は涙をためて私を怨めし相に睨め、それから又思ひ出して續けた。

「もう云ひますまいね。貴方も私も不快になる丈ですから。……いや、それより、あの院長の子息が大變好色な事は死んだ姉からもよく聞きました。姉へも妙な話を持ち掛けたんだ相ですからね。それから貴方も姉に云ひ寄つた事があるさうですね。姉は貴方を讃めてゐましたよ。」

「それは何かの間違ひでせう。貴方の姉さんは私にそれとなく何かを仰言つたり、手紙を呉れたりしましたがね。未だ何でもなかつたんです。私から云ひ寄るなんて、そんな事はありませんでした……」私は黑焦げの女を思ひ出しつゝ氣味惡く否定した。

會話は長く續けられた。そして何でも一番の罪は院長の息子にあるらしいと云ふ判定に到着した。一部の噂に依ると、息子は父の殘した大きな借財の始末に窮し果てゝゐたのである。そして院長の死後急に寂れ出した大きな病院の維持も覺つかなくなつてゐたらしい。「燒けて了つた方が結局利益になる。保險金が入れば、それで他の小さい事業に移れる譯だ。」と云ふ考へは當然息子の頭の中を往來したのであらう。けれども自分で放火すれば陰謀は直ぐ發覺して了ふに相違ない。色仕掛けで心を捕へて、白痴の娘を利用しようと云ふ惡辣な考案が何うして續いて起らずにゐるだらうか。

「それなんです。」と藥劑師は恐ろしい形相をして云ひよどんだ。

「確かですか？」

「恐らく之より確かなことはない筈だ。貴方が女から生れたと云ふ事より、もつと確かだ。分りま

すか？　然も貴方が女から生れかかつてゐる所を誰も見たのではないんです。」
「それで息子の罪については、何の證據もないと云ふのですか？」
「少しはあるんです。妹さんは時々獨り言を云ふ癖があるでせう。或る時、洗濯物を抱へた儘で「貴方、貴方、貴方！」と口走つてゐたんです。誰だつて、自分の事を貴方なんて云ひはしませんからね。」
「それは證據とは云へませんね。」と私は藥劑師を少し疑つた。けれども、私は妹が院長の息子のために貞操を傷けられ、その上、詐欺的犯罪の犠牲となつて、獄舍へ迄も引かれたのだと云ふ漠然とした觀念を植ゑつけられずにはゐなかつた。
怨恨と憤怒とは再び私の心を領した。藥劑師と心を組むで、色々の噂や、息子の樣子を探れば探る程、疑ひは眞實と代つて行つた。
殘忍な內謀は日に日に私の心の中で育つて行つた。讀者は忘れたであらうか？　私は一時自暴自棄と依怙地とから、犬殺しにさへ進むでなつた、暗怪な青年である。
私は殺人を夢み、又妄想し、遂に意圖し、企畫し初めたのである。双物は用意され、逃げる道が地圖の上に赤い線で記された。
ある人は私の愚を詰つて云ふであらう。何故お前は眞の犯人たる院長の息子を其の筋へ訴へないのか？と。

けれど、それは私の眼から見るなら無駄事としか思はれない。起訴した處で、我々が敗けるのは初めから判明してゐるのではないか。
息子は妹を强ひて姦したと云ふのではない。又放火を敎唆したとしても、その證據は上つてゐない。それに裁判官達にも名譽と云ふものが必要である。そして之は眞理を葬ることに慣れた一地方に起つた事である。間違つた判決をその儘で通すのが、彼等に取つて最も利益であるのは判り過ぎてゐるではないか。それが彼等の妻子を安全に暮させる最上の方法である。それが彼等の鬚に滋養をつけ、一層上方へ伸び上げるやうにする最適の方法なのである。裁判長の鬚は後ろからでも見える——その鬚こそ此の地方での最も誇る可き名物だつたのである。裁判長は神經衰弱に落ちて、カルシユームを含むカルピスと精力素と云ふ藥と、ヘモグロビンとヴィタモーゲンとを服用し、その上にビフステキを食べるのだが、其れが皆鬚になつて了ふのである。

朝鮮人を憐む支那人

何うして忘れ得よう。そして何を忘れよと云ふのであるか。いや、反對に、私は記憶のあらゆる粒を一時に思ひ浮べるのだ。
私は齒がみをし、骨が響きを發する程に腕を振り、又眼前の物體は何に限らず蹴返した。あの沈着

で痩薄な院長、彼が恐らく病的に迄も進むでゐた色魔であつたことを、私は今漸くにハッキリと思ひ當たる。私が紫色の室に休むでゐた時も、記憶力の鈍い院長は誰か女性を閉ぢ込めてあるやうに錯覺して、私のもとへ忍むで來たのかも知れなかつた。あの赤くなつた顏、私に媚びを作る猫のやうに光つた眼なぞが、一時に私の頭の中を這ひ廻つた。おゝ、そして院長の子息も斯んな卑しい氣質を殘らず遺傳してゐたのである。妹は何と云ふ哀れな娘であつたらう。彼の女は二人の乞食の耻を、一人で受けたやうなものではないか。

それだのに、私の復讐心は何故もつと强烈に燃え上らないのか？　私は實に自分が中氣病みでゞもあるかの如く、町や室中をよろめき歩いた。けれど、何時迄待つても妄想が實行に變化する機會を捕へ得なかつたのは一體何故なのであらうか――私は自分に聞いて見てゐる――勇氣！　それから眞心！　この二つが缺けた所に、興味中心の殘忍性丈が狂ひ廻つてゐるのではないか？　そして私は遂に心の弱い青年――惱む事を知つて、切り拔ける事を悟れぬ愚かな男に過ぎなかつたのであらうか。興味から來る殘忍！　それは多くの殺人者に取つて必須の要件である。けれど、私の場合では、その興味を求める願望が本能的と云へる程には狂暴でなかつたに相違ない。

「駄目なのか？　本統に實行出來ないのか？」私は自分の胸を棒で打つては斯う問ひ續けたのである。私は實に、斯んな工合であつた。自分を嘲ける惡魔の聲が、自分の心の中で聞え初めた時、私は何んなに絶望して床の砂を嘗めたであらう。惡人ぶると云ふことを誇る程、私は未だ幼稚で善良であつたのか？　殺人の妄想は單に脆弱な心の强がりであつたのか？　曲つた心の敗け惜しみに過ぎなかつたのか？　之が問題なのであつた。と云つても、私は何一つ辯解しようとは思はない。自分はやはり、結局、こんな工合で中氣病みを續けた丈なのである。

その頃、私は自ら進むで、ある免職の小學教員と知り合ひになつた。事の初まりは、私が彼の落した財布を送り達けてやつたと云ふ些末な點に過ぎない。けれども、私達は直ぐ親しく語り、連れ合つて散歩する迄に友誼を進める事が出來たのであつた。

或る日――二人は約束に依つて、裁判所の前で出會ひ、此の町で起つた一つの大きな事件――朝鮮人の十三人斬り――に關する裁判を傍聽した。その小學教員は「社會から不當な取り扱ひを受けた哀れな男が、如何に彼自身も亦社會を不當に取り扱ふか。」と云ふ事の實例を求めるため、私は又私の流儀で、十三人の人を斬るには何んな決意と勇氣とを要するかを知るために、耳を澄ましたのである。

約めて云つて了へば斯うである。哀れな被告、高と云ふ名の朝鮮人は、裁判長のやさしい質問に對し、一氣に答へるのであつた。

「私は馬鹿者です。何故この日本へやつて來たのか？　それが分らないのです。いや分つてゐる。故郷で義理の兄にえらく侮辱され、蹴飛ばされたんです。その有樣を、私の戀してゐる女が見て笑つた

のです。それで日本が大變戀しくなつて、そこへ行つたら、お金にもなり、やさしい人が待つてゐて呉れるやうに思へて、到頭、跣足になる程貧乏しながら、このお國へ渡つて來たのです。それから六神丸と云ふ藥と翡翠とを行商して日を暮し、もつと惡い事もしながら、夜學で法律普通科を半分やりました。電車の車掌になつてからは、日本人の女工を妻に貰ひましたが、その女は私の子を姙むで呉れないのです。「何うか一人丈でも好いから生むで呉れ。」と願つても、女は唯笑つてゐて、やはり生むでは呉れないのです。私はそれが不思議で困りました。きつと私を愛してゐないのだと氣づくと淋しくて、又歸鄕したくなりました。斯んなつらい思ひをしながら、私は妻の兄夫婦と一軒の家を借り、半分づゝ使つて、半分づゝ家賃を拂つてゐました。所が義理の兄は子供が二人もあると云ふ口實で、段々室を大きく使ひ、臺所も自分等丈で使ふやうにシキリをして了ふし、私が寢てゐると、態とまたいで便所へ行き來し、その上、私の妻へ一人の男の子を抱いて寢かさせ、私は戸棚を開けてそれへ二本の足を突込むで寢なければならない程、場所をふさげられました。そんな事を忍べば忍ぶ程、兄夫婦やその子は私を馬鹿扱ひにし、嘲けり笑ひ、私が卸した許りの手拭ひで泥の手をふいたり、私の茶碗へつぶした南京蟲を一杯入れたり、六神丸を無斷で賣つて、その金を使つて了つたり、私が買つた炭を平氣で盜み、その度に私へ惡口をつくのです。兇行の前の日、兄の妻が私の金だらひへ穴を明けて、「知らぬふりでゐるから我慢出來ないで、二言三言云ひ爭ひをしたが、その事を兄へ云ひつけたと見えて、兄は醬油の壜で私をなぐつたのです。血と醬油とに染つて私は眼を開く事も出來ずに、唯暴れてゐると、兄の妻は口惜しまぎれに私の急所をつかむだので、私は氣絕して了つたんです。あゝその時です。私に水を呉れたのは私の妻だつたんです。お前は……お前丈は私の味方なのかと云つて私は妻に泣き縋りました。妻は姉の毛を引張つて、後ろ倒しにしてやつた事を涙乍らに語りました。私はその涙を見たばかりで一切の立腹をこらへようと決心しました。皆から憎まれてゐる時、たつた一人の者に愛された氣持を誰か知つてゐる人はありませんか。おゝ……」と彼は手ばなしで泣いた。その時、傍聽席の一角からも細い女の獻欷が聞えて來たので、その方を見ると、高の妻らしい貧乏な女が顏を眼らして泣いてゐたのを私達は知つた。

「それからY署へ連れて行かれたが、巡査たちが皆兄の方を信用し、私を危險人物のやうに睨め廻すんです。疑ひ深い澤山の眼に取りかこまれて、私は又賴り所のない淋しさと憤怒とを感ぜずにはゐられませんでした。兄は「あの金ダラヒは元私のもので、高は勝手に彼の名をペンキで書いて、自分のものだと云ひ張るんです。」と誠らしく訴へました。警部は直ぐその言葉を信用して了つて、はては多くの巡査や、集つて來た車掌迄が、さん〳〵私を嘲笑したんです。いくら私が異國のものだと云つて、之はあんまりひどい。ひどすぎます。私は眼がつぶれたやうに悲しくなり、そこいらが眞暗になつて了ふ程、耻辱を感じました。なんぼ朝鮮人だつて、心と云ふものは持つてゐます。何方を見ても眞暗で、自分の本統の心持や、正直な考へを聽いて呉れる人がないのを知る時、人は無人島へ行つたよりつ

らくなつて了ひます。無人島に着いた男は王者のやうに自由です。けれど此處では……闇にとりまかれた盲目で跛の奴隷が見出される丈です。信頼してゐた警官たちまで、こんなに私を憎み、私を疑ひ、卑怯な片手落ちをして少しも自ら耻ぢないんです。此の上は自分の憤りの治る迄人を殺し、自分も地獄へ墮ちて、新らしい世界に住まうと云ふ心が起きずにはゐられないではありませんか。おゝそれが何故無理なんです。いゝえ、私はもう決心しました。私は刀を磨ぎ初めました。すると隣りの親切な老人が、「高さんは遠い所から來てゐて淋しいんだもの。何事も公平にし、喧嘩の元を引き起さないやうに……」と兄の妻へ話してゐるのが聞えました。あゝその時、私は何んなに刀を磨ぐのを控へ、感謝の心を以て怒りを飲み込み、こらへ、しのんだでせう。私の妻も聲を立てゝ泣いて居りました。」

高は途切れ途切れに以上のやうな告白を語り明したのである。傍聽席の妻女は到頭狂的に泣き出して、誰かの注意で外へ押し出された。

小學教員は沈むだ顏になつて、私とは別の事を考へ續けてゐた。

「あゝ」と私は體をふるはし、自分のと他人のとを一緒に混ぜた涙をためて獨語した。それから《後になつて考へて見ると》私は夢中で駈け出したに相違ない。朝鮮人の妻に追ひついた私は、彼の女の恐れるのをも構はず、彼の女の肩を撫で、髮についてゐた藁屑をつまみ取つてやつた。

「何すんの？」女性は私を怪しみ訝つた。

「無理はない。貴方も私も疑ひ深くなつてゐる。お互ひに殼を背負つてゐる。私が恐く見えても、あゝ、それは構はない。我々はセンチメンタルな事はきらひなのだ。だのに私は此の通りなんだ。」さう云ふと私は眞赤な眼から大粒の涙をふり落し、軈て、男らしくない擧動を耻ぢるやうに、女性の前から姿を消し、溝の中へ持ち合した四十錢を捨てゝ了つた。

朝鮮人、支那人、それから彼等に似た日本人、可哀想な彼等の中に、此の私も一員として加つてゐる。それが事實でないと誰が云はう。私は自ら痛みつゝ又彼等を痛み愍れむだ。あの一人の朝鮮人に、私の生命の半分がつながつてゐる。私を見ようと思へば、彼を見るが好い。若し私が彼であつたら、私は彼のなした通りをせねばならなかつたであらう。いや、聖者と呼ばるゝ特別の人を除いたあらゆる普通の人なら、彼の如き境遇の中で、その德と智慧とを安全に保つ事は六ヶ敷いであらう。

彼は惡い男である。それに何の間違ひがあらう。けれど私は餘りに好く知つてゐる。他の事を、他の事を、斯んな種類の惡は自身で自然に湧き起る力のないことを！　之は善を隔たる一歩のものであることを！

復讐の代償

未だ何かゞ續いてゐる。

職工と微笑

私の所へ不愉快な手紙が達いてゐる。それは例の哀れな姉妹からであつた。彼等は初めの中こそアバズレであつたが、今ではまるで繼子のやうに言葉も少くなつて了つてゐたのである。男を知つてから縮み上つて大人しくなる女は決して少くない。私のある知り合ひは電車の中である女と近づきになつた。二人は圖々しく郊外の畑道を歩いた。男は好い氣になつて女と關係し、それから小使ひを呉れとせがむだ。女は一圓丈呉れて、あとはお前と一緒に連れ添うてからやると云つた。男は承知しないでもつと出せとせがんだ。すると女は怒つて男の襟をつかみ、ふり廻し、「私を唯の女と思つてるのか？」とおどした。男も默つてゐなかつた。「この畜生！」と怒鳴ると女の首を絞めた。女は手を合せて拜み、それからは大人しく何でも男の云ふ事に從つた。何か新らしい事を教へると女は男を尊敬するやうになるのである。

それだから、あのアバズレ共が今になつて何れ程私から新らしい世界を見せられ、そこへ導かれたかは云ふ迄もないであらう。

來た手紙には斯う書いてあつた。

「……本統に私達は生きてゐたくありません。生きてゐたつて、生きてゐる氣持がしてゐませんわ。」

私は口惜しさうにそれを破きすてた。

又その次に姉丈が一人で手紙を寄越した。

「……貴方は何んと云ふ方でせう。愛する印だと云つて私の腕へSと云ふ形の傷をおつけになりましたね。そして、ああ何と云ふ事でせう。妹の腕を見たら……そこにも矢張り、Nと云ふ傷がありましたわ。私は貴方の心持が分らないで泣いて居ります。」之が新らしい教への一つである。

又その次に妹の方がサッサとよこした。

「……私丈を連れて逃げて下さい。私は怨むでゐますよ。」

それから別々に澤山來た。又一緒に書いても來た。もう無茶苦茶に書いてあつたり、丁寧に考へて書いてあつたりした。大概は馬鹿な事が云はれ、時には利巧な事も云はれてあつた。無爲に然も急速に時がたつて、又手紙が來た。

「……貴方は何故何うにかして下さらないのです。私達は之から何うなりますのでせう。あゝ、困ります。

今日或る人が噺した事を聽いて、私達はふるへました。それは斯うで御座います。

去る十二日、身元不明の姙娠女の溺死體が石油庫の前の川へ流れて參りますと、續いて又異つた姙娠女の死體が出て參りました。一方は初めから浮いてゐました。もう一つの方は呼ばれたやうに底から出て來て、浮いてる方のそばへ行きました。すると兩方の鼻から血が出たと云ふ事でした。あとで檢べたら、二人は同じ模樣の長襦袢を着てゐました。二人は姉と妹であつたのです。姉は姙娠四ヶ月

妹は五ヶ月であつた相です。妹の方が一ヶ月先へ姙娠してゐたのです。あゝ、貴方何う云ふお積りなのですか。分りません。私達は泣いて居ります。この人々のやうになつたら何うしませう。そして、この人々のやうになるのは隨分たやすい事ですわ。二人で心を痛めて居りますわ。あゝお怨み申します。」

まづい文章ではあるが思つてゐる事の十分の一位は表現出來てゐる。二人はそんな話をきいて悲しみのあまり手紙を書いたのであらう。そして可哀相に文章にはその悲しみさへよくは表れてゐないのである。

その又次には妹がよこした。

「……姉はあんな病氣をしたのですもの。決して心配はありません。きつとまだ出來ては居りませんでせう。又そんな事を私きいても見ません。けれど私は丁度年も宜敷く、丈夫な身ですもの、今度こそは姙娠だと思ひます。あゝ、あなたは何うして下さいますか。此の前のやうに間違ひであつたら好いと思つてゐますが。今度は何うしても間違ひではありません。何うしてもさうのやうです。怨みます。もう死んで了ひます。早く來て下さい。私丈と逃げて下さい。」

姉の方は姉の方でやつてゐた。

「……貴方はあんまりです。私は川へ入つて死んで了ひます。妹と一緒に死にます。あの此の間あつた話のやうに。…妹は毎日吐いてゐます。あれは姙娠したのです。けれど貴方の子ではありません。あれはまだ他に古い馴染を持つてゐます。貴方はそれを信じないのですか。」

未だ未だ手紙は來ては破かれ、捨てられた。

「畜生！」と私は獨りで怒鳴つた。「手前達二人に情死なぞ出來るものか？　お互ひに殺しつこをしても自分丈は救はれようとしてゐる癖に、二人で川へなぞ入れるものかい、馬鹿！　手前等は引き潮の時に潮干狩りでもしやがれ。二人で引かき合へ。喰ひつき合へ。だが何うして一緒に姉妹心中なんかが出來るもんかい。」あゝ之は何と云ふ無慈悲であつたらう。

妹の寃罪で憤怒し狂亂してゐる私の心は全く惡辣になつた。私は自分でそれを悲しみ、泣き、悔い、又怒つた。そして結局は何も悲しまず、悔いないのと同じであつた。

そして時には、自分と自分の周圍とを忘却するために、憎むでゐる女等のもとに走つては、獸の如きことを繰返した。女等はその度に思ひ出して私を怨み、時には柔かな手で私の頰を打つた。何故か私は「打て、もつと打て！」と叫びつゝ、少しも抵抗しなかつた。それは相手を憐憫するから起る忍耐ではなく、あゝ實に、聽く人があらば聽いて貰ひたい、實に、それは、自分から自分を侮辱し輕蔑する自棄と放膽とから生じた忍耐であつた。

では之が一切であつたか。之が起つた事の凡てゞあつたか。いや、之からが本統の話しになるので

ある。

云ひ忘れて了つたが、私は病院に寄食してゐた頃、カリエス患者のコルセットを造るため、セルロイドを取り扱ふ事に習熟したので、その後もあるセルロイド工場へ入つて生活費を得てゐたのである。

そして、他を罰してやるためには、自分を出來る丈正しく保たねばならないと云ふ考へで、自分を鞭打つた。けれども之が私に取つて無効なる痛みに過ぎなかつたのは、何と云ふ悲しさであつたらう。

正直に云つて了ふ。一つの憤激を抱いた人間は、却つてその憤激のために墮落しやすいものである。あゝ、私は何れ程心の平靜を望むだ事であらう。此の憤怒！　この動亂がいけないんだ、と叫むでは、自分の爪で自分の胸を搔きむしつた。之は何と云ふ矛盾した心理であらうか。憤激があればこそ罰を謀むのであり、罰を謀むから、正しい心を欲するのであるのに、正しい心を持つには、憤激それ自身が邪魔となるのである。

「えい！　何たる苦しみの鼬ごつこだ！」何度繰返しても、それは實に同じであつた。

然し私は心を取り直した。《少くともさう思はれる。》同じ工場に通ふ老いた職工が火傷のために休職し、喰ふにも困つてゐるのを聞くと、私は深甚な同情のやうなものに刺戟され、そして、露店を出してセルロイドの櫛やシヤボン入れや、その他の小さい道具を小賣りし、儲けた利益丈をその老人と家族へ惠むでやらうと云ふ企畫で私を喜ばした。

實際、私はその企畫を實行する勇氣を持つ事が出來た。ほんの宵の中丈露店を開くのではあるが、疵物なぞを安く割引して賣るために、客の足は思つたよりも繁かつた。そこ迄は實によく行つたのである。だが、その先は何と云ふ悲慘であらう。

私は薄暗い燈火を前にして、地面の上に坐つてゐる乍ら、眼前に蹲踞むで、櫛を漁つてゐる美しい若い女性を横目で見た。彼の女の擧動には强ひて落ち着を見せようとするため、却つて慌てゝゐるやうな風が窺はれた。いやそれのみではない。彼の女が私の眼から隱れて、一本の櫛を盜み取り相にする所を私は不意と直覺した。勿論その時に、私が眼を正面へ向けたならば、女性は罪を犯し得なかつたに相違ない。けれど意地の惡くなつてゐる私は自然にさうする事を耐へて了つた。

「待てよ。あの女は盜まうとしてゐる。だが私の注意を恐れて、躊躇してゐる。惡い女め！　私が何も知らないと思つてゐるのか？　私がお前を罪に陷してやらうとして、態と見ぬふりをしてゐるのが分らないのか？」

之は何よりも惡い思想である。盜む機會を態と與へてやる人は、恐らくその機會に引き入れられて、盜みを行ふ人よりもより多く有罪であるに違ひない。

私の不注意と無關心とを覘つてゐた娘は、不意に一本の櫛を拔き取つて、袖の下へ隱した、立ち上ると、今度は袂の中へ押し込むで、急いで闇の濃い方へ消え去らうとした。

痛々しい生活に疲れて、何の慰みもない私は、此の時久しぶりに淋しい微笑を洩らしたのである。それは何とも云へぬ意地悪い、悪魔的な笑ひであつた。私は網を掛けて太つた鴨を捕へた百姓と同じ心持になつて立ち上つた。

私は或る露路で女性の後ろ姿に追ひついた。

「へゝゝゝゝへゝゝゝゝ」と私は唯笑つて跡に従つた。けれど、「貴方は盗むだね。」と難詰する事を何故か控へて了つた。此の忍耐が何よりも悪かつたのである。私は何も辯解しまい。私には實を云ふと私の心理がよく分らない。痛み——何か漠然とした痛みがあつた丈なのである。

娘は一寸振り返つた。彼の女は確かに驚いた如く見えた。見えたと云つても、其處は全く闇の中だつたので、或ひは彼の女は私を見なかつたかも知れない。又私を見たとしても、それがセルロイドやエボナイトの商人だとは感附かなかつたかも知れないのである。

私は忍耐した。それは實に悪性の忍耐であつた。露店の方を捨てゝ置く譯に行かないのを感附いた私は、盗人の娘から分れると直ぐ道を取つて返した。ところが半ば迄歸つて來ると一つの悪心が明瞭にカマ首を持ち上げて來たのを、私は闇の中に見附けた。

「店は何うでもなれ！　私は面白い事の方へ行くんだ！」

私は再び娘を追つた。そして何處迄も聲を掛けずに跡をつけた。娘は一つの家の前に止まり、中へ入らうとして一寸注意深さうに後ろを見た。その時である！

「お嬢さん。へゝゝゝゝ」と私は闇から首を伸ばした。娘は血が凍つたやうに直立した。そして、何處からか漂うて來る極く僅かな燈光で私の顔を見入つた。彼の女は初め齒の根も合はぬ口を動かして、何か云ひ出さうとするやうであつたが、不圖思ひ返したやうに恐る恐る袂から例の櫛をそつと出して、今度は力強く突きつけた。

「そんなもの、地面へお捨てなさい。へゝゝそんなもの入りません。へゝゝ」と私は低い劬るやうな聲で呟いた。それが却つて娘を戰慄させたらしかつた。彼の女は唖のやうに唯オ、、、、と口走つた。事に依つたら本統の唖かも知れなかつたのである。

「お嬢さんの名は？」と私は試しに尋ねた。

「ミサ……」と女性は服従的に答へた」

おゝ此の女性は本當の悪人ではない。彼の女はすつかり恐怖してゐる。そして私を巡査と同じやうに尊敬してゐる。人が悪事を後悔した瞬間程屈従的な心に變ずるものはない。そんな時には弱い子供に打たれても、打ち返す力さへ出ないのである。

「之、貴方の家？」私は少し威嚇的に訊ねた。屈従に對して威嚇を強ひるのは人間の持ち前である。

「えゝ……」

「あしたの晩、こゝへ忍むで來るから會つて下さいね。私は貴方を美しいと思つてるんです。」私はやさしく、大人しく賴んだ。

女性の顏は再び變つた。彼の女はよろけながら後じさりをした。困惑と絕望とが體中に見えた。

「あゝ……それは……」

「いけないと云ふんですか？」

「でも……」

「あの事……あの事が世間へ知れたら困りますよ。分つてますね。」

「分つてます。さ。之お返ししますわ。許して下さいましね。」娘は初めて涙を落した。

「それは入りません。そのハンケチを下さい。」私は斯う云つて女性の手にあるハンケチを取り上げた。

「では、きつと私に會つて下さいね。私はもう、貴方に戀して了つてゐるんです。」

女性は私を眤と見詰めた。そして恐怖しながらも、私の顏が嫌ひでないのを感じた如くに見受けられた。彼の女は少しの間、目を閉ぢて考へ續け、軈て、默つて家へ入らうとした。

「あしたの晩の八時！　間違ひなくね。それでないと世間へ知れますからね。」

「え！　考へときますわ。」

「今、承知して下さい！」

「では、八時！」

娘は家の裏へ逃げて行つた。私は緊張の後の疲れを感じて、淋し相に店の方へ歸つた。

あゝ何と云ふ悲しい陰慘な計略！

私は闇を歩き乍ら、自分を憐愍して、女のやうに嘆いた。本當に電柱へ縋つて嘆いたのであつた。

全體之は何であるか？　私は何を惱み、何を爲しつゝあつたか？

私には全く反省力が缺けてゐるのか？

否、私は自分の心の闇を見詰めるのが恐ろしいのであつた。然もそれは結局發かれずに濟まされないものだつた。

私は靜かに注意力を集め、見る可きものを指摘せねばならない。分つてゐる。私が本來望むでゐるのは女性を虐待する事ではなかつたではないか。妹のための復讐！　それが初めでもあり、終りでもある唯一のそして重要な豫定ではなかつたか？

皆分つて了つてゐる。今更辯解は一切不要であらう。分つてゐる。實に、人々よ。鬱積せる復讐心、滿たさるゝ事なき一つの願望、それが目的の道を閉ざされた時には、必ず曲つた方向へ外れて行かねばならない。

精神分析家はそんな傾向から來る惡い行爲を「復讐の代償」と呼ぶが好い。私は實に新しい相手へ

向つて無意識的に「代償」を實行したに相違ないではないか。自分の苦惱を輕減するために、他人の苦惱するさまを見て樂しむとは……あゝ、それは虎にも獅子にも具はつてゐない特異なる殘忍性の發露である。私が男らしくなく泣き崩れ、何處にも救ひを見出せない闇の中を這ひ廻つたのは、以上の事に氣附いたからであつた。

蛇と鰐と狐とを混ぜ合して煮ても、私の心よりひどい濁りは浮いて來まい。

今、今ならば何うにか直せさうである。早く、早く、私はあの娘にもう一度會つて、私の醜い謀みを詫びよう。あゝ彼の女は何んなに眠れぬ時間を持ち扱ひ、悔恨と困惑とで懊惱してゐる事であらう。彼の女は罠へ陷ちた兎よりも、もつと憐れ深く悶えてゐるに相違ないのであつた。

「復讐の代償」……そんな卑怯な陰慘なものがあつて好いだらうか？　實にもう何の辯解も入りはしない。唯一つ云つて置かう。弱い心と卑怯とは同じものを意味すのである。

惡心の中に包まれ育つ善心

闇は限りなく濃くなつて、氣體でなく、固體――油じみた古い布團のやうに私を壓した。眠らうとしても心の靜かにならない哀れさ。髮の毛の生え目は一つ〳〵に痛み、眼や鼻は硫黃の煙りで害されたやうに蹇く充血した。

道を曲げてはいけない！　一つの目的を明確に意識せねばならない！　復讐の相手の顏から眼を外らしてはいけない！

正直な心、曲らぬ心、何故それをはつきりと保ち得ないのか？

けれど軈て私は熱つぽい眠りに墜ちて行つた。夢は再び私を悲しく覺醒させた。何でも太つて豬い顏の男が私に斯う話したのである、

「兄弟を殺しても、御免なさいと云やあ、それで濟むだ時代があつたさ。時代、時代がね。」

それから想起し得ない混亂の後に、私の亡父が表れ、不快な舌を以て呟いた。

「帽子を盗むでも、首を斬つても、同じ位の罪しか感ぜぬ人間もあつた。それから、それで好い時代もあつた。時代も。」

私は恐怖する。之等の夢の示現は何を意味してゐるのか？　私は心の奥底から後悔してゐない爲めに、斯んな荒れた考へを夢みるであらうか？

私には分らない。あまり信用のおけぬ潛在意識下に何か私の顯在意識と異つた思想が埋沒されてゐて、それが淺間しくも夢の姿で現れて來るのか？　私は根からの惡人なのか？　それとも、之は何か心の狂ひに過ぎぬのか？

「樂しい場合にも、苦しい場合にも、お前達は互ひに人と人との間の深い緣を感じあへよ。樂しい場

合には、それに依つて樂しみが倍になるし、苦しい場合には、その苦しみが和らげられるのではないか。」

私は此の頃強く痛く如上の言葉の正しさを感じてゐるのだ。それは簡單な教へである。

「愛してやれよ。」と云ふ聲が上から聞え、

「愛して下さい。」と云ふ聲が下に聞えてゐるではないか。

私が火傷した老職工の家庭を助けてやらうと考へ、又それを實行して來たのは一體何故であり、何の目的であつたか？　之をも「復讐の代償」と呼び捨てる無慈悲な人が何處にゐるだらう。あゝ之が自暴自棄から起つた業とらしい忍苦だと誰が判斷するか？

おゝ、眼にはつきりと見えて來る。老人は爛れた神經の尖に熱した針の苦痛を味つて床の上を轉がり廻つてゐる。幼い子供は恐ろしがつて南京鼠のやうに怯え、慌て、這ひ廻つてゐる。一番小さい子丈が平氣で、お椀へ一杯砂を盛り上げて、何の眞似か知らぬが、小さい手を合せて拜むでゐる。

之は何でもない事だと、耳で聽いた人は云ふであらう。だが眼で見たものが、此の哀れな生きものたちへ「復讐の代償」を試みる勇氣があらうか？　「愛してやつて呉れよ。」その言葉は誰の口から出やうとも、此の場合に當て嵌つた眞實ではないか？

一日二圓を儲けた人が、一圓を割りさいて與へようと思ふのは此のやうな時である。

「その品はあの人にやつて下さい。」

「その本をあの子に教へてやつて下さい。」

「その樂しい歌をあの子に唱はして下さい。」

皆は斯う願はねばならない。あゝ、それは本能によつても、思想によつても、當然なことではないか。もう分り過ぎた事である。

私は本當に心が片輪なのではなかつた。唯時々片輪になるに過ぎない。私には正しい事物が好く分るのだ。だのに、あの少女を、あの正直さうな初心な盗人の處女を何うして罠へ引き入れ得るか？

私には時々惡魔が取りつくのか？　幼い時に正しい愛で養育されなかつた事、思春期に於ける修養を缺いた事、この二つは惡魔の大好物である。私は不當な變態心理の父母を持たねばならなかつた。私は惡い友の中でばかり遊むだ。善良なものを見ぬために、不良なものを當り前と思ひ込むだ。それが今頃になつて漸く分つて來たのである。

誰か私を縛る繩を解いて呉れ、耳へ詰つてゐる砂を掘り出して呉れ、魚の鱗のやうな曇りを私の白内障のやうな眼から取り去つて呉れ。

おゝ、それ丈ではない。早く、早く、今の内、あしたではもう遲い。今直ぐ、何處かに繩でつるされて唸つてゐる繼子を下へ下してやつて呉れ、燒火箸を繼母の手から取り去つて呉れ。

きびし過ぎる親と、無關心過ぎる親とを集め、私を實例にして何か恐ろしい事を講話してやつて呉れ。虐待される幼兒達を惡い親の手から離して、情深い師匠の下に置いて呉れ。

それが濟むだら、子供達の偏屈と意地惡とを矯正してやつて呉れ、幼芽の中は樫でさへ好くしなふ。それが肝心な所である。

柔和な話を聞かせ、さらに、柔和な行爲を現實で見せてやり、何を模倣す可きか、よりも、之を模倣せよ、之を習慣にせよ、と教へてやつて呉れ。此の模倣、この習慣からこそ將來、何をなす可きか、を知る健全な思慮は生れ出づるのである。車を正しく走らすために、軌道を與へる事、之が何よりも初めの仕事である。

いや、然し、再び、私は私の事を考へる可きであつた。夜中でも構はない。私はあの免職教員へ悉くあつた事、之から起りさうな事を話し、懇へ、懺悔しよう。神を知らぬ私は、唯、あの教員に「許して下さい。」と願つて伏し倒れよう。そして、一切の始末をつけて貰はねばいけないのだ。私は氣の替り易い惡人である。今正直にしてゐても、あしたは盗みを平氣でしてゐるかも知れない樣な、そんな賴りにならぬ罪人である。

「善い事をしようとして、惡い事へ導かれる男」それが私と云ふ人間である。

ことによつたら、妹の「復讐」をも、(卑怯からでなく、勇氣と親愛とから)斷念せねばなるまい。

あゝ、そして、それも善い事なのだと大勢の人が話してゐる。

斯くて私は夜中に雨をついて免職教員を訪ね、謝罪す可き點を謝罪し、賴む可き事をすつかり賴むだ。

翌日の夜になると、教員は私の代理として、あの盗みをした處女の家の近くへ出掛けて行つた。處女は約束を守つて、八時になると、家から出て來、待つてゐる教員を私と間違へて慄へた。柔和な教員は一切の事情を上手に分り好く話してやり、彼の女の心を眞黑にしてゐる色々の心配と當惑を拭ひ去つてやつた。さうすると女は一層自分の心を明瞭に見る事が出來、更に強い悔恨を發見して、新らしい涙を降らせた。

親切な教員は私の元へ戻つて來て、起つた事の凡てを話し、その上それらを記錄に書きとゞめて、私に與へた。

「聞き流すと云ふのは好い事でない。貴方は此の記錄を時々讀み返して、自分を善くするやうに努めなくては……」

教員はその後、五回ばかり、例の處女と面會した。そして記錄はその度に增補されたのである。

盗みをした處女に就いての記錄

此處では教員が幾らか觀念化して書きとゞめた所の、哀れな處女の經歴を掲げさせて貰ひたい。

「……私(處女自身)は考へて辯解致すのではありませんが、それでも之丈は申し上げたいのです。私は初めから惡い人間では御座いませんでした。誰だつて、さうで御座いませう。惡につけ、善につけ、それを段々と強くして行くためには相當の時間が必要なのは何より明らかで御座います。惡行さへ、幾らか習熟を要すると云ふ事は、少くとも私の場合では眞實で御座いました。或る人は申します、惡行をなすには放任で足り、善行をなすには教育が必要だと云ふ風にね。けれど、惡行をすゝめる養成所と云つたやうなものが、此の世には澤山あるので御座います。皆包まず、お話し致しませう。實は斯う云ふ譯なのです。

私の眞の母親が私を姙娠して居りました頃、私の父と云ふのは何か商賣の上で大きな損を招いて、母を置き去つたまゝ、何處かへ出奔して了つたのです。殘された母は姙婦預り所へ泣き入つて、絶望と悲愁の中に、私を生み落したので御座いました。それから私は炭屋へ貰はれて行き、其處から又或る煙草屋へ遣られた相でした。所が物心のつく頃になると、私は場末の或る小さい小鳥屋の子になつて居りました。私は殆ど本能的に哀れな生物を愛する事が好きで御座いました。細かい泡粒を赤い嘴で嚙むで、皮丈を吐きすてる紅雀や、大豆程の卵を生むでは一生懸命に孵すカナリヤの母親などを可愛がつて眺めますのは、私の一番大きい樂しみでもあり、淋しい時の慰めでもありました。

それから鳥達の個々に就いて、その性質を觀察し、それをよく飲み込むでやるのは、私に取つて何んなに大きな仕事で御座いましたらう。小鳥の心配、不滿、恐怖、安心、滿足、そんな氣持を察してやり、それ〴〵適當な取り扱ひをしてやるには本統に熟練と愛情とが必要なのでした。

或る鳥は羽が絹のやうに美しいのに、唯もう粟と水と丈で滿足して居りました。「まあ何うして、味のない水と穀類と丈が、あんなに美しい生命に變るのだらう。」と私は好く思ひ、嘆息しました。又或る鳥は意地の惡い顏をしてゐるのに、牛乳をかけた御飯でないと食べず、他のは棒の形に固めたスリ餌でないと不滿な樣子を致しました。何て贅澤な鳥達だらう。山に居た頃は何うして暮してゐたの。」と私はフザけて笑つた事も御座います。

斯んなにして十八になる迄、淋しく暮して來た私は、偶然な機會から、本統の父親に見出され、その方へ引き取られる手筈になりました。私は何んなに喜むだでせう。之から今迄知らなかつた愛情の國に住めるのだと思ふと心も落ち着きませんでした。移つて行つた父の家には、もう一羽の紅雀も居ては呉れませんでしたが、その代りに私の實母ではない若い母親が待つて居りました。そして小鳥たちを見失つて、唯の雀をでも見るのをせめてもの樂しみにして、夫を見送つてゐる私へ向つては、「お前のやうに小さい生きものを可愛がつたりする娘はないよ。きつとお前は石女だらう。」

と申しました。それはもう詰らない云ひ傳へに過ぎませんね。いゝえ、お話はもつと別の事で御座いましたつけ。《けれど私は石女かも知れませんわ》

一緒に住むで見ると、私の父と申すのは、本統に惡い人でした。あゝ、もし、父さへ善良な氣質を見せて呉れたなら。私は何もあの復讐の心を抱くやうにはならなかつた筈ですのに……。いえ、復讐と申すのは、あの事なのです。姙娠中の母を捨てゝ、音信もしなかつた不親切、私はその事から、父を怨み初めるやうになつたのでした。父さへ母を捨てなかつたなら、母だつて、私を姙婦預り所へ置き去りにして、行衛不明にはならなかつたで御座いませう。母は唯、父の眞似をしたのだ、それで私は孤兒になつたのだ、と斯んな風に感じたのでした。考へれば、私が小鳥屋へ貰はれて行つたのは、斯んな父の手で育てられるより、幸福でした。一羽の無心な小鳥が惡いそして凡庸な教育者よりも善い事を教へて呉れると云ふのは、もう本統のお話しですもの。だのに、私は矢張り、變化を望み、新らしい世界にあくがれました。孤兒である身を悲しむ餘り、幸福な身無し兒であるよりも、不幸でも親のある兒を、一層幸福なものと考へました。之は一寸妙な考へ方で御座いますが、貴方が若し孤兒であるなら、直ぐと同感して下されるやうな分りきつた心持なのです。

父は中途から彼の家庭へ入り込んで來た私を愛しては呉れませんでした。少し位かばつて呉れても、憎まれてゐると思ひ取るのが、不遇な娘の持ち前なのですもの、私は始終父に憎まれてゐるのだと判斷しましたが、思へば、それが過ちの初めでした。

私は父へ向つて輕い憤りを感じました。何故小鳥屋に滿足して暮してゐた娘を、こんな所へ引張つて來たのか？　貴方の仕打と貴方の心持とが一寸も私には理解出來ない。

理解が出來ない。――そしてお互ひが段々高慢に自分の立場丈を守るやうになつて參りました。然も之は愛着で離れ難い肉親の間に起きた事なのです。あゝ、もつと急いで話しませう。

一番惡い悲しい事實は父が大勢の氣味惡い男達を集めて、私の家で開く賭博で御座いました。之が初まると私は直ぐ小鳥たちの事を思ひ出して泣きました。直ぐにも喧嘩し相な人が、その心をぢつとこらへ、話し一つせずに、眼を赤くして時間を過してゐるその有樣、私は自分迄息がつまつて、身動きも出來ぬやうでした。之は何と云ふ物凄い殺氣だつた靜肅でせう。敗けてシク〳〵と泣く細い聲なぞが聞える頃、彼等は一人づゝ、二十分丈時間を置いては歸つて行つて了ふのです。一人殘つた父へ私は縋りつきました。「何うか、それ丈はやめて下さい。」私は涙を飲むで懇へました。賭博が惡いものだと云ふハッキリした思想からではなく、あの二十分間ごとに一人づゝ歸つて行く人たちの淋しく絶望した、殺氣だつた顏が怖くて仕方がなかつたからです。何か復讐のやうなものが起りはしないか？

私はそれを何より心配致しました。父は此の道の名人で、一回損をすると、四回は得をしました。そして、一回丈する損も、何だか態々やる計略らしかつたのです。

父は何故かその時大變に不快な顏をして居りましたが、いきなり、私を蹴倒して、肩へ痣をこさへる程強く、室の隅へ打ちつけました。

私は處女の身體と云ふものを大變大切にする質だつたので、恐ろしい悲愁の中にも、實に明かな激怒を感じたので御座います。

「覺えてお出でなさい！」と私は倒れた儘で申しました。

三日目の晩、父の元へは又しても不快な男たちが猫脊をして集まつて來ました。彼等は燈火の光を厭相に眉へ皺を寄せて見やり、又獨り言を呟いて、靜かに！　と注意されたりしました。皆が皆背光性の蟲か長い魚の樣でした。

「覺えてお出でなさい！」私はその言葉を考へ續けて居りました。私は思ひ切つて外へ飛び出し、夜更の町を通つて、警察へ此の事を訴へました。大勢の人は巧みに逃れましたが、父丈は醉つてゐた爲めに捕へられて了ひました。

斯んな忌はしい事件が起つて後、若い母親の機嫌は大變嶮しくなりました。「お前は父親を罪人にした不孝者だ。何うして此の仕損じを償ふか。」と私は責められました。そして私の良心も堪へられぬやうな手痛い傷を受けて惱み初めてゐたのです。私は眞にあの罪の憎む可き事を考へて警察へ訴へたのか？　それとも父へ向つて實母と自分との受けた侮辱を復報するためであつたか？　それが混亂した頭

には分りませんでした。

その中に父が監獄から歸つて來て、大きい荒立つた聲で申しました。

「娘！　貴樣に今日からバクチのやり方を敎へてやるぞ！　馬鹿！　お父さんに勝てる迄修業するんだ。さあ、やれ、斯うするんだ！」

私は泣いて謝罪しましたが、氣の荒立つた父は何うしても肯きませんでした。監獄へ行く前よりも一層多くの惡辣と薄情とが父の心を横行して居りました。

父を懲役人にした事の悔恨は益す私の胸に響きました。そして何が善で何が惡かも分らなくなつて、唯濟まないと云ふ心持で一杯になりました。私が父の命に服從し、父の荒立つた心を少しでも慰め、又鎭めようとしたのは實にその爲めだつたのです。

私はおハナを習ひました。肩を打たれ乍ら色々の祕術を敎授されました。あゝ細い事は申せません。私は唯上手になつて了つたんです。男の中へ入つて一度敗れば二度勝つやうになつて了つたのです。

あゝ父は私にいやらしい事を云ひつけたのです。「帳場へ坐つたら、若い女はなる可く膝を崩せ！」といふのがそれなんで御座います。さうすると若い男たちの注意力が二つに割れて分れて了ふ、勝負に必要な思はくや相手の持つてゐる札の種類を皆忘れて了ふ、と云ふのが父の考へなので御座いました。

私は悲しくて泣いてゐると、何時も後ろから蹴られました。そして、或る夕方、私の家へ隣りから飛んで來たハンケチを、私が拾つて返さうとしました時、繼母が「一寸お待ち、」と云つてそれを取り上げると、又父が私を蹴りました。

「私は鞠ぢやないんだよ！」と私は惡い女のやうに憤りました。

「人間だつたら、人間なみになれ。あすこにもう一つ干してあるハンケチを取つて來て見ろ！」

私はこの時、自暴自棄な氣持になつて、隣家の樣子を伺ひました。そして、あゝ何を致したでせう。ハンケチを盗み取つて來ると、それを旗のやうに振つて父親に見せびらかし、それから母親の頭へフワリと冠せると、狂的な笑ひ方をして、その場へ倒れ、足で壁をたゝいたので御座いました。

父は腹の底から出て來るやうな深い笑ひ方を致しました。カツギを冠つた母は何だか踊りの手拍子のやうな事をして見せました。

それは滑稽で御座いました。けれど之が滑稽であつて宜いのでせうか。

「悲しいな、悲しいな、小鳥は何處へ行つた。」私は斯う思つて外の空を眺め、もう自分が大變に惡い女になつてゐるのを愍傷しつゝ、せめてもの罪滅ぼしに遊むでゐる子雀へ米を投げてやりました。

けれど、もう駄目だつたのです。鏡を見ても、耻かしい氣も起らなくなりました。「なあに、仕たい事は何んでもするが好い。それから仕たくない事もどん〳〵とするが好い。」私はそんな風に叫むだので御座います。

私は二度上手に物を盗みました。そして三度目に、未だ手馴れぬため、あのセルロイドの櫛を取り損つて了つたのです。お許し下さい。お許し下さい。私には皆分るのです。柔しく色々と教へて頂いて、又智慧の光が私には見えそめて來ました。私は惡い女で御座います。私の悔いは本統に強く湧き起つて居ります。あゝ、嵐の中の若木のやうに、私の心で、そして體で、こんなに悶えてゐるので御座います。あの若い商人の方が許して下さると仰言るので、私は餘計につらく、身がいたくてなりません。」

哀れにも虐待された處女は斯う物語つて涙を拭いた。

小鳥を愛撫することで、薄倖の中にも、或る靜かな慰安を感じ、それによつて、強い僻みから逃れて來た美しい靈が、急に陰慘で極惡な境へ迷ひ込み、四圍に漂ふ闇黑のために靈の表面を汚染されるといふのは何と痛む可き事實であらう。然し、幸ひな事に、汚染されたのはホンの表面丈に過ぎないと云ふ新らしい發見が私(教員)を何よりも強く勇氣づけた。私はよく考へたのちに、處女へ向つて慰安になるやうな次の言葉を與へたのである。

「餘り心配なさいますな。心は勞れ過ぎると又分別を取逃すおそれがありますからね。今は寧ろ安心するやうに努め、之から來る幸福をお考へなさい。それが直ぐ來ないでも遠くに見えると云ふ事は、

すでに幸福の一種ではありませんか。きつと、貴方は善くなれます。そんなに貴方の心は美しいのですから。

盜みと一口に云へば、人々は何んな盜みをも一様に思ひ取り、其れは惡い事だと、顏を反けますが、人の心が複雜であればある程、盜みの種類も多く、又差等がなければなりません。

私は斯う云ふ話を聞きました。一人の有名な畫工が、一人の熱心な弟子を持つてゐましてね、或る時、二人して同一の林檎を寫生したのです。すると、師匠の方のは發色が鮮かで、本統の果實のやうに出來たのに、弟子の方のは色を餘り重ねたので、濁つて汚くなつたのです。それで師匠は一寸した輕蔑を以て、弟子の畫を批評したんですね。弟子は傲慢な質と見えて、カツと顏を赤くしたさうです。師匠は生意氣な弟子を睨めると、「君の繪より、その顏面の朱の方が發色が好いぢやないか？」と申しました。それは本統に同情の缺けた言葉に違ひありません。弟子は立ち上つて申しました。「先生は何か秘密な高價な繪の具を使ふのです。それを私に教へないんです。」

「馬鹿な！　もつと技巧を練りなさい。すると繪の具が云ふ事を聞いて呉れるやうになるんだ。ブラツシユへ入れる指先の力の工合で發色が異つて來るのだ。」師匠は斯う云つて、手を洗ふために畫室を去りました。獨りになつた弟子は、いきなり師匠の繪の具箱の所へ飛んで行つて、林檎の赤い色を表すために使つたギヤランスフオンセと云ふ繪の具のチユーブを握り締めてね、中の繪の具を二寸も押し出して、やり場に困つたものだから、自分の口の中へとナスリつけて了つたんです。

貴方、分りますか？　之だつて立派に盜みの一種です。けれども、此の盜みの原因を考へて同情のある許しを與へると云ふ事は我々に何れ程必要であるかを知らねばなりません。

此の弟子の心には先づ第一に嫉妬、それから疑念、それから憎惡、怨恨等が渦を卷いてゐたのです。そして重に嫉妬が原因となつて盜みをして了つたのです。當の繪の具が欲しいのではない、先生と同じ技能が欲しいのに、やはり行爲の上に表れて來た事を見ると、繪の具を盜むでゐるんです。人間と云ふものは無形な事を有形にして表す傾向を持つてゐます。彼は具體的に事を爲す性質に災ひされてゐるのですね。

分つてゐます。貴方が盜みをするやうになつたのも生來の本能からではないのです。何か無形な怨恨が形の上に表れて來たのに過ぎないと私は解釋してゐます。さあ！　未來を餘り心配しないでね。臆病にならずに、正しい方へと歩き返して下さい。

自分の罪や過失を思ひ出す程つらい事はないけれど、又、之から正しくならうとする勇氣を見出す程晴々したものはありません。

貴方は惡いお父さんに對抗し、惡くなつて行く所を見せつけて、競爭し、復讐しようと云ふやうな心持を抱いたんでせう。いえ、さうハツキリと意識せぬ迄も、矢張り、そんな傾向を取つてゐたらし

いではありませんか。

卑怯と戰ふに卑怯を以つてするならば、善良なものゝ方が敗北するのは當然です。貴方は敗けました。そしてそれこそ貴方の心の奥にある善良を證して餘りあるものと云へませう。

「何んなに仰言つて下さつても、私は盗人より以上のものでも、以下のものでもありません。もう普通の、何の理窟も辯解も入用でない盗人です。私はあの櫛が唯欲しう御座いました。そして取つて了つたのですもの。あゝ、けれど……」

女性は此處迄語ると、急に驚いたやうに調子を變へ、そして口早に叫むだ。

「あゝ、あの子が惡いんです。あの子が私に取りついてゐるんです」

「誰、誰の事を云つてるのですか？」

「隣りの子！　あの可哀想な子は走る事の出來ないナマコのやうな畸形兒で、兩手の指が三本丈しきやないんですもの。涎や目脂をたらし、ァァ、ァァと丈は云へますけれど、その他の事は何も分らないんです。何時も臥るか柱によりかゝるかしてゐて、私を見ると息を切らせ乍ら這ひ寄つて來るんです。そして三本丈の指で私をツメるんですわ。」

「其れは夢で見た事のやうですね。」

「いゝえ、本統なのです。あの骨なしみたいな、癩病みたいな顏の子が、私は初め恐くていやでね、

それから、今度は好く見るともう可哀さうに思へましてね。夜いつ迄も眠れないと、その子の事が幻にうかむで、私好くは分らないけれど、その爲めに、初めての盗みを思ひ立ちましたやうですわ。小さい泥の人形を私は夜店から取つて來て、そして恐ろしいものを捨てるやうに、隣りの子へ投げつけたんです。けれど、今の私は自分の爲めに櫛を盗まねばならぬやうな心掛けになつて了つてゐるのでした。いえあの三本指の子に罪を押しつけようとするのではありませんけれどね、あゝ私は自分で自分の考へが分らないのです。唯、あの子のむくんだ醜い姿、それから、その子と遊ぶ腫物で毛の拔けた盲ら犬の姿、そんなものが、毒のやうに私の體に沁み込むで離れないんですわ。私は傳染して了つたのです。其れ等のものへ同情してゐるんでなくて、もう一緒に捲き込まれて了つてゐるんですわ。それにねえ、懺悔しにくい事ですけれど、あの畸形兒の父に當る人が、……」此處で女性は又言葉を切り、體をよろめかして、私の肩に頰を當てた。

私はその話の先を續けるやうにとは促さなかつた——何故なら、彼の女は恐らくもう處女ではないと云ふ直覺が悲しくも私の腦裡を掠めたからである。私は心を變へて斯う劬つた。

「私は貴方をもう一度小鳥の間に住まはせて上げたく思ひます。貴方さへよかつたら、お父さんと相談して上げてもかまひません。」

「……畸形の子の父親は……小刀を持つてます。そして、あの若い商人の方は……私の落ち度を堅く

握つていらつしやるんですわ。」女性は私の言葉とは掛け離れたある恐ろしい妄想に耽けつてゐるらしく、眼を上釣らせて、黑い上空の一點を見つめた。

他人の樂しみ

幾月かゞ風や雨と一緒に過ぎた。そして風や雨は、私（セルロイド職工）の心の中にある惡辣な部分丈を洗ひ去り、從つて善良な部分を明瞭に表面へ洗ひ出して呉れたやうに思へるのであつた。

私は双を以てする復讐を思ひ切る爲めに、何度か、あの免職教員の親切な助言を煩はした。そして、兎も角も、口頭で怨みを返し、反省を促すために、院長の子息に面會する機會を探した。

子息は彼自身が私の妹を愛してゐた事、愛してゐた許りでなく、もつと深い關係に迄も入つて行つた事、それは重に彼の女の正直と低能へ向けられた同情に起因する事、院長の方は決して妹を自由にした證據及び噂さのない事等を、惱ましげに頭をおさへて物語り、それから、もう一つ思ひ掛けぬ驚きを次のやうな言葉で私に與へた。

「父は貴方に骨の壺を見せたと云ひますが、それは眞實ですか？　さうです。父は貴方へ向つて何か祕密なそして重要な事を打ち明けたかつたんです。けれど、その目的を思ひ切つて決行する勇氣がなかつたらしいんです。死に際に、その祕密のホンの端緒丈を私に洩らしかけたが、直き息が苦しく詰まつてね、話が途切れて了つたものだから、私にも好く判斷がつかないんですけれど、何でも、貴方は私共の身内なんだらうと私は思ひますね。えゝ、それ丈はもう確かなのです。父はそれを貴方に打ち明けたくて、あの骨の壺迄も貴方に示したに相違ありません。」

「では、あの骨は誰れのだと仰言るんですか？」私は疑念で顏を曇らした。

「勿論、あの頭蓋は女性のものですよ。今度の火事で、なくなつて了つたが、實に惜しい事をしました。あれは何でも異常に美麗だつた女性の骨です。私は三度も取り出して見たけれど、何時も、あの端麗な骨相によつて、それが生きてゐた日の好く均齊のとれた美貌をも思ひやる事が出來ました。」

「では、その女性の顏と私の顏とが似てゐるとでも仰言つたんですか——院長さんが——」

「まづ、そんな譯になるでせう。いや、さうだ。さうだ。それに違ひない。あの女性こそ貴方の母親だつたんではないでせうか。勿論、よくは私にも分らないが……」

「造り事はおよしなさい。それは空想の過剩から來たものに過ぎない。私に云はせれば、斯うです。院長はあの骨が生きてゐた頃、それを愛してゐたに相違ない。所が、その女の顏が私と似てゐたのに氣附いて、妙な追想に耽り、私をも愛着するやうになつたんです。唯それ丈です。私が紫の室に臥てゐた時、そこへきた院長の擧動や眼附でもつて、以上の推察を下し得るんです。」

「いや、事件はもつと複雜に違ひない。あの骨の女性は父とその兄との共有物、もしくは互ひに爭奪

しあつた寶石だつたんです。此の事は父が前にも三度程打ち明けたのだから、疑ひのない話です。それで父の兄は極く祕密に女を殺したんですね。それも父の話の様子で大概推察されるんですが。貴方分りますか？」

「私は何も信じません。好い加減な芝居をかく事はお止しなさい。私は唯貴方の反省を促すんです。」斯んな風に話は再び當の問題へ戻つて行つて了つたのである。

それから間もなく私を何より不快にしたのは、院長の子息が可成りな金子を持つて上海へ渡つて了つた事件であつた。

けれど、私は最早、その跡を追ふまいと諦めた。又追ふにしても、それ丈の金が懐ろにはなかつたのである。私は再び憤怒に似た或るものを感じ、自分の不甲斐なさを悔い初めた。ハムレット風な憂悶は絶えず私の前額を蔽ひ、眼の光りを曇らせた。

「妹よ。許して呉れ！　あゝ私が悪い。そして周圍が悪いのだ。空間も時間も皆間違つてゐるのだ。」

私は斯う呟きながら、不圖ある一點を注視した。あゝ、そして私は自分の悪い疑念を鞭打つた。

私は何を見たのか？　骨の壺に刻まれたアラビヤ文様の幻影であるか？　或ひはある美女の幽靈であるか？　それである、一人の美しく若い處女――それがあの免職教員と睦まじく肩を並べ、向ふの方へと曲つて行くのである。

あれは盗みをした可愛い娘ではないか？　何故今頃、教員に用があつて、面會するのか？　何故二人はあんなに樂しさうなのか？

あゝ、そして私は何んなに淋しく沈みかへり、妹を手元から失ひ、敵をこの街から逃して了つたか？　私の慰安は一體何處にあるのか？　前に關係した二人の姉妹も絶交を申し出し、そして、行衛をくらまして了つてゐる。あゝせめて、あの妹娘の方丈でも、私の傍らに居たら……

だのに、彼處を見よ。若い教員、そして新鮮な美女！　二人は一緒に巣を造る二羽の小鳥のやうに舞つてゐる。おゝ、あれは教誨する師と、懺悔する教へ子の姿ではない。たしかに無い。

嫉妬？　それに似たものが暗い雲のやうに私の心を埋めた。私は勢ひづいて二人の影を追ひ駈け、そして二人の間へと、無遠慮に割り込んで行つた。

處女はいぢけた小鳥のやうに顫へた。そして教員は？　彼は沈鬱な表情で私を見上げた。私は男の方へは注意せず、女の方を眞正面から睨と見てやつた。彼の女は消え易い雪の様に素直で臆病であつた。何うして斯んな大人し氣な女が盗みを働いたか？　それは一つの大きな疑問である。

「ミサ子さん！」と私は馴れ馴れしく云つてやつた。「ミサ子さんとは、何て好い名だらう。あの晩に教はつた名ですね。」

教員は險悪な風向きを見て取ると、私を慰撫するやうに口を入れた。

「あゝ、心は微妙な丈に、又毀れ易いものです。さあ、此の娘さんの心を搔き亂さないやうに、二人で愛して上げねばいけない。」

「二人で愛する？」と私は眼を赤く怒らして、教員の前に立ち塞がつた。けれど、不意に自ら耻ぢると、主人に會つた犬のやうに、私は大人しい表情に戻り、それから靜かに處女の方を振り返つた。

あゝ、その時である。その處女が私を強い戀着の眼で見つめて居たやうに思ひ取れたのは……けれど私はそれを氣にしなかつた。いや、自分の見ちがひ、もしくは思ひちがひであると信じて了つた。

私は落ちついて、別れの言葉を告げ、二人をうしろにして、他の路を取つた。淋しい心から、頼り所のない氣持が湧き上つて、斯う私に問ふやうであつた。

「何うしたのだ。あれは、あの女性は誰れが初めに見つけたのだ。え？　返辭をして呉れよ。誰れでも好いから、私に話して呉れよ。私はあんまり強い淋しさに打たれてゐるのだ。」

崖上の愛

私の怨敵は何處へ隱れたか？

斯う叫むで闇の中を見詰める時、何かに悶えて泣き悲しむ院長の息子の幻を透かして、もう一つ他の形が見えて來るのは何故か？

私は恐れる――强烈な淋しさが凝集して、私の心の中で一つの形を取ると、それがミサ子の羞かみ怯える姿になつてゐるのである。

私は苦しがつて長い釘を柱へ打ち込み乍ら、困つた、困つたと云ふ嗟嘆を繰り返した。

けれども、結果は何うなつて行つたか？　もう急いで早く語つて了ひたい。

先づ私は我慢が出來なかつた。その爲めに心を紛亂し、得體のしれぬ憎惡、嫉妬、侮蔑のやうな感情が荒立つ儘に委された。そして到頭私はミサ子の家の近くへ迄、惡い靈に誘引されて、足を運むだのである。

二三夜は無駄に過ぎたが、四日目の闇夜、私は外出する彼の女を堅く捕へた。

尋常でない畏怖の表情を以て女性は眤と私を見つめ、そして私の眼の中に痲醉藥のやうなものを感じて昏倒しかけた。

「いけません！　それは、あゝ私には堅い約束があるんです。どうぞ、許して下さい、私は貴方のお情けに縋つてお頼み申すのです。あの約束が……」女性は顫へた聲で囁いた。

早く話して了ふ。私は女性の倒れかゝる體を腕でさゝへ、彼の女の顏の上へ、自分の顏を持つて行つた。羞耻と恐怖のために燃える女性の頰から、カッ氣が湯氣のやうに上り、私の頸の兩脇へと分れて行つた。

何故、女性が私の戀愛を拒まなかつたかと云ふに、之には二つの理由があるらしい。一つは私が無條件で彼の女の氣に入つた事である。もう一つは、私が彼の女の罪を許し、又私の惡い謀ひ――即ち、彼の女の罪を云ひ掛かりに戀愛を遂げようとした事――を後悔して、改心してゐると云ふ話を教員から聞いてゐたからである。

「改心さへすれば、その人は洗はれたやうに綺麗になる。」と云ふ思想を彼の女は、自分自身から推し量つて、私の上に迄及ぼしたらしく思はれる。

斯樣にして、私は惡い謀みに依つたならば恐らく却つて失敗したかも知れぬ情事に、造作なく成功して了つたのである。之は何事であらう。然も私には純眞な戀慕の情と云ふものが全く缺けてゐるではないか！　嫉妬のやうなもの、怨嗟のやうなもの、漠然とした復讐のやうなもの、それからあの柔和な教員の早手廻しに對する見せしめのやうなもの、之等が私の戀愛を形成する主要な元素であるとすれば、私はあの改心した美しい處女を、再び闇の底へ引き戻し、「惡の教育」を施してゐる事になるのである。

何うするのが最良の方法なのか？　私にはもうそれが分らない。唯斯んな恐ろしさが悉く事實であるのを認め得る丈である。

三度目に女性と密會した時、彼の女は最早何者をも恐怖しない程に變つて了つて居た。其れに何で無理があらう。彼の女は元から盜みを爲し得る程の女性なのだ。

「貴方は、あの初めての晩、私を厭がつて、何だか他に約束があるつて云ひましたね。約束とは何ですか？　云つて下さい。貴方はあの教員と何か云ひ交したんですか？」私は斷崖の上に立つ所の亡びかけた森の中へ入ると、彼の女を詰問した。

「許して下さい！」

矢張りさうであつた。彼の女は近い内に、再び小鳥屋へ引き取られ、それから教員と結婚する約束になつてゐたのである。

「けれどねえ。あの方は私を本統に愛してゐるんぢやないんですわ。唯私を哀れに思つて下さるんです。皆、義俠心から出た事なんですわ。それから、貴方は貴方で……私を矢張り愛して下さらないんですもの。私分つて居ります。貴方は唯邪魔がなさりたいんですわ。」

「おゝ……」と私は自分とそして彼の女に驚きの目を向けた。

「邪魔？」と私は繰返した。

「さうですわ。だから、貴方は私と斯んな關係になつて居ても、結婚はして下さらないんです。いえ、却つて、あの先生の方へ思ひ返してお嫁に行けと仰言るんですわ。あゝ、私は何て氣の弱い女でせう。落ち度……あの落ち度のために、あの落ち度以來私氣がひるんでゐるんですわ。私は何うしても貴方

に抗ふ事が出來ませんでした。そして、今では……一生でも貴方と一緒に居たいと云ふ儚い願ひで一杯なので御座います。」彼の女は涙を袖に受けて泣き續けた。

「では私が勝つたのですね。」私は自分で斯う云つて、その殘忍な言葉に自分から恐怖した。

「勝つた？　何に？　誰れに？　私に？　あの方に？」と逆上した彼の女は早口に叫むだ。

「けれど、あの教員には私も大變恩になつてゐる。私は貴方をあの人から盜み取るやうな不義理は出來ないんです。」

「不義理？　出來ない？　それでは、何故、何故、斯んな事をなすつたんですか？」

「許して下さい。私は何うしても我慢が出來なかつたんです。許して下さい。そして、あの人の所へ行つて下さい。何も彼も祕密にして……」

「私は、斯うなるのを豫期して、もう早くから諦めてゐました。貴方はもう私を嫌つてお出なんです。皆察しがつきますわ。貴方は三度目に會つた時、もう私に厭きてゐるんですね。何て悲しい、けれども吹き出したいやうな可笑しさでせう。斯んな事がさう方々にあるとは思へませんわ。」

「貴方はもつと素直な花嫁になつて下さい、私が邪魔をしようが、すまいが、何うせ貴方は初めから處女と云ふ譯ではなし……。」

「何です？　聞えませんでした。も一度、も一度、云つて下さい。」彼の女は私の胸に喰ひついて來た。

そして、私の顏を昵と窺つた。闇が濃く流れて、何も見えはしなかつた。

私は厭きて了つたのである。

彼の女は諦めてゐて、それを恨まずに唯泣いたのである。おゝ何たる奇怪な夜であつたらう。

恐るべき微笑

狂暴な悔恨が再び私の胸を喰ひ破り、肋骨を痛めつけずにはゐなかつた。何う云ふ風に彼の女へ謝罪す可きか？　何んな風に教員へ辯解す可きか？　それとも一層何も云はず、一切を祕密に付し、私丈他の都市へ去るのが、皆を幸福にする唯一の手段ではないだらうか。

私は出來る丈善い行ひをしようとして、然も斯んな恐ろしい罠へ落ち込むで了つてゐる。腦髓は腐敗して了つたやうに、もう役に立たず、思考力を集注しようとすると、輕い眩暈が起つて來る丈であつた。

けれど、そのやうな懊惱は一ヶ月位で消散し初めた。そして、私の眼前には時間につれて色々の事件が生起した。ミサ子は約束通り教員と結婚し、惡い父親とは金錢を與へて緣を切つた。若い二人は大變睦まじく日を過してゐるやうであつたが、何故か急に轉居して、住所が不明になつた。私はその頃遠慮して教員を訪ねた事もなかつたのである。

轉居と同時に、ミサ子の行衛が不明になつた事、誰かゞ、何處かの停車場で、彼の女を見掛けた事、彼の女は汽車の中に眠つてゐて、下車す可き驛を乘り越してゐた事、なぞが噂された。私は淋しい悔恨の生活を續けつゝ、それらの話に可成りな注意を拂ひ、興味以外の同情を以て物を見るやうに心を落ちつけてゐたのである。

俄然、もつと大きな破壞が起つて來た。

私は考へる事が出來ない。けれど、起つた事は凡て悲しい事實なのである。

ミサ子は森のある斷崖から、何丈か下の砂路へ飛び降りて、自殺を計つたのであつた。

彼の女は死に切れないで、病院へ連れて來られた。けれど大きい怪我——諸所の骨が破れたらしい——は、もはや彼の女を三日と此の世に置く事を許さなかつた。

教員は何時もの柔和な言葉つきで、彼の女の死ぬ前に一度丈會つてやつて呉れと私に嘆願した。

「何故です？」と私は恐怖してたじろいだ。

「今度の事件は少しばかり貴方にも關係があるやうに思へますし、屹度ミサ子は貴方に會ひたがつてゐるに相違ないのです。」之等の言葉の中には一つの怨恨も憤怒も含まれてゐなかつた。それどころか、教員の眼の中には、澄むだ涙が湧き起つて來て、私に憐れみを乞うてゐる如くにさへ見えた。私は顫へて彼の肩に靠れ、進まぬ足で病院に向つた。それから？

「さ、貴方の待つてゐる人が來たよ。ミサ子！」と教員は悲愁の限りを盡して云つた。けれども人事不省に落ちてゐるらしい女性は眼を開く事が出來なかつた。之は何たる急激な變化であらう。

教員は深い嘆息と共に、私の方を顧み、そして世にも哀れな面持で、語り繼ぐのであつた。

「聞いて下さい。おゝ、見て下さい。この凄じい痩せ方を！　家を出る時、たつた一圓八十錢しか持つて居なかつたミサ子は、それを全部出して、汽車の切符を買つて了つたのです。何故汽車へ乘つたか？　何處かへ逃げる積りだつたのか？　さうではない。唯進退谷つて、もう行き場がなくなつたのです。世界は斯んなに廣いのに……罪と痛みに追はれる者は、その中に安心して住む所を見出し得ないのです。可哀相なミサ子！　お前は何處か遠い停車場迄用もないのに乘り越しをして了つた。それから、きつと歩いて息を切つて、再び此の街へ歸つて來たのだ。お前はそんなに無駄な骨折をしながら、迷つて泣き暮したのだ。きつと野原や知らぬ家の物置やに眠らねばならなかつたらう。あゝ誰れが云ふか——野原に寢る少女は不良だと！　いや、その少女を野へ眠らせるやうにする私達の方が……私の方が……何んなに不良だらうか！　見てやつて下さい。見て……。僅かな日の中に、ミサ子は斯んなに痩せ細つて、年を取つて了つた。惱みで痩せ、それから斷食で細つたのだ。何處かの泉で飲むだ水は、皆涙になつて了つたんだ。斯んなに眉毛が取れて了つて、そして、恐しい事に、髮の毛があんなに拔けて落ちる。

斷食……ミサ子は態と食べずに居たに相違ない。死なうと思つて斷食し、死なうと思つて歩き廻つたのです。そんな悲慘な事があつて好いものだらうか？　然も、此處にある。此處に嚴として存在する之は何ですか？

私は何うすれば好い？　ミサ子は私の家へ來るより、殘酷な父の許にあつた方が幸ひだつた。父の家にゐるよりも、あの小鳥屋の店にゐた方が仕合せだつた。取り返しのつかない事ですが、私は番ひの紅雀を斯うして病室へ運んで來ました。來るには來た！　だがもう見て呉れる眼が閉されて了つてゐる。」

氣が附かずに居たが、窓際には小鳥の籠がかけてあつたやうである。ハッキリは分らぬが、何でも、あの小鳥の鳴き聲――節の終りの所で、物問ふ樣に、調子を上げるその聲が、恰度、悲愁を持つた懺悔の聖歌の如く、私の耳へ幽かに入つて來るやうであつた。

だが、その事ではない。鳥の聲なぞは何でもない。私は、もう言葉が出ない。何んな風に云ひ表はさう。戰慄なぞと云ふ文字さへ、一つの弱々しい遊戯としか感ぜられぬではないか。恐怖、驚愕、そんな文字が何か？　私の心持の何十分の一が、それに依つて傳へられよう。

駄目である！　私は齒痒くてならない。

聽き手よ。貴下は龍卷を見た覺えがあるか？　黑い煤のやうな雲が、地面の直ぐ上に迄降りて來て、砂が一本の筒のやうに上へ吸ひ上げられ、其處に迷つてゐた幼兒が帶を持ち上げられたやうに、空中へ飛ぶ樣を見なかつたか？　或ひは大きな塔が割れて、その裂け目から、青と赤との焰が出る所を見なかつたか？　或ひは、さうだ！　重い馬力車に老いた女が轢き殺されて、貴方の眼前で血を鼻と眼とから流し乍ら、見る間に生から死へと急轉する顏面の凄じい色を目擊した覺えはないか？

そんな時の恐怖や驚愕や戰慄に數倍した渦亂のやうな激動を、私は身體の凡てゞ感じたのであつた。

何と云ふ凄慘な有樣。そして、之が私と密接な關係を結むでゐる。それが恐ろしくなくて好いであらうか！

床の上へ落ちてゐる毛の一本さへが、私の爛れた心を針のやうに刺す。そして、何萬本と云ふ髮の毛が――全く光澤を失つて、ミイラのそれのやうに、ベッドから垂れ下つてゐる。私は血が凍り、唇や鼻や眼の球が冷たくなつて行くのを感じた。

「ミサ子さん！」私は思ひ切つて絞り出すやうな聲をして彼の女を呼むだ。あゝ、實にその時、その瞬間、ミサ子の眼は靜かに開かれ、そして私の方へと柔和な視線が流れた。それは見る間に、物凄い絶望の色を示したと思ふと、又靜かな物柔かさに戻つて行つた。此の微細な雲行！

おゝ、彼の女はその時、笑つた、笑つたのである。微笑むだのである。奇蹟のやうに、神祕に、不

思議に意味深く、淋しく、柔しく、純眞に、後悔してゐるやうに《そして何よりも明かな證明だ。》深く深く私を愛してゐるやうに……

「ミサ子さん！」私はよろめいて彼の女の方へ進むで行つたが、又嚴肅な心に釘付けされて、その儘眞直ぐに立ちすくむだ。

軈て靜かな微笑は消えて行く煙のやうに、彼の女の痛ましい顏面の上を去つた。再び眼は閉ぢられ、苦し相に顎を動かしてする呼吸のみが聞き取れた。

「可愛想に、貴方の聲を好く覺えて居て、あんなに柔しく微笑むだのです。」教員は手を顏に當てゝ我慢しきれない泣き聲を壓へた。「之で、もう直き死が來るでせう、安心して死ねるでせう。」

「許して下さい。」と私は顫へて彼の女に縋らうとし、又教員に寄り附かうとした。けれど私の足は堅く釘附けにされ、私の腕は縛られてゐるやうに動かなくなつた。

それから何うして、其處を逃れ出したのか、私はもう語る事が出來ない。唯明白なのは私が駈けて、そしてあの斷崖の近くへ迄行きついた事實丈である。私は風で搖れ廻る長い草の中に身をひれ伏し、雲が低く動く空へ聲を放つて泣いた。心は狂ひ、苦しみ、鞭打たれた。眼は何か黑い流れや斑紋を幻覺し、あらゆる血管を後悔の蛆が游ぐのを知覺した。

微笑！　それが恐ろしいのである。何んな怒りの形相が私をそんなに迄身顫ひさせ得るだらうか？

誠實な微笑！　私の體は痛み、私の身は皮を剝がれた蛇のやうに藻掻いてゐる。その微笑！　一番純眞なものが、私の汚れた行爲に對して報いられてゐる。あゝ、その一瞬の微笑に一生の生命が賭けられてゐる。そんなにも價値の重い深遠な莊重な戒めが何處に又とあらうか。

「私は後悔してゐます。けれど心の底から貴方を愛してゐます。」と語りさうな微笑！　私は今後何うしてそれに報いる事が出來るであらう。いや、何も考へられない。そしてもう何も出來ない。彼の女は最早死んでゐるではないか？　私は何かしようとして動いてゐる。けれど、一切はもう遲れてゐる。晩過ぎる、それ丈が漸く分るのだ。

私は風に搖れる草の中に轉むで何者かに許しを乞うた。皮を剝がれた罪深い蛇のやうに、自分の淺間しい體に驚いては、天に向つて悲愁と痛恨の叫びを投げた。あゝ眼球を繰り拔いて投げだしても間に會はないではないか。

「微笑！　許して呉れ。ミサ子の靈よ。ミサ子の口元よ。許して呉れ。まざまざと眼に見えて來る。私の腦髓に彫附けられたその微笑！　一番優しいものゝ恐ろしさ！」

けれども聲は甲斐なく消え、風は凪ぎ、そして、あの闇、始終その中で私が惡事を働いたあの闇が、私の火傷したやうに脹れた肉體と精神の上へ蔽ひかぶさるのであつた。それは實に並ならぬ、世の常ならぬ暗さであつた。

（退職教員の附記）

哀れなセルロイド職工の手記は此處で終つて了つてゐる。

けれど私は何う説明したら好いのであらう――事件は複雑で、その上に私の心は鎭まつて呉れない。自分丈にはスッカリと分つてゐる事が、いざ説明し、辯明し、闡明しようとすると、皆漠然として了ひ、もう物語りの端緒が見附からなくなる。私は長い時間かゝらねば話し盡せない事件を、まるで繪圖のやうに一度に展開したいので、却つて混亂へと落ちるのである。

何故、ミサ子は死なねばならなかつたのか？　之が一番初めの、そして一番六ケ敷い問題である。人が他人の心を悉く知る事の出來ない限り、此の問題に正確な解釋を下さうとするのが既に誤謬の初めではなからうか？

けれど、默つてはゐられないのだ。もうミサ子は死んでゐる。彼の女の口の代りに、誰かゞ正當な辯明をしてやらねばならない。それは何より明かな事である。

彼の女の死に場所は我々が王冠の森と呼ぶ木立のある斷崖であつた事を人々は記憶してゐるであらう。其處で今度は何故彼の女があんな不都合な場所を選むだかと問うて見ねばならない。實を云ふと、私は未だ新しい悲愁に眼を蔽はれてゐて、考へる力、理性を適當に働かす力を恢復してはゐないのだが、それでも、夢の中であつた事を思ひ出すやうに仄かな幽かな――云はばまるで暗示のやうな解答を捕へる事が出來る。

彼の女に取つて、あの斷崖は懷かしい思ひ出の場所であり、恐ろしい罪を想起させる刑場でもあつたらしい。そして、私は確かに二度迄も彼の女の口から洩れかゝる懺悔の言葉によつて、それを直覺してゐたのであつた。それ丈は今斯うしてゐて、思ひ出し得る間違ひのない記憶である。いや何たる忌はしい記憶であらう。

それから何うしたか？　語る可きもつと重要な事はないのか？　あり過ぎる。それで困つてゐるのである。私はもつと前の、もつと古い記憶から辿り直さねばいけないのだ。いや、説明の出來ない澤山の事が、語るのがつらい色々の事が、何うしてそんなに私の心の中に蠢動するのであらう。

事の初めは何であつたか？　私の母とミサ子との氣持ちが合はなかつたのを先づ思ひ出せ。それである。原因と名附けられるのは確かにそれであらうか？　いや、之は大きい原因ではない。けれど斯んな工合であつた――即ち、ミサ子と私の母とは大きい喧嘩をしたのだ。いや、さうではない。その事にも既に原因があつた。私よ、驚くな。皆云つて了ふ。私はミサ子と結婚する以前に、彼の女を妻のやうにもてなした覺えは確かにない。斷言する。それから彼の女が櫛を盗むだ時、彼の女は我々の知らない特別の週間の中に居たのである。だのに、何うしたのか。それを云ふのがつらいのである。

彼の女は私と四ヶ月同棲した時、姙娠六ヶ月位になつてゐたではないか！　之が潔癖な昔堅氣な、そして士族の娘であつた私の母を此の上もなく不快にし、喧嘩の素を造つたのである。元より、私は三つ許した次手に、四つでも五つでもミサ子の過失を許さうと心掛けてゐたのであるが、母はもう到頭我慢がし切れなくなり、自分から自分に敗けて怒りを發して了つたのである。

「お前……」と母は私を蔭へ呼むで尋ねた、「お前、結婚前にも、その覺えがあるのですか？」辛い質問！　そして痛い思ひ出が此處から初まる！

あゝ、私は何と云ふ機智と奇才のない鈍物であつたらう。「いゝえ、」と云ふ正直相な答へより他には、一寸好い思ひ附きもなかつたのである。私が惡い、もうそれに相違ない。ミサ子を許さうと心掛けてゐるなら、何故、あらゆる點に心を細かく働かして、許すための計らひをするやうに努力出來ないのか？　私は自分を叱り、自分を嚙み破つてゐるのだ。

俄然、ミサ子は家出して了つた。それも夜中にである。勿論彼の女は私の室に臥なかつた。私は十二時頃一度目覺めて、泣いてゐる彼の女を臺所迄呼びに行つた。すると驚いた事に、彼の女はそこの板の間に自分丈の布團を布いて臥てゐたのである。顏は蒼白になり、息づかひが荒く、何か强い苦痛を耐へてゐるやうに、額へ水を浴びたと思はれる程汗をかいてゐるのであつた。おゝ私はもう此の先を話せない。

「疊の方へお行き、私は何とも思つてはゐないよ。母の事は許して呉れてね、さあ、冷えない方へ……」やつと私は囁いたのである。

「私を女中以上に取扱つてはいけません……あゝ身分が違ふ……私は惡い所から出て來た女です…」彼の女は悲しさで齒を喰ひしばり、漸くに之丈を口走つて眼を閉ぢて了つた。

「その儘で澤山だ！　構はないが好い！」他の室で、未だ覺めてゐたらしい母が口を入れた。私は母親に大變孝行な質――自分で云ふのは可笑しいが、何んな曲つた事でも母の命令なら從ふやうに生れついた男――であつた。それも、此の場合では大きな過誤の一つとなつたのである。そして私は私の心を嚙むでゐるのだ。

私は勞れ切つて、惡い夢の中に一夜を明した。次の朝、母より先へ眼を覺ますと、私はミサ子の代りに戸を明けてやつた。明るく流れ込んだ光線は一切を明白に指し示した。あゝミサ子はもう私の家の私の妻ではなかつたのである。

母は幾らか後悔しつゝ、尙怒りを止めなかつた。「何處迄人に世話をかけるのだ。もう捨てゝ置くが好い！　あれはお前、不良な少女だよ。改心と懺悔を賣物にし、家出をおどかしに使ふ、そんな少女なんだよ。」

それから母は大變不安な焦躁を示しつゝ殆ど狂的――そんな例を私は未だ私の母に於いて見た覺え

がない――と思はれる迄、身を取り亂して、大きい小さい荷物を片附け出したのである。それは何のためか私の解釋に苦しむ所であつた。母は斯んな忌はしい方角の家は捨てゝ、新しい幸福な所へ住み替へ、惡い思ひ出を一切打ち消したいと丈語るのであつた。私は何も分らずに、其の命令を受け入れねばならなかつた。庭に植ゑてある色々の草花を鉢へ移したり、ミサ子の下駄を取り上げて見たりして、私はいくらでも盡きずに出て來る悲しみを泣く事が出來た、

警察の方へは早速ミサ子の搜索願ひを出した。

移轉をしてから十五日――あゝ何と云ふ空漠とした、然も紛亂した心持の十五日であつたらう――が過ぎた時である。警察官が突然私を訪ねて來た。

「おゝミサ子は何處に居りましたか？」私は戀しい女性の居所を知る事さへ、いやその歩いた道を呼る事さへ、胸の裂けさうな喜びであつた。

「いや、その事ではないのです。實は伺ひたい點があるのです。そのミサ子と云ふ方――卽ち貴方の妻――は姙娠して居つたでせうな。」

「はい、現在姙娠してゐるのです。」

「實は申し上げにくいが、以前貴方の棲むで居た家の緣の下にですね、女の――若い女の衣服で包むだ、胎兒の屍體が隱してあつて、それが匂ひ出した爲め、近所の大騷ぎになつてゐるんです。」

おゝ、之が本統の事であらうか？　ミサ子は家出したのである……家出……家出と犯罪……そして轉居……轉居と犯罪……警察官の嫌疑は當然であつた。

ミサ子はその行衞を見附けられなかつた。そして、彼の女が居たと叫ばれた時には、もう元通りの彼の女ではなかつたであらう。何んなに私の記憶が亂れようと、それ丈は確かな事である。

彼の女は橫つて居た。彼の女は胥を碎いてゐた。そして、そして何か？　そして、もう姙娠もしてゐなかつたのである。この事が死の重大な原因であつたのか？　何？　いや原因ではない。寧ろ結果と云ふ可きであらう。實に、實に悲しむ可く痛ましい結果。結果として表れた事實なのではないか。

「お母さん。貴方は知つてゐたんですか。」私は斯う尋ねて眼を閉ぢた。

「知らない。知らない。この事はすべて祕密だらけです……第一、全體、それは誰の子なのです？」

私は息が詰まつた。誰の子？　神よ、貴方は私に子を授けて下さつた。それだのに、私はそれを受け取れなかつた。何故か？　一寸した行きがかり――一寸した不注意――一寸した愛の不足！　あゝそれは原因でもあり、結果でもあるのだ。

下さるものを拒むだのが間違ひの原因であつた。いや原因はもつと前にある。之は寧ろもう結果に近い一つの過失ではなかつたか？

私は明晰には考へられない。何故なら……いや何故ならではない。之は何かしらあのセルロイド職

工に、又あの斷崖に關係してゐたに相違ない。私が悲しい足取りで、あの職工を呼びに行き、彼にミサ子の死に際を見せてやり、又ミサ子の靈へ一つの重要なそして最後の思ひ出を土產として持たせてやつたのも、實に、私がそんな漠然とした關係を直覺したからであつた。

私は何うしよう。又分らなくなつてゐる。ミサ子は私を恨めし相に睨めた。

そしてセルロイド職工を微笑みを以て眺めた。そして誰れが彼の女を殺したのであらう。

一體之は何であり、何の結果であるか？

私は義俠心から彼の女を愛したと思はれてゐる。そしてあの職工は唯淋しさから、或ひは戯れに類する嫉妬から彼の女を愛したと思はれてゐる。そしてその內何方が正しいか？　いや、正しくなくとも、何方が正しさに近いか？　分りはしない。唯ミサ子の心は何かしら獨自のそして特殊の判斷を下してゐた。いや判斷ではない。思慮ではない。生れつきの本能……生れる前からの緣……それに依つて彼の女はセルロイド職工を選むだ。緣は合つてゐたのか？　子が神から授けられた。彼の女はあの青年を心の底から愛してゐた。それにも拘らず彼の女は私の妻であり、姑女の怒りを我慢する嫁であつた。子供は育つて行つた。遠慮なく育つて行つた。緣、あの青年とあの少女には緣が……深い緣が定められてゐたやうではないか？　あゝ皆之が死の原因である。いや、むしろ、結果、色々の事の結果、そして死の前提であつた。

私は一時に思ひ出す。そして一度に悲しみがこみ上げる。私の親切の不足――一寸した心の勞れ、――實に一夜の間丈に過ぎぬ愛情のゆるみ――その痛い思ひ出が私を責めさいなむで、夜も私を眠らせて呉れない。そして、ミサ子の幻は何度も現れて、あの職工を許してやれ、彼の女が許してゐる如く一緒に許してやつて呉れ、彼の女を愛する代りに彼を愛してやつて呉れ、と訴へるのである。それはもう本統である。

私の生活が斯んなに破壞されても、それを怨むのは喜ばしい事ではないのであらう。ミサ子の幻は私に正當な處世法を敎へてゐるのが確實である。幻の敎訓……それは旣に紛亂の元である。私の友達は鞭を持つて來て、あの職工を打たうとしてゐる。けれど、鞭の音はそもそも何を意味するか？

懲罰？……懲罰ならば痛みを以てしてはいけない。

訓戒？……訓戒ならば痣を造る必要はない。

復讐？……復讐ならば――いや復讐でも、やはりもつと柔しくしてやらねばいけない。復讐を復讐でないものに變化させ、羽化させねばならない。毛蟲は美しい蝶とならねばならない。之が昔からの言葉である。

あゝ私は之から何うして生きて行く積りであらう。それは分らないが、鞭丈は何處かへ捨てゝ了ふ可きである。手ブラで歩いて行け。それ丈が兎に角分つて來てゐる。

それから未だ考へる可き重要な點が殘つてゐる。何んなにしても、あの職工を、もつと善良な方へ歩かしてやりたい事、その爲には何んなに困難な施設をも怠つてはならぬと云ふ事である。

早く絶望し易い人はもう斷言し宣傳してゐる。あんな根からの惡人の改良を無駄に續けるよりも、新マルサス主義にでも改宗して了へ！　と。

それも一理であらう。けれど我々の勇氣と知見をためす爲めに、もう一つの積極的な道が開けてゐるのを何故見ないか？

我々は立つて、そして叫ぶ。

何を絶望するのか。我々の仕事は無駄ではない。唯眼に見えて効果が顯れない丈で、少しづつ潜在的な力が出來て來てゐるのである。諸君は雨だれを觀察した事があるか。私は知つてゐる。あの雨だれを見て貫ひたい。それは立派な透明な球の粒である。全くそれに相違ない。そして地へ向つて走る前に、生命あるものゝ如く顫へ出す。其れが走る力の養成される有樣である。それは走る運動そのものではないが、然もそれに持續した力である。進行の前の足踏みである。顯著な運動ではないが、非常に重要な力の養成である。

諸君は如何に思ふか。我々の運動が顯著でない時が、即ち我々の力を養成する好機である。効果が目に見えないでも、之は重要な一つの過程である。當にせねばならぬ行爲である。

強盜が六人の人を殺し、惡い親が幼兒を鐵槌でなぐり殺しても、惡い女が繼子を天井から縛つて吊し、その下で、もう一人の貰ひ子へ燒火箸を當てゝ、肉の煙りを立たせても、サディズムの男が女の指を切つて食べ、學生が親友をバットで打ちころし、兄妹が通じて畸形兒を出來したと云ふやうな事件の傍らにあつても、我々は一生懸命に我々の顯著でない仕事に努力しよう。眞心と智慧とを一に合せ、何よりも倦む事を恐れつゝ進むで行かう。

不正な權威や腐敗せる社會へ反抗するための憎惡心――それは立派な德の一つであり、現代に於いては極めて重要な感情の一つである。そして涙だらけな萎縮的な所謂「善」がこの種の憎惡心の行使に對して一つの阻害となる事も確かである。

然し、憎惡心の行使がその方向を過る時、我れ我れは其處に初めて、恐る可き破綻を見るのである。職工とミサ子との場合は全くその好適例であらう。

それ故、憎惡心を何のやうに使ひ分け、何のやうに按配するかと云ふ事は、現代人に課せられた最も重要なそして最も困難な問題である。

だが此處には何がある？　今の私は餘りに強い紛亂の中に落ちてゐて何も分らない。唯だ豫想する。必ず未來に於いて、再び道は開けるであらう。忍耐せよ。何故にとは問ふな。唯眞直ぐに信じ、熱心に忍耐を實行して行くのである。そして此の事が私を勇氣づける唯一の力となるに相違ない。斯んな

に迄忍耐するからには、何か人間の理性の中に、きつと善いものが祕むでゐるのだ。それを堅く豫期せよ。外部に疑ひが起つたら、眼を閉ぢて內部を見よ。

一通り悲しみが過ぎたら、必ず又直ぐに私自身を創造する、そして善と正義の名譽のために働く力が湧き上るであらう。斯くて今迄よりも一層多く哀れな人を劬り、又出來る丈は慰藉を與へたいと云ふ嬉しい希望で心が一杯になるであらう。私は私の心を見詰め、そして命ずる——

一般の者を高い程度に導けよ。そして惡者達を除外するな。否一層彼等の爲めに力をつくせ。それが私達の肉と靈の課業である。

願はくば此の大きい社會をして、自由な朋友の美しい會館たらしめよ。それ自身に於いて會議場であらしめよ。何の宗旨にも賴らぬ神殿であり、寺院であらしめよ。さらにそれ自身に於いて有益な學校であらしめよ。

之で宜敷い！　凡ては語られたのである。だが其れは無秩序な舌、戸惑うた記憶力、紛亂せる思考力を以てゞある。あゝ何が語られたと云ふのか？　私は未だ何も語らない氣がするではないか！唯錯倒と紛亂とが叫ばれたに過ぎない——そして此の錯倒と紛亂の中心をなすものは「私が彼の女を殺した。斯くも陰慘な外圍の中で、殊に美しく愛らしかつた私の妻を殺した……」と云ふ淺間しい觀念である。私は何うしよう。之から何うして暮して行かう。凡ての騷がしい事件は過ぎた。時間が私の熱い血を冷しつゝある。今にもつと本統の事が分つて來る。そして本統に靜かな悲しみが目醒めて來るのもその時であらう。

アリア人の孤獨

一

私が未だ十九歳の頃であつた。

私の生家から橋一つ越えた、すぐ向ふの、山下町××番館を陰氣な住居として、印度人（アリア族）の若者、ウラスマル氏が極く孤獨な生活をいとなむでゐたと云ふ事に先づ話の糸口を見出さねばならない。彼れが絹布の貿易にたづさはつてゐる小商人だと云ふ事を私は屢ば聞いて知つてゐたが、然も彼れの住居には何一つ商品らしいものなぞは積まれてゐなかつたし、それに、日曜以外の日でも、丁度浮浪者の如く彼れが少しも動かない眼に遠い空を見つめつゝ、横濱公園の中を靜かな足取りで、散歩してゐる所なぞを私は時々見かけたりしたので、そのため、段々と彼について次のやうな獨斷を下すやうになつた——

「彼れが少くとも一商人であると云ふ事は、彼れの爲替相場に關する豐富な知識なぞに照しても、充分推定し得る。然し彼れは今や恐らく破産して了つたのだ。」

私にそんな獨斷を敢へてなさしめた、もう一つ他の理由はと云へば、それは斯うである。

彼れはその以前迄、一人だけであの舊風な煉瓦造りの××番館全體を使用してゐたが、間もなく、建築物の大部分をシヤンダーラムと呼ばるゝアリヤンの一家族へ又貸しをして了ひ、自分は北隅に位

置をしめた十二疊敷程もある湯殿へと椅子や寢臺を移し、そこで日夜を過ごす事に充分な滿足を感じてゐたのである。

元來××番館はその始めアメリカの娼婦が住むでゐた建物なので、他の何んな室よりも湯殿が立派な構造を示してゐた。それは湯殿と云ふ名で呼ばれ乍ら、然も、半分は客間に適するやうな設計の下に造られたものであることが確かだつた。

先づ、其處へ這入つて行くと、灰白色の化粧煉瓦の如きもので腰を卷かれた、暗い水色の壁が私の眼を打つた。天井はエナメル塗りの打ち出しブリキ板で張られ、床は質の好い瀬戸物で敷きつめられてゐた。東の隅には古びた上流しが附いてゐた。昔は其處に洗面のための設備が全部とゝのつてゐたのであらうが、今では、其處が水で濡れる機會もなく、ウラスマル君の書見臺に代用されてゐたのであつた。

この室の小さい窓は外部から覗き込まれぬため、非常な高所に開かれてゐた。それで、私が庭から窓へ向つて、

「ウラスマル君……」と呼ぶと、彼れは穴の底から湧き出して來るやうな沈むだ聲で斯う答へた——

「ウエタミニ。今、踏み臺へ乘るから。」間もなく、窓の扉が動き、そして眉毛と眼との間の恐ろしく暗い彼れの顏が其處へ表れるのだつた。

或る闇の夜、私は又しても、庭づたひに、この小窓をさして歩み寄つて行つた。そして、思ひがけぬ一つの狀景を發見した時に、進まうとする足を急いでひかへる必要を感じたのだつた。

見ると、若きウラスマル君の太い右腕が例の高い小窓から靜かに突出してゐた——いや、そればかりでなく、その手は非常に古風な手下げラムプをしつかりと握つて、虚空へ垂れ下げてゐるのであつた。豆ラムプの細い燈心には人の眼を竪にしたやうな形の愛らしい焔がともつてゐて、その薄い光りが窓の前に伸びた無花果と糸杉の葉を柔らかく照し出して居た。勿論その時、室内にあるウラスマル君の顏も姿も私の見得る所ではなかつたし、私自身の足音も極く靜かなものだつたので、私の來訪は彼れの氣附く所でなかつた。

私は未だその時、僅か十九歳の少年であつた。その事を何うか酌量して許して貰ひたいのであるが、私はウラスマル君の斯んな行爲が何んな目的から爲されてゐるのかと云ふ疑問に對して深い興味を持たずにはゐられなくなつた。

それで私は息を殺し、横合の物影に佇むで、事の成り行きをうかゞつたのである。

ウラスマル君の腕は突き出された儘少しも動かなかつた。晩春のゆるやかな風はむせるやうな若葉の匂ひを闇の中に吹き送つて來ては、又吹き消しつゝ、その終る事もない無形な遊戯をいくどでも繰り返してゐた。五分、十分、二十分さへが過ぎて行つた。然も、腕は依然として不動であり、燈の焔は人の眼を竪にしたやうな形で澄み返つてゐた。私はも早自分で息を殺し切れなくなつた。私の若い心は謎を解く事よりも、それを破壞して了ふ事を望む程にあせり出した。

「ウラスマル君！」と私はせんかたも盡きて、今はこらへてゐた息を俄かに強く外方へと押し出した。その聲につれて、初めて燈火はゆらぎ、太い異人の腕は動いた。

「その原因を話して下さい。」と私は上を仰いで彼れに聞いて見た。青年は出來るだけゆるやかな態度で首を出し、少し考へてから、私に英語で次の意味を答へた——

「私は恥かしい。唯だ、向ふの方を見てゐたのです。」

「單に、闇をですか？」と、私は眼を見はつて反問した。

「さうです……」彼れは無器用に答へ、少しの間、沈思してから、又呟いた——「闇は非常に廣いものであるが、然しそれを見ようとすると、ほんの少しゝか眼に映らない……。」

「貴方の國では、闇の事をマーヤの帷りだなぞとは云ひませんか？」

「云ひません。」彼れは彼れ獨特なそして極く祕密な闇の觀照を私から發見された事にひどい羞らひを感じてゐるらしく、その羞らひは彼れの心を多少とも不機嫌へと轉じた如くであつた。そのためか、それとも、他の動機からか、彼れは室の中を行つたり來たりしつゝ、獨りで次の如き古風な音調を口

誦むだ――

「サババーバス、カラーナンム、クシヤラース、ウバサムバーダ、サチツタバーリヨウダバナーンム……」

以上の言葉は彼れが散歩中に、又は沈思中に、時々呟くものであつたから、私はそれの大部分を記憶し、場合によつては、微笑しながら、ほんの戯れに、彼れと合唱する事さへ出來たのである。勿論その句の意味は私の知らぬ所であり、彼れ自身の教へようとせぬ所でもあつた。

「それにしても……」と、私はその夜更、一人で歸途を急ぎつゝ、考へにふけつた、私の未だ無經驗な頭には、その時、ふと、次の如き詩句が強い力で湧き起つて來るのだつた。

私は戸口に立つて、燈をかゝげ
お前の行く道を照らしてゐる。

「確かに……」と、私は再び空想した。ウラスマルは何かしら戀の如きものを經驗してゐるに相違ない。それだからこそ彼れはあの祕密な行爲を私から發見された時、異常な羞恥を感じてたじろいだのであらう。

二

曾て、私の不意の訪問が、ウラスマルの靜かな心へ困惑と動亂とそして大きい羞恥をさへ與へた事を思うては、その後成る可くあの異人から遠ざかつてゐるやうにとの遠慮が私の心を占めるのは自然であつた。然も、私はウラスマルのすぐれた同族サーキヤムニの非常に珍しい逸話の續きを、もう一度聞きたいと云ふ望みにかられて、再びあの無花果の立つてゐる庭へと足を向けたのである。最も、私はその場合でも、極く妥當な心づかひから、斯う呟く事を忘れはしなかつた――

「明け方、早く、あたりが霞むでゐる内に彼れを訪ねて見よう。」私は夜の訪問で失敗したから、その失敗から遠ざかるため、全然類似せぬ時間を選むだ譯なのである。

印度人には早起きの者が至つて多い。私が朝日の昇るよりも早く、ウラスマルの家を驚かした時、彼れは既に髪を梳き終へ、石油厨爐で一個の鷄卵をゆでゝゐた。然し、見受けた所、彼れの機嫌はこの日も別段すぐれて明るいと云ふ程ではなかつた。

私と彼れとの會話がさう容易には融合の中心へと這入つて行かないらしい事を、私は彼れの樣子によつて漸く察したので、自分の聞きたい話をも要求せず、たゞ時間が自然と流れるのを見詰めるより他仕方がないのを感じ出した瞬間である、ウラスマルはアッと發聲すると共に、立ち上り、瀬戸物の

敷きつめられた床をけたゝましく走り出した。見る間に、彼れは踏み臺へ乘ると、例の窓から首を出して、純然たる印度語で、何かしらを外の方へ云ひ放つた。外からも直ぐ答への聲が聞き取れた。それはウラスマルの太い聲に對比して、非常に細く、且つ音樂的であつた。

軈て、ウラスマルはその短く太い首をめぐらして、私の方を見ながら、最も稀れな微笑を見せた。その顏色の中に、私は又しても彼れの烈しい羞恥を讀む事が出來たので、非常な悔いを感じつゝ、遂に椅子から立ち上つた——說明する迄もない、私は「惡い場所へ來合せて了つた」と云ふ意識で、自分を惱ましはじめたのである。

「いや、その儘、居て下さい。」と、ウラスマルは掌と掌をこすり合せながら、右方の眼尻へだけ小皺を寄せて、私に納得させ、それから次に、英語でもつて、外の客人へ、カムィンと呼びかけた。

庭に面した次の室の扉をウラスマルがいんぎんに引きあけると、其處から快い風のやうに這入つて來たのは、年の頃、二十位とも見ゆる小柄な——然し、均齊の好く取れた——一個の女性であつた。斯う云ふ場合、誰れもが感ずるらしい、氣の引けるやうな、又、罪深いやうな心持ちをしながら、私は斜めに、彼の女をそつと一瞥した。彼の女は名匠ヴェラスケスによつて屢ば描かれたやうな卵形の顏をした、額の餘り高くない美人であつた。彼の女の耳にはそれ程高價とも思へぬ耳飾りが下り、彼の女の左腕には三つ以上も象牙の腕輪がはまり、それが相互に當り合つて鳴り響いた。云ふ迄もなく彼の女はその深いまなざしと長い睫毛が語つてゐる通り、混り氣のないアリア人であつた。

彼の女はその輕快な薄い脣に、「……ルシムラ……」と云ふ風な、私には意味の分らぬ呟きをのぼしつゝ、私へ向つても會釋した。

それから三人の會話が何う進むで行つたかを正確に思ひ起す事は不可能であるが、兎も角も、女が男よりも一層快活であつた事丈は人々の想像し得る通りであつた。私の記憶が誤りでなくば、女は、たしか、男へ向つて、訛りの多い英語で斯う呟いて見せさへしたのである——

「私、御飯を一杯につめ込むで了つたあとのやうなつまらない感じがしますわ。だつて貴方は何だか餘り堅い事ばかり話すんですもの、それとも、他にお客樣が居るので、態とさうなさつてゐるの？」

彼の女の訛つた英語を、さう解釋したのは私のつまらぬひがみであつたらうか？　然し、この淋しい解釋は明らかに私を一種の苦澁と壓迫感へ誘ひ込むだ。仕方なしに私は立ち上つて、其の場を去らうと試みた。けれど、それを見て取るとウラスマル君の顏面には可成り烈しい困惑と憐憫に似た表情とが起つた。彼れは之から手風琴を彈いて聞かせるから、もう少しこの座に居て呉れと、さも私を慰撫するやうに囁いて呉れた。

褐色をした手風琴のごく古いものが直ぐ其處へ持ち出された。ウラスマルは不器用な手でそれを彈かうとし初めたが、何故か其の樂器からは寒さうな風の音ばかりが發して、本統の快い響が出て來な

かつた。女は素早い眼で、風琴の一部に破れた穴の大きなのを見出すと、誇張的な聲で輕侮の笑ひを吐きつゝ斯う云つた——

「では好い？　私が親指でこの穴をおさへてゐて上げるから、出來るだけ、そつと彈くのよ。」

この悲む可き簡素を私は默つてじつと見詰めた。と、手風琴は極く珍妙な節廻しで鳴り出した。女も興に乘つて來ると何かしら男へ向つて新らしい歌を彈くやうに註文し、さて、自身もあまり高くない聲で、樂に合せつゝ歌ひ出した。その歌曲には馬のひづめの音や、いなゝきを眞似た音聲が仕組まれてゐて、可成りに興の深いものであつた。

其處へ、いきなり聲をかけたのは、同居者のシヤンダーラム夫人であつた。彼の女は半白の髪を平らに撫でつけ、白いレースで胸を蔽ひ、恐ろしく大きい出眼を早く動かしながら、三人を一瞬の内に見廻して這入つて來た。

彼の女は直ぐウラスマルへ斯う呟いたのである——

「お約束のカシミヤ、ブーケは之だけしか上げられませんよ。」そして、前へ出した彼の女の黑い手には、二三滴の香水をひそませた一個の壜が握られてゐた。

すると、例の若い女は急に頓狂な聲で笑ひ出し、そして、口早に輕侮の言葉を射放つた——

「この野暮な人が香水ですつて？」

それ程深い交際にと入り込むでゐる譯でない私は、其の後ウラスマルの新鮮な戀が何う進むでゐるかを實際に知る事が出來なかつたのも道理であるが、そのため、不思議にも、私の空想力は却つて敏活に働くものゝ如く、實に次のやうな斷定へと急いで行つた——

「彼れは貧困のため、女の歡心を充分に買ふ事が出來ないで今や非常に惱むでゐる。女は彼れよりも上段に立つて、むしろ、彼れを輕蔑さへしてゐる。所で、ウラスマルはあの野暮な、何の取り柄もない體を飾る唯一のものとして、カシミヤ、ブーケを選むだとは何たる氣の毒な分別だらう。然も、それを自身の金錢で買ひ得ず、同居人から僅かに一二滴を貰ふと云ふのは充分悲慘で、憐愍す可き事ではあるまいか。」

私は以上の斷定を眞實なものとして堅く信じ初めたのである。

私がウラスマル及びその高慢な戀人に會つた日から四日後の事である。私は勉學に勞れた頭を休めるため、櫻の若葉を見ようとして、橫濱公園の內部へと這入つて行つた。そして偶然にも、其處の或るベンチに、深く考へ込むでうなだれてゐるウラスマルを見出したのだつた。私は若しや例の女性も來合してゐるのではないかとあたりへ眼をくばつた。然し、似よりの影も見當らぬので、私は直ぐ、

ウラスマル君のうしろへと近づいて行つた。その時、突然、私の鼻を打つたものは、若葉の匂ひから明確に分離してゐる、あのカシミヤ、ブーケの高い香りであつた。その香りは又しても私の心底へ「戀の奴の哀れさ」を想起せしめるに充分であつた。

私は彼れの肩をうしろからそつと叩いた。彼れは驚いて、彎曲にしてゐた背骨を急に反りかへらせた。見ると、彼れの眼は心持ちうるほうて、その深さを一層濃いものにしてゐるやうだつた。そこで私は彼れの卒直な擧動を哀れがりつゝ、慰め顏に斯う云つて見た——

「話して下さいよ。貴方の戀の事を……。」

「戀？」と異國人は黑い眼を奥底から光らした。

「だつて、貴方の香水がそれを語つてゐますよ。」

「あゝ、それは大變ちがふ……あの若い女は最近本國から浮浪して來た乞食の一種なんです。彼の女の腕環なぞも、高利をはらつて、或る印度商人から借りてゐるものに過ぎぬ。私は彼の女と二人きりで同席する事を恥ぢたからこそ、風琴迄持出して貴方を引きとめたのです。」と、彼れは悲しげな聲でさゝやいた。

四

私は大きな悔いを以て、自分の誤解と錯覺とを顧みた。何故であらう？　その答へを簡單に語るなら、斯うなのである。

——四ヶ月以前、ウラスマル君は本國に唯だ一人殘されてゐた母親を、横濱へ呼び寄せようとして、自分の儲けた可成り大きい金子を故郷へと送つたのであつた。母は直ぐ旅に立つた。彼の女の乘り込むだ船はS・S・Y・丸であつた。けれども、途中、その汽船は他の非常に大きい汽船の船首へと、右舷を打ちつけた。約十尺ばかりの大穴が船腹に開くと見るまに、傷付いた船は高い浪の中に沈むで了つたのである。その時はまだ非常に寒い季節の中にあつた。云ふ迄もなく、母親は悲慘な死を遂げ屍骸の行衞さへも不明となつたのである。

——その母親が生前、儀式の時に限り、好むで身へつけたのがカシミヤ、ブーケであつた。毎日をひどい悲しみで送り迎へてゐた孤兒のウラスマルは、偶然にも、一日、シヤンダーラム夫人が母のと同じ香水をつけてゐるのを嗅ぎ、深い感動の内に、彼れは亡き母の姿を幻覺した。彼れは懷かしさの餘り、その香水を所有したいと云ふ欲望にかられ、ほんの一二滴をシヤンダーラム夫人へ乞うた譯なのである。

——今日、彼れは自身の體へその香水を振り撒いた。それは元より戀するものゝ身だしなみとしてではなく、母の姿を追ふ孤兒の、せめてもの思ひやりとしてゞあつた。——

以上の告白を、とだえがちに語り終つた時、孤獨な異國人のうるほうた眼は一層そのうるほひを增し初めた。苦痛の色は彼れの嚴肅な前頭部を一層淋しく變化せしめた。

深い――然し極く單純な感動が私の胸をも打たずには居なかつた。私はどもりつゝ、自分の早計な獨斷を重ね重ね詫びた。

闇のおそひ初めた街路を一人で歸つて行く途中、私の心の中には異常に凄壯な大きい靑海原が見え初めた。その冷却した透明な波の上に、少しも腐蝕する事なき四肢を形ちよくそろへた老婆の屍體は、仰臥の姿で唯だ一人不定の方向へとたゞよつてゐた。

私の眼は急に涙の湧き上る熱を感じた。私は思はず立ちどまり、もう一度、ウラスマルの居宅の方を顧みて詫び入りたい心持ちになつた。

今こと〴〵く推定する事が出來るではないか？　ウラスマルが曾て窓から闇をのぞいて、二十分間もその體を靜止したまゝでゐたのも、結局は、戀の思ひに打たれてゞはなく、彼れの不幸なる母の死を、たゞ一人悲しむでの事であつたに相違なかつた。

私はウラスマルが曾て不圖口走つた次の如き言葉の斷片を懷かしい感じの內に想起し得る。――

「闇は際限もなく廣大なものではあるが、然もそれを見ようとすると、きはめて小さい部分しか目に寫つて來ない。」

恐らく、この言葉には何の特別な意味も理由もないに相違ない。けれども、一個の人間が折にふれてその心底に感じた通りを口に上せた言葉は、別に何の深い意味がなくとも、それ自身で充分愛するに足るものではなからうか？　いや、强ひて考へをめぐらすなら、この言葉はやはり「死」と何等かの關聯を持つたものと云はれるだらう。死は確かに一つの深淵であり、我れ等の誰もが未だかつて、その全樣相を見きはめたと云ふ話を聞かぬからである。

肋骨の折れた少年

第一章

Y監獄O分監が該少年に就いてなしたる個性調査

（大正四年六月×日）

——經歷——

本受刑者は未だ物心つかざる頃、Y・B養育院に收容せられ、十一才迄同院保育の下に、荒凉たる幼年時代を過し來れるもの。その本籍の所在、父母の存否、及び養育院の保護を受くるに至りし原因等は全然不詳なり。眞に、生れて今日に及ぶ迄、温き家庭の和樂を知らず、世に賴るべき處なき最も可憐なる少年なり。

先づ試みに本人の經歷を質問すれば、彼れは貧しき記憶を辿りつゝ、語つて曰く、十一才の時、養育院の發意に從つて、Y町スクーナー建造所へ小僧奉公に遣はされ、六ヶ月を苛酷なる使役の下に過せしが、副主人の毆打數回に及べるをもつて使ひ先よりその儘遁走し、深夜横濱海岸通りを徘徊中、未知の男（雪駄を履き、手の甲には扇子の文身ありし由）に誘はれて、東京に至り、初めて十二階の高層建築物を實見せり。（作者註、之に續く彼れの閲歷は本文中に現れる故、此處では省略した。）

——教育——

教育は元より學校の訓練に依らず、養育院及びY眼鏡店主人の稍々無秩序なる指導に從つて、尋常三年程度の學力を有するに至れりと云ふ。

今彼れの知識如何を檢するに、讀書及び書き方は四學年に相當する力あるも、算數、歷史、國家問題等に關する識見は之に比例せず、例へば日露戰爭、紀元節等の眞意を解する事なく、前者をもつて「活動映畫の題名」となし、後者をもつて、單に「拜む日」となす。

——既往歷——

遺傳、胎生期、小兒期共に詳かならず。

——現在に於ける身體の狀態——

現在の狀況を檢するに、身體營養は不良、身長四尺六寸二分、胸圍二尺三寸五分、體量八貫九百三十匁なり。

顏色靑ざめたれど、表情は概ね無邪氣にして、稀に憂愁の色をなせり、左手前膊には模倣に因る文身あり、その圖は扇子の由なれども、線狀散亂して了解する事能はず。尙ほ右胸部には弦月形をなせる著明の陷沒を見る、之第四、五肋骨の骨折に基くものなり。

——現在に於ける精神の狀態——

智力は普通にして、發育上の障礙を見ず。然れども深き思慮なく、推理力に乏し。感情は、彼れが

述ぶる所の文章等に依つて見れば、比較的鋭敏なるが如しと雖も、多くは之を顏面の上に表さず。父母の事を問ふに、何れはめぐり逢ひたきものと、切に訴ふれど、眼底に悲哀の色を窺ふ事難し。之、酷薄の環境に生存し、自己の眞意を他人に隱匿する必要上、生じ來れる習慣と見るを得べきか。

――性質――

性質は柔弱なり。劣等なる社會生活に依つて得たる經驗は却つて彼れの德性を汚損せるが如し。されど將來の指導如何に依つては、多少の變改を施し得べき柔軟性を有する事確實なり。

――備考――

保育者たるものは飽くまで誠實と懇情とを以て之に接するを要す。

第二章

少年受刑者の追憶（作者に依り表現上の修飾を加へられたる）

第一節

私は現在――とは大正四年――數へ年十五才と決められてゐる故、當然、明治三十四年生れの筈であるが、眞實の所を打ち明けると、私自身、何年の何月に生れたのか知つてはゐない。では何處の國の暦から十五才と云ふ年齢を數へ出したのだらう。

それは私が初めてY・B養育院へ這入つた時、係りの役員へ「六才」と答へた事に基ゐを置いてゐるのである。然し朧氣な記憶を辿つて見ると、それは養育院入りをする少し前であつたと思ふが、その當時の私が六才である事を、何の證據もなしに、決めて呉れたのは「山さん」と云ふ十五六の强い少年で、（後に立派なバナナ商人となつた相だが）冬の最中にも半裸體の彼れはいきなり私の凍傷で赤く脹れた耳を引張つて云つた――

「兒分！　手前は幾つだね？」

「知らないよ」と私は泣く用意に、鼻の先を熱くしながら、顫へ聲で答へた。

「手前はミヅさ。」（ミヅとは競賣屋の言葉で六の意）彼れは人さし指で私の頭の頂點へ恐らく6と云ふ數字を書いた。それは妙に痒い感じのする命令であつた。その時以來私は丁度催眠術にでも掛つたやうに、自分が六才である事を信じもし、又係り員たちへもさう語るやうになつたらしい。

養育院へ這入つてから二年後、私の習ひ覺えた仕事は主に封筒貼りであつた。だから私の指は今でも紙を折り疊むだり揃へたりする事に特別の感覺を持つてゐるし、アラビヤゴム液のあるか無いかの匂ひなぞを、何かの機會で嗅いだりすると昔の夢が煙りのやうに立ち上つて、私を悲しい氣持ちにさせるので困る。

明治四十年、十一才の頃である。Y・B養育院の指定で、Y町スクーナー建造所へ遣られて以來、私の生活は急に苦患なものと變化し初めた。

重い最新式鋼索、固いマケマケ、コールタかぶれ、夜盲症除けの肝油、浚ひ取らねばならぬ沈澱泥土、上げ下げせねばならぬ丸Sの旗、落さねばならぬ釘錆、是等は皆幼い私に取つての强大な惡魔であつた。

然し、その間にあつて、兎も角、私を深く慰めて呉れた優しい友達が二つ丈でも存在したと云ふ事は、私の大きな喜びであるに相違ない。友の一つは好く磨かれた首ダラ《西洋の銅貨》で、その表面には未だ若いヴィクトリヤ女帝の横顔が刻むであるもの、もう一つは畫顔の葉と枕木の間に暮してゐる小さい雨蛙であつた。休みの時間が餘り靜寂であると、女帝の首ダラは何時も私へ向つて、斯う囁き初めるやうな氣持ちがする――「お前が主人から叱責されて、夜の戸外に獨り立ちすくむでゐた時も、私はお前のヅボンのポケットに底深く沈むで、息を殺してゐた。ヅボンが段々と露に濕つて、私の鋼の表面に見えない程小粒な水滴が凝固し初めても、私は寂しくじつと押し默つてゐたではないか。」

又、雨蛙は私へ向つて何時も斯んな風に語つたやうである――「お前が養育院へ歸らうとしたあの夜、お前は私の事を忘れてゐた。より所もない高みに懸つてゐる月が畫顔の下葉に光りを降り灑ぎ、水氣を含むだ葉で清く濾された青い薄光りが私の背を濕らした時も、私は永遠そのものゝやうに默つてゐた。」

首ダラも蛙も何故斯んなに默つてゐたのであらう。「善い者は默つてゐる。」私は遂に手を打つて、さう感嘆せずには居られなかつたものゝ、實際の所を告げると、之等の小さい者達が何か細い聲で語り合ふと云ふ事の方が、默つてゐると云ふ事より一層自然なやうに思はれてならなかつた。

その後、私は自分の大切な女帝の首ダラを何處かしらへ紛失して了つて、三日間悲しい思ひをした。殘つた唯一の友、雨蛙もその頃何となく弱つてゐたが、然し私は忘れてもこの小さい奴へ肝油を飲ましてやらうなぞとは云はなかつた。《鳥眼に利くとしても、肝油程まづい物はない。》

之等の幻想が私の心の片隅に巣喰つてゐた間は、私も何んなに仕合せであつたらう。けれど次には美しい空想の片影さへ許さぬ、凄じい現實が私を待つてゐたのである。

或る時、私は丸太をかついだ儘足場から落ちて、下にあつた白ペンキの罐をたふし、あの滋養に滿ちた濃い液體を皆泥の中へこぼしてしまつた。と同時に、何う戸惑つたか、鉛のチューブへ這入つてゐる何だか粘り强い褐色の藥品を足で蹈みつぶした爲め、その藥もチューブの尻を破つて、さなだ虫の形に吹き出したのである。

この失態は副主人の恐ろしい怒りを買つた。彼れは、見る見る、太い二本の眉を一本に續けたと思

ふと、其處にあり合せた頑固な鐵槌を取り上げて、砲彈より早く、私の肩先へ打ち卸して來た。《何故彼れが斯んなに怒り易かつたかと云へば、それは大方晝の休み時間に賭博をして、五十圓から負けた爲めらしい。》私は必死の叫びを上げながら、足場の柱を中心にして身を替はしたが、却つてそれが災ひをして、鐵槌は私の胸部へ實にすさまじい勢ひで打ち當つた。

私の倒れかゝる身體は足場の横木によつて支へられたが、元より私はその儘直ぐ氣絶して了つたから、本統の痛みを知覺して、泣き出したのは、それから十二時間も後の事である。

「神は子供に餘り強い痛みを與へるのを憐れに思ひ、そんな場合には、すぐ氣絶させて呉れるのだ。」と、後になつてから或る正直な鐵屑屋が私へ語つて聞かせた事がある。又、實際、「光や」と云ふ小さい女の子がその父親の手で天井へ吊され、背中を皮帶で打たれた時も、あぶり出しのやうに現れて來る痣の事などは少しも知らず、母親の名を呼びながら、忽ち眠るやうに氣絶して了つたのを、私は自分の眼で見達けた記憶を持つてゐる。

《作者註、その急場は一時氣絶してゐて、分らぬとしても、次に起つて來る恐ろしい覺醒を、何うして忍むだら好いであらう。この時、神は子供を獨り置いて、悲しみながら遠くへ飛び去つて了ふのである。》

副主人は自分の暗い室へ私を抱いて連れて行き、面白い象の模樣が付いてゐるサラサ蒲團の上へと

臥かして呉れた。そして慌て乍ら私の手へ五十錢銀貨を三つも握らせたが、それ等は私の手が高熱で顫へるため、鈴のやうな音を立てた。大主人は私を醫師に掛けず、又この不快な事件を養育院へも通知しなかつた。彼れは私の生命よりも、寧ろ「祕密」の方を大切に思つたのである。一方副主人の方はと見ると、彼れは失策の感じを隱すため、態と過度の落ち着きを裝つてゐた。そして後悔してゐる事を人に悟られるのが口惜しいのか「不敵な子供奴が」と云ひ乍ら、自身でも譯の解らぬ笑ひを洩らしてゐた。

私の右胸部は熱と水氣とを妊むで、高く脹れ上つた。その表面は火傷なぞと同じく脈搏と共に痛み、その内部は丁度肋骨で肉を搔き廻されてゐるやうに場所も定まらず痛み續けた。私は明瞭に思ひ出す、私の體の中には無數の刄物が出來て、それが互ひにきしみ合つてゐるやうだつた。

夜が更けてから、一人淋しく目を開いた時、私の頰には止め度なく涙の粒が走つて、痒い二本の筋を描いた。悲しい時には何時もするやうに、私は昔別れた母親の顏を、幼い記憶の中から、無理に引き出して見た。それはかすれた寫眞を眺める樣に、やゝもすると朧氣に消えて、F理髮店の出戻り娘と混り合つたりするので、何んなに努力しても本統の母の顏を捕へる事が出來なかつた。

《後になつてO分監のK醫師が私の身體を檢査した時、彼れは私の右胸部にボート形をしてゐる陷沒のあるのを直ぐ發見した。この不快な痕は二本の肋骨が碎けた爲めに出來たのだ相で、云ひたす迄も

なく、私が副主人の鐵槌をまともに受けた場所なのである。》

第三節

四ヶ月すると、私は獨りで立ち歩きが出來るやうになつた。そして今迄無爲の内に徒食して來た償ひとして、再び仕事場へ出て働かねばならなかつた。けれど私が床をはなれて未だ一ヶ月とたゝない間に、今度は兄弟子の一人がある船夫によつてひどく毆打される有樣を目擊して、自分は思はず大きい聲を上げながら嘆き悲しむだ。兄弟子の頰には見る間に繩目の形をした痣が出來た。船夫はたしかにロープの切れはしをもつてゐたのである。

この時私は祕かに考へた——「さうだ。脫走しよう。そしてお雪さん《そんな女性を私は知らぬのだが》の世話で少年事務員にさせて貰はう。金ボタンの附いた詰め襟の服を着るのは何んなに嬉しからう。ハモニカも習はう。大きい春日饅頭も食べよう。もうその時には干物半ぺらとか、卵半分なぞと云ふ事はなくならう。私は大人のやうに强い少年となつて、卵でも干物でも一個づつ食べる。ポケットには銀貨が澤山餘つてゐる。私はそれをH少年に與へよう。さうすると彼れは私にお辭儀をして「君は偉いですね。」と叫ぶだらう、A君も私の爲めに働きたいと云ふし、D君も私にお禮を述べるだらう。そしたら私は「いゝえ、何でもないのです。」と丁寧に云つて……さうだ此處を脫走しよう。」

心に祕密を藏つて置くのは何と苦しく切ない事だらう。私は時々大急ぎで人の居ぬ裏の方へ廻つては、丈高い草の中にしやがむで、放尿の形ちを裝ひながらコールタのやうな重い吐息をもらすのだつた。傍らの晝顏の蔓は一時間に一回轉の割り合ひで、その首を沈默の内に、そつと動かしてゐた。

靜かな夕方、私から汗をしぼり取つたつらい仕事が終ると、私は自分の足に合ふ位な小さい草鞋を、ペンキ小屋の藁で造り初めた——その造り方を私は以前養育院の小使ひBさんから習ひ覺えたのである。

第四節

逃亡してから二日目の夜更け、私は見知らぬ小犬のあとを追ひながら、山下町へと迷ひ込むで行つた。然しその犬が或る黑板塀の下を潛つて、遠く闇の中へ消え去つた後は、再び新らしい寂寥のために、血も凍るやうな戰慄を感ぜずには居られなかつた。私の恐怖と疲勞とは色々の幻覺と結び附いた。私の心底には痛い錐のやうなものや、人の袖を引き込むで嚙み碎く齒車のやうなものが立ち表れて、私自身を追ひ廻した。私は少しばかり涙をこぼすとは、舌で嘗めずつて、快い鹽辛さを味ひ乍ら、唯だ一人海岸通りの方へ廻つて行つたが、眼も唇も何となく鹽辛さで熱くふくれた頃、丁度コーヒーの匂ひが漂つて來るCホテルの裏門の處で、雪駄を穿いたあの不思議な男に出會つたのである。彼れは私の草鞋を見て、私が田舍から逃亡して來た少年だと思ひ込むだらしく、何だか始めは態と田舍の言葉で話しかけた。石筆で石盤を打つやうな雪駄の音をさせ乍ら、この男は私に明日の朝、米の飯の炊

きたてを奢らうと云つて呉れたが、その上彼れは白い飯の穏かな匂ひや、噴き出す湯氣の綿より柔らかい肌觸りの事や、葱の味噌汁の深々とした辛さの事やらを話して聞かせるのだつた。すると私の耳の下の所は痛くなつて、澤山の唾液が舌の上へ一時に溢れ出した。私はその男の斯んな言葉に造作なく誘はれて、その晩遲く彼れと共に東京へ這入り込むだのである。

翌朝になつてよく見ると、その男は痔性病みらしく、時々矢繼ぎ早に眼を瞬く癖のある、色の黑い奴だつた。軈て飯屋で朝食を濟ますと、彼れは私を本所の富組と云ふ內證の家へ連れて行つた。竿ぶちのない妙な天井を持つたその家に泊つて、不快と不安の入り混つた三四日を暮してゐるうちに、何と云ふ不思議な廻り合せだらう、六疊の方へ一人來、八疊の方へ二人來、しまひには階下へも、二階へも、小供や大人の浮浪人が、殆ど彼等に共通な浮浪者型と呼ばれる顏附きをしながら、三十人ばかりも集つて來たのを、私は見ねばならなかつた。彼等の眼は互ひにくすぶつた焰の如く暗く燃えて、互ひの心持ちを探り合つてゐるらしかつた。鐵の門を搖り動かす音がするので、私は壁の穴から不圖隣室をのぞいて見た。そこには靑黑い顏が上になつたり下になつたりしてゐて、丁度いろは歌留多にある「子は三界の首かせ」と云ふ畫を眞似てゐるやうだつた。と思ふと斯んな陰氣な空氣を悲しむ心もないのか、一人の幽靈じみた男は蹈みしめる度に泣くやうな響きを立てる廊下の上で、全く譯の分らぬ踊りを踊つてゐた。後で考へて見ると、その人達は皆私と同じく路上や公園內で、巧みにだまし込まれ、誘拐されて來た者ばかりなのであつた。一週間後、私は三十五六人の同勢と一緒に、本所の或る停車場へ行つた。一行の者は皆不安な氣持ちに襲はれて、板子で揉まれる風呂の湯の樣に、低調な聲で叱言を呟き乍ら、互ひにその體を押し合つたり、つねり合つたりした。軈て一同は罵り叫ぶ事を絕對に禁じられて後、改札口の方へ進むで行つた。そこで私達は一人の巡査に行き遇つたが、彼れは何も彼も飲み込むでゐる古參者と見え、あわてゝ私達へ背を向けてしまつた。巡査は大概の場合、小さい惡人を好むで懲らしめるが、惡人の親分だと係り合ふのを厭ふものである。私達は午前十時頃出發する汽車に乘り込むで、相生と云ふ所へ達し、そこで足尾鐵道に乘り替へて、午後四時頃足尾の通洞と云ふ停車場へ着いた。

車內で私は隣りに坐つてゐる不思議な仲間と知り合ひになつた。彼れは私が未だ年も少いのに、遠く旅立つて來たのを可哀想だと云ひ、「お前の名は何？」と尋ねて呉れた。私は「〇〇と云ふよ。お前の名は？」と聞き返して見た。「三味線として置かう。」と彼れは案外陽氣に笑つて答へた。この三味線は薄い赤毛を角刈りにした痩せぎすの男であつたが、塀の中に居る猫を、塀の外からでも捕へる祕術を知つてゐると放言したり、汽車の中で人の持ち物を盜まうとするには、腰掛けの下へ幾個所となく焰の立つてゐる硫黃を投げ入れて、知らぬふりをしてゐるがよい、その內旅客達は不快な匂ひを嗅ぎつけて焰の所在を見つけ出し、立ち上つて一騷動するだらう、そのすきに盜みを行ふのだと敎へたり

した。又足尾へ到着すれば必ず硫黄が手に這入るから、二人でこの祕密な仕事を試みようとも勸めて呉れるのだつた。(彼れは硫黄が銅から取れる事を説明したが、之は硫黄と綠青とを混同した思ひ違ひであつたらしい。)

通洞で下車すると、今の先迄優しく親切にして呉れてゐた世話掛りの人達が急に怒りやすくなつたのも不思議な事の一つである。彼れ等は隱してゐた赤い齒ぐきをゴリラの樣にむき出した。物を尋ねても、何かしら地獄の近くへでも來たやうに眉を皺めてばかりゐて、滿足な答へさへして呉れなくなつた。そして侘びしい雨の降る中で、雫の滴る手の指を動かしながら、信號のやうな事をしたり、頭巾を脱いで大きな山へ頭を下げたりした。私はその時始めてだまされた事に氣附いたが、もうこの後悔は全く無益なものだつた。

それから出來るだけ息を殺して歩いて行くと、どこの道からともなく幾人かの親方風の人が現れ出て、私達に行き遇つた。彼れ等は日本人の服裝こそしてゐたが、譯の解らぬ符牒で話すため、何となく未開國の酋長のやうに思ひとられた。私達が地面に龜裂の出來てゐる廣場へ達した時、親方連は長長とした籤を作つて、やがてそれを互ひに引きはじめた。何も樣子の解らぬ私は彼れ等が賭博を開くのであらうと推察した。然しそれは餘りに美し過ぎる空想だつた。私は飢ゑ渴いた注意力を以て事實そのものを直視した時、思ひまうけぬ有樣を發見して、身をたじろがせないでは居られなかつた。親方達は引いた籤の番號に從つて、私達浮浪者を分配し合つたのである。私達は全く人間でなくて、雨と泥にまみれたキャベツと同じやうに冷酷な取り扱ひを受けねばならなかつた。

第五節

私はA・Kと云ふ親方の籤に當つて、その巢窟へ行く事に決められた。この親方は自分に都合の惡い事だと、聾を裝つて白ばくれる簡單な癖を持つてゐたが、その簡單さが子供の私にも餘りに可笑しく思はれたので、彼れを大きな惡人と判斷する事が困難になつた程であつた。

夜が更けて、小さい體を筵の上へ横へた時、私が失望の内に思ひ出したのは、あの親切な「三味線」だつた。彼れは別れ際に私へ向つて斯んな教訓をして呉れたのである——「な、お前、掛け聲丈を大きくして、力を出すなよ。襦袢へは態と砂や鏽を着けて、忙しさうに見せ掛けるのだ。そして悲しくなつたら歌を歌ひな。」何うして忘れ得よう、彼れは斯うしてシィナのキャベツのやうに、黑い雨の中を私とは別の道へ轉がつて行つたのであつた。

翌朝は暗い内に起された。親方は私の着物を引き剝ぐと、彼れの息子の汚い着物を私に着せた。新らしい苦しみはもう私を待ちまうけてゐる。恐ろしい土方の仕事を子供の私が何んな風に仕了せたらう。汗は徒らに流れて、眼の中へ鹽氣をそゝいだ。そして何れが汗で何れが涙かも分らなくなつた。三十日間土方の仕事を働いて後、私は漸く「沈澱」と云ふ仕事の方へ移つた。其處では水中から銅を

取り出すので、私の手は毒に沁みて、リウマチスのやうな症狀を起し初めた。

私は二ヶ月の間、寂寥の底に埋れて、この暑中と云ふに、尙ほ凍死したやうな枯渴を味合はねばならなかつた。その反動は軈て苦しい發熱となつて表れた。何で嘘を云はう。私は口惜しがつて自分から自分の腕をつめりさへした程であつた。

第六節

――坑(シキ)内から人間の腕が二本轉がり出したけれど、それは兩方とも右腕なので、切られた人間は決して一人でないと云ふ話し――煙草を吸つたばかりの男が首を切られゝば、その切り口から煙りが洩れるだらうと云ふ話し――そんな暗い話しを大食の出來る幽靈達（仲間の事）から聞いてゐる内に、不意と私は逃亡の決心をした。それは全く不思議にも一瞬の間に起つた考への變化であつた。けれども今度はスクーナー建造所の場合とちがつて、若し逃亡を仕損じたら、見張り番の手に掛つて殺されねばならないであらう。この恐怖は私の飛び立たうとする兩足を固く縛り上げた。

「一體逃げ出すのが私だと云ふのは事實だらうか。」私の靈は時々自失しかけて、私の肉體にさう質問するのだつた。

私は自分の細腕が坑(ヲカ)外の路傍へ轉がつてゐる有樣や、人々が私の鼻の穴へ牛がするやうな環を嵌め込むで、それを引きずつて行く有樣などを想ひやつては戰慄した。

第七節

秋も深い或る曇つた朝、丁度坑(シキ)内に何か騷動があつて、人々の注意がその方へ向いてゐるのを見てとつたので、私はこれを神の與へた機會であると信じ、遂に脫出を決行した。その際私は知り合ひの人の青い銅山筒ツボを一枚盜み、それにもう一人の人の刷毛とバレン、爆藥の口火等を包むで體へ結びつけた。もし中途で飢ゑたら、これを賣つて食をつながうと思たのである。（あゝ、私の心はもう斯んなにずるく成長して來たのだらうか。）

私は汚い岩の間を這ふやうにして走つた。逆上した額から汗の雫が手の甲へと落ちた。

途中まで來ると、遂に私は一つの難關に出會つた。祕かに岩影から窺ふと、私の目のさきにはもう張り番が横向きになつて立つてゐる。（彼れは赤黑い頭を坊主のやうに剃り、はぜ返つた厚い唇の先で松葉を嚙むでゐた。）私の髮の毛は突き上り、心臟の鼓動は急に止まつた。私は此處で鳩のやうにうめき聲を吐き出すと、その儘落膽して地面へ坐つて了つた。誇張して云へば、全く私の膝關節は蟋蟀のそれのやうに、逆の方向へと崩折れて了つたのである。

私は進退きはまつた。そして張り番の歸つてしまふ夜の八時頃迄、小屋の手前の小さい岩に隱れて、時の至るのを待つた。餘りに小屋の直ぐそば迄來てゐると云ふ意識は私を緊張させるよりも寧ろ自失させた。私は息をはずませてゐるにも拘らず眠氣がさして、口から泡のやうな涎を落した。頭上の際

限もない大空では時々星が流れて消えて行つた。

軈て壓迫されるやうな恐怖の下から魅力的な喜びが噴きだした。闇に紛れながら、私は再び一生懸命に走つた。心臟は足の彈力を受けて高く鳴り、生死の勝負事に勝つたのを祝福するやうだつた。翌日の夜二時頃、私は追手を餘り恐れ過ぎたゝめ、道を過つて、伊勢崎と云ふ所へ迷ひ着き、その又翌日は馬鹿のやうに微笑み續け乍ら澁川と云ふ所へ踏み込むだ。旅の中途では百姓の手傳ひなどもして、一日二十五錢の給料を稼ぐ事が出來た。おゝ、その二十五錢を貰ふ手が何んなに喜びで顫へたかを誰れも知つてはゐないだらう。

第八節

私のやうな放浪の生活を續けてゐる少年の眼は自然と一種の變化を起して、丁度鼠と鳶との眼光を混ぜ合したやうな臆病さと鋭さを表すやうになるのだらうか。町の香具師達はこの眼附きを合ひ言葉にして、そつと私へ近附いて來る。私は前例に懲りてゐるので、一切大人の誘惑者を避けるやうに努めてゐたが、或る日、横濱のN町で、非常な空腹の爲め、足がしびれ初めた時、今度は子供の誘惑者に吸ひ寄せられる廻り合せとなつた。タボと云ふ名のその子は初めの內、態と馬鹿を裝つてゐたが、實を云ふと、その正體も怜悧な方ではなかつた。彼れは頭が勞れてゐると見え、十分に一度位づゝ大きな欠伸をして、それを私にも感染させるので、何れ程私が腹を立てねばならなかつたかは、人々の直ぐ想像出來る事だらう。

簡單に話すと、私はこのタボの世話で、〝S親方の下に使はれる事を取りきめて貰つたのである。S親方と云ふのは眉毛が無い爲め、その部分へ入れ墨をしてゐる妙な男であつた。

大道の商法はジンバイとコロビの二種に分れてゐる。コロビの中には大締めと云ふのもあるが、普通のコロビは三尺とも呼ばれて、仲々六ケ敷いものである。私は親方の指示に從つて、ジンバイの方を習ひ、主に懐中電燈や小供の豆幻燈、その他色々の品を賣つたが、この一ケ年半の間に私が味はつた幾多の經驗は何んなに珍奇で苦患なものだつたらう。《作者註、都合に依り、「花輪印ソースの話」「鬪鷄」「朦朧寫眞屋」その他の部分を省略せねばならない。》で、私は特にその中から、思ひ出すのが嬉しい次のやうな事件だけを引き出して物語りたい。

第九節

彼の女は房のやうな睫毛で形ち好く取り圍まれてゐる怒り易い眼を持つた、年は十六歳の、そしてタボ少年の從妹に當る可愛い娘であつた。その本職は手袋造りだつたが、時にはM小學校が作業教育のために經營してゐる花壇から西洋花を安く仕入れて、それを賑かな町へ賣りに出る事もあつた。或る夜更、黑ダリヤを口にくはへた彼の女は、丁度その時夜店をしまひかけてゐる私の所へ近付いて來たが、何故だか私の事を嫌ひな子だと嘲つた。それを傍らで聞いてゐた蓋口屋の六造さんが、あとで

笑ひ乍ら說明して呉れた事と云ふのは斯うであつた――「あんな女の子は、好きな人に出會ふと、態と怒つて嫌ひだと云つて見るのだよ。」實際さうなのであらうか。この疑問がその奥に何かしら喜びを含むでゐる點から見ても、私がもう彼の女を戀してゐたのは事實である。私はそれ以來、彼の女が膝頭迄出してレース襦袢の洗濯をしてゐる横姿なぞに痛く眼を惹かれ初めた。

この娘は子供達がいづれ通過せねばならぬ重大な一線を既に踏み越えてゐたので、何時も彼の女の云ふ《大人並みの話し》を食物の話しよりも喜むだ。私は彼の女と共にそんな睦しい對話の中で、不思議にも色濃い夢を見通した事を永く忘れ得ないであらう。彼の女は或る晩、二疊の室の中央に下つてゐる電燈を指して、之を蠟燭のやうに吹き消す事が出來るかと私に問うた、私が首を横に振ると、彼の女は「空氣ポンプと云ふもので吸ひ取れば消える。」と神祕相に答へ乍ら、魔女のやうに勿體ぶつた兩手で私の眼をふさいで了つた事なぞもあつた。斯うして置いて、彼の女は私に誓ひの文句「ペイ、イー云々」を三度暗誦させたものである。

夏になると、私は親方の指し圖に從つて、アイスクリン屋に商賣替へをした。私は背が低くて未だ天秤棒を使へなかつたから、乳母車を改良して木箱を取り附けたものへ、全部の荷を乘せては町へ出た、私の使用するミルクは横須賀の軍艦から拂ひ下げて來た、レッテル無しの品だつたが、中味は決して劣等でなかつた。それで代價は十八錢位。空き罐は金魚屋の次郎が一つ五厘づゝで引き取つて呉れた。私が荷を押してS町の街路樹の下迄行くと、必ず私の若い戀人は其處へ忍むで來て、私の車の影に蹲踞むのが常だつた。すると私は別の布巾へ包むで置いた、齒型の一つも附いてないアルミ匙を出して、アイスクリンの一番冷えてゐる部分を彼の女の可愛い唇の中へと注し込むでやつた。そしてこの祕密な儀式が濟むと、彼の女の匙を再び布巾の中へ藏つて、それを私の守り神だと迄思ひ込むのだつた。私はこの大切な匙を時々自分でも嘗めた。

私の斯んな眞實を感謝する爲めに、彼の女は硫酸へ何かしら粉の藥を混ぜた液で彼の女の二の腕を拭つた。すると其處に刻まれてあつた彼の女の古い戀人の名前は跡なく消えて、唯だナマヅのやうな白の斑點丈が殘るのだつた。

この幼い戀に最初の龜裂が生じたのは、確か彼の女がKといふ女工村へ盆踊りを踊りに行つた時であつたと思ふ。實際見たくもない情景である。二圓で買つたヴァイオリンを抱へた彼の女は、首へ赤い絹を卷いた見知らぬ男と一緒に浮かれ乍らT字型の露路を走つて行つた。取り殘された私は全く不愉快になつて氣を紛らす爲めに「牡蠣、驢馬、シャボテン」なぞと意味もない事を叫び廻つた。彼の女は斯うして三日間踊り通したが、彼の女の妹H子《九歲》が丁度その時、學園を脫走して、神奈川で迷子になり、警察の保護を受けるやうになつたのも不思議である。いや不思議は更に先の方迄續いて居た。幼いH子は內側に向いてゐる上齒で唇を嚙み乍ら、警官へ斯う陳述して涙を落した相である。

――「お父さんは金筋入りの帽子を冠り、毎日税關へ出て行くの。家は赤い長襦袢を着た姉さんの澤山居るお女郎屋の近くで、二階を借りてゐますの。」

警部も巡査も町家の人も貰ひ泣きをした。仲にはH子へ五十錢惠むで呉れた車夫もあつた。然しK學園からの訴へに依つて、惡いH子の虚僞は悉く曝露し、口車に乘つた巡査は今更のやうに齒噛みをした。――おゝ、税關へ勤めてゐるのはMちやんの叔父ではないか！　――此の事があつて以來、私はH子をも私の戀人をも氣味惡く思つて、警戒し初めた。

其の後續いて起つた種々な理由のため、遂に私の戀は最後の破綻を見なければならなかつた。私は或る大雨の夜、露路の奥に立ちすくむでゐる彼の女を、青い稻妻の閃きによつて發見した。彼の女はそのハイライトのない黑眼に後悔の色を浮めてじつと私を見詰めたが、もうその時、稻妻は消えて、烈しい雨が私の睫毛を濡らすばかりであつた。

第十節

失戀の悲しみが却つて私をあの親切な眼鏡商人Y氏へ接近せしめたのは自然の成り行きと言はねばならぬ。

Y氏が私の親方と種々交渉を重ねた後、私を自身の店へ引き取つて呉れるやうになつてから、事態は急激な變化を見せた。私の新しい主人は少し變人ではあるが、然も深い同情心を持つた四十歳程の獨身者で、その上耶蘇教徒（教會へ出ず、聖書のみに賴る）だつたから、私の身の上を哀れに思つて、許す限り眼を掛けて呉れた。彼れは私に小學教科書や算術を教へ又聖フランシスがその弟子に胴胴めぐりをさせた話しなぞをも興味深く物語つて、行く末の事を思ひ煩はぬ諦めへと私の心を近づけた。

第十一節

この主人に救はれてから、私の内部には異常な變化が起つて來た。生活が平安な事は私に一種懐郷病のやうな淋しさを感じさせ、食慾があつて味覺がないやうな、不滿と焦躁とを呼び醒ましめた。そして私の心底には自分が決して本統の自分なのではないと云ふ考へが色濃く附きまとふやうになつた。あゝ平和な時間が悲しいとは何事だらう。この惱ましい謎は段々深く暗くなつて來て、遂には神經の上へ一つの病氣をさへ引き起こさせた。――私は店の上りガマチの上へ立つて、事に依つたら自分が此處から落ちるのではないかと危ぶみ初める、すると足が顫へ出して、幾ら抑制しても、必ずタタキの上へと落ちて了ふのである。――然しこの痛ましい病氣の事を私は何うしても主人へ告げる勇氣がなかつた。何故なら此の事が主人に解れば、店を追ひ出されるだらうと危ぶむだからである。思つて見るに、私は子供の身でありながら、既に枯れ葉のやうなものであつた。此處彼處と當てどもなく飛び散つては、人の足に踏み碎かれたが、その賞讃す可き結果と云へば、斯んな病氣以外の何物でもなかつたのである。

第十二節

その當時、私の心底に起つた複雜な屈曲は、何んな暗い色にでも感じ得るやうな微妙な寫眞機を以てしてさへ、尙ほ寫し出す事が出來なかつたらう。まして斯んな形もない心の樣子を私自身の口から何んな風に說明し得よう。然し次のやうな些事を私の心持ちの斷片的な表れと見る事なら私にも容易く出來るに相違ない。

タボの友達、S君は繼父と實母の間で、面白くない日を暮す十四歲の少年だつた。彼れの實母はもう死病に取りつかれて、吸はれて了つた蜜柑の房のやうになつてゐたので、繼父も全く諦めたらしく、藥を買つて飮ますのさへ面倒がつてゐた、實母は死に際に到來物の金柑を一粒食べたいと嘆願した。けれど父親は何う云ふ譯か、病人に望みの食物を與へる事を拒み、却つて彼の女を足蹴にしたばかりでなく、例の金柑を自分の馴染み女の所へ持つて行かうとしたらしい。S少年は之を傍らから眺めてゐたが、いきなり顫へ立つて、父親の頭を足駄で毆打し、氣絕したと見ると、その上、鼻の穴と穴との間の肉を鋏で切り開いて了つたと云ふのである。

S少年の罪が恐る可きものであつたに拘らず、私は何うしても彼れを憎む事が出來なかつた。私は思はず涙ぐみ、そして「死んで行く者に金柑の半分丈でも好いから食べさせたかつた、」と云ふ考へを、私の主人Y氏へ物語つた。と、その瞬間に主人の相貌は蒼白となつたが、鬱て重い口を切つて、斯う

答へて呉れたのを私は決して忘れない。「母の無いお前でも、尙ほ母を愛する事丈は知つてゐる。」後になつて解つたのであるが、私の主人と云ふのも幼い時から母親を知らぬ人だ相であつた。

私の心に不足してゐるものは何であつたか？　それは母から愛される事よりも寧ろ母を愛する事であつたに相違なかつた。《作者註、初戀を經驗して以來、少年の心底には他を愛する感情が發達して來たのである。》

第十三節

若しも主人の鄕里鹿兒島で、彼れの父親の死去と云ふ事さへ起らなかつたら……然しそれは私の慾深過ぎる願ひであらう。神は止むを得ない事情で私と主人との間を割いたのである。

主人は去る一月の二十日、私に留守宅を委すと、夜行列車で鄕里へと立つた、その後の三日間と云ふもの、何んなに私は行儀よく小さい店を管理し、夜十時になると、堅く戶閉りをした事だらう。然し四日目の朝、私が豫想さへしなかつた樣な非常に不快な事件が起つて來たのを何う說明しよう。

その時不意と店頭へ步み寄つたのは、私が小商ひをして居た頃の、一寸した友達、Kと云ふ者であつて、彼れの耳輪は惡人の象徵と云つて好いやうな波動形をなしてゐたし、その上銀貨を口の中へ入れてしやぶる惡癖を持つてゐた。力の强いKは私が一人でゐるのを見て取ると、直ぐ店へ上り込み、私の制止も聞かず、陳列棚にあつたボツシユロムの老眼鏡を自分の眼の上へ掛けた。私が心をたじろ

がせてゐる間に、彼れはキネト眼鏡の把手を逆に廻して見たり、それから奥へ駈け込むで行つて、主人が大切にしてゐる看板用の佛蘭西人形を抱き締めたりした。これが一切のものを混亂せしめたあの爆發の導火線であらうとは私もまだ氣附かなかつたが……最後に彼れは硝子棚の上にある葉卷の小箱から五十錢銀貨十二三枚を盜み出し、その半分を私の前へ撒き散らした。

その翌日私は心勞のあまり、又してもあの神經的な病氣を再發させた。Kは昨日盜むだ金員で、私が未だ見た事もない西洋菓子を買ひ込むで來てゐたが、それを私にも食べさせて、彼れ自身の罪を半減させようとする露骨な心が見えすいてゐるので、私は昨日よりも一層烈しく憤つた。私が齒をかみしめて彼れを拒むだにも拘らず、彼れは柔かい菓子で私の唇と鼻の穴をふたいだ。呼吸がつまる苦しさに、私は思はず唇をゆるめた。すると、あゝ私の飢ゑた舌は悲しい事に、もう一種微妙な甘味の浸入を味覺したのか、厚ほたくふくれて持ち上つて來た。Kは幾つかの口論の末、私に簞笥の鍵を要求した。私は勿論それを拒絶してやつた。すると彼れは懷ろから出した蠟シンコを簞笥の鍵穴へ押し込むだので、型を取られては……と危ぶむだ私は大聲を立てながら彼れの腕を引搔いた。茶色眼鏡、小形硝子砥、駝鳥の卵殼、羊皮、羽毛遮光臺、舊式驗眼器、それ等は皆各々の場所を亂し、倒れ、碎けた。

Kは又しても十圓紙幣を數枚盜むだ。然し私は最早彼れに抵抗する力を失つてゐた。鑛を地に引き擦るやうな音が私の耳に錯覺された。後頭部は打擊を受けたやうに痺れ初めた。Kが店から逃亡した後、まだ晝の三時と云ふに、私は夢遊病者の如くよろめいて店の戸を閉め、暗い室内の中央へ倒れた。「契約の箱」の模造品に附いてゐる天使セラビムとケラビムとは上からじいつと私を見下してゐた。然し私はたゞ天使達を眺め返してはゐられない。私は狼と虎とに追はれる子供のやうである。遁れる影を知らずに、唯だすくむでゐる裸の小鼠のやうである。愚か者！　主人に申し譯がない。彼れからは恩を蒙つてゐる。恩？　いや主人の怒り――それを思つて見ねばならぬ、怒りとは？　ハンマアで肋骨を破る事か？　碎ける。息が止まる。私は顫へた。泣いた。もう何うあせつても間に合はない。電燈がついた。何故だらう。私の鼻には主人の體臭が錯覺される。それに……いや、私は考へる力を失つて行く。驢馬、獨樂、紐、鞭、そんな名詞ばかりが心の表面へ浮び、そして飛散して了ふ。

私の記憶の中に殘らない八時間が斯うして過ぎた。恐らく私はその間に、例の懷鄕病的な悲愁と、自分の過失と、失神に近い或る氣分を交互に感じたらしい。張りつめた空虛――そんなものがあるとすれば――を私は胸一杯に滿たした。それは眼を見張りながらする眠りと同じものであつた。いや、私の斯んな說明は皆想像から出てゐる。實際私自身にさへ見えぬ心の闇を、何人が何んな言葉で形容し得よう。

私の手は自然に動いた。私はそれを靜止せしめる事も、より早く働かす事も出來なかつた。手は私の意志に依らず、もつと大きな自然そのものに依つて動いてゐた。私の心は既に私以上のものと變化

して、「ハンマア、肋骨」とも、「過失を消し去る爲めに」とも考へはしなかつた。それにも拘らず手は、おゝツバメマツチをすつて、息づく焔を障子に近附けた。縱四分の天井は直ぐ黑い衣のやうな燒け焦げの手を四方へ廣げ、煤は蛸のやうに足を振つて、橫樣に舞つた。

この時、私は初めて我れに歸つたらしい。洗面器の水を取り上げようとする拍子に、障子は燒け倒れて、私の足へ打ち當つた。焰は自ら風を呼び起して、私の頭上にフイゴのやうな響きを渦卷かせた。

第十四節

斯うして四棟、九戸が燒失したと云ふのは一體本統であつたらうか？

私は泥の垂れるやうな醜い生活の中で、漠然とではあれ、本能的により善い方へ昇らうとする意志を推し進めて來た。そして危機に次ぐ危機の下をくゞつて、私は私の內にも外にも世界の終りを感じ、あの凄慘な硫黃の煙りを飲み續けた。一つの苦しみが他の苦しみに叛逆した。そして自分は落ちた。今迄經驗した何んな闇より一層深い闇の中へ……。

その後、私は——實に申し譯ない事である——主人に會つた。彼れは憂ひの爲めに肩を將棋の駒より固くして、黑い手袋の中の指をふるはせてゐた。主人の友人で、蝗蛔派の新會員A法學士は（その時主人と同行して來たが）私の過去の來歷に就いて細かい注意を傾けて呉れたばかりでなく、私の胸部に刻まれた、あのボート形の傷痕を、不圖した拍子に襟元から覗き込むで、「之がスクーナー建造所の……」と囁き乍ら二三歩退くと、最も深い理性から發する眞面目な眼光を私の顏に降り灑いだ。「この子は罪を犯す前に、罰を受けて了つてゐる。」彼れはこの言葉を半分丈呟くと、早い速度でふくらむで來る涙の粒を、最早睫毛で支へ切れなくなつて、顏を背けた。私は決して忘れまい。之が私の爲めに泣いて呉れた最初の人で、又恐らく最後の人であつた事を……。

第三章

附錄

——未だ發明されぬ新しい醫術——

該少年の罪に對して、多少とも眞に近い批判を加へようとする者は、必ずこの傳記から、幾つかの諦認を引き出して來なくてはならない。第一の諦認とは何か？　それは彼れの一時的な精神錯亂が恐らく遺傳に因るものでなく、工場の副主人から毆打されて氣絕した時、足場の橫木へ頭部を强く打ちつけた事に原因してゐると云ふ點である。《A醫學士は此の事を熱心に主張し、幾多の證明をなした。然しO分監の方ではこの邊の事情を個性調査書から省略してゐる。》

第二の諦認とは何か？　それは彼れの精神的缺陷がその少年期には外部へ表れず、性質の變改が烈しく行はれる思春期に近づいて、長い潛伏を破り、漸くにその萠芽を發生せしめたと云ふ點である。

然も斯る變化が親切な眼鏡商人の手へ引き取られて後、突發したのは、何と云ふ悲劇的な結末であつたらう。我れ等はこの事實に對して烈しい悲愁を禁じ能はぬものである。

頭部の骨腫なぞが原因して、不道德性の發生した場合だと、巧みな外科的手術に依つて病根を絶てば、不道德性も直ちに消散する。然し打撲に依る內部の故障は現代の醫學が近附くを許さぬ暗い深淵であり、解き難い謎の堆積と云ふより他はない。其處で刑務所が手術室の代用をつとめねばならぬと云ふやうな暗愚な結果を見るのである。悲嘆す可きではないか。監獄が醫學の代償物であるとは何事だらう。我れ等の智力がそれを爲す爲めには餘りに低劣であるとは云へ、尙ほ且つ醫學的知見の擴張に依つて、刑務所の庭を狹める努力を一日も怠つてはなるまい。我れ等の云はむとする第一事項は之であつた。

――未だ發明されぬ新しい教育法――

最近歸朝したB教育視察員は斯う語つた――「佛國の教育は舊式で、ルツソーを生むだ國柄とも思へない。米國の教育施設は立派であるが、教育その物は大きい長所と共に大きい短所を持つ。露國の教育は不完全であり、トロツキーが「子供をより善くしよう。」と論じた事も空言に近い。獨逸の教育は詰め込み主義を保持し、英國の教育は昔の割合に發達しない。その間にあつて、日本の教育は先づ中庸を得てゐる。」

然し中庸と云ふ事が、無氣力、不誠實の代名詞に轉ずるのは極めて容易である。

捨てゝ置いても字を讀めるやうになる子供へ、字を教へる事を、現代に於いては教育と云ふ。捨てて置いても道義の心を起し得る子供へ、道德を吹き込むのが我れ等の教育である。

多くの教育家は『子供一般』と云ふ形ちもない概念へ向つて『教育一般』と云ふ古い定規をあてがつて見る丈である。

過失を犯す弱い人間に鞭を當てる人は澤山居る。然しその前に每日の如く過失を犯してゐる教育そのものゝ缺陷に向つて鞭を上げようとする人は居ないのか？

「稚態を脫せよ。友よ醒めよ。」この絕叫を再び新しく我れ等の世界に蘇へらす者は誰れであらう。誰れでもない。我れ等全體である。

何處かに新しい教育の方法が隱れてゐる。我れ等は未だそれを捕へる事が出來ない。この方法は恐らく心理學や醫學や人類學に關聯を持ち、外部からの撰擇や排除をなす事なしに、尙ほ內部から優生學の役目迄も演ずる。其處に初めて『教育の奇蹟』と云ふ言葉が許容され、『教育されねば善くなり得ない不幸な子供』の爲めに、新しい福音が稱へられる。

それは何時の事か？　我れ等の努力はその『何時』を軈て今日にも替へ得よう。然し我れ等の不誠實はその『何時』を明日とさへなし得ぬであらう。